ドラゴンクエスト　ダイの大冒険Ⅱ

だいまどう

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「さらば！愛する地上よ」の５年後を舞台に大冒険が帰ってくる！

目次

太陽の子 1
アバンの使徒、再び 4
ベンガーナの街で 7
伝説の大魔道士 10
少女の記憶 13
危機 15
ＧＩＲＬ，Ｓ×ＴＡＬＫ 17
気球に乗って 20
国王、アバン 24
ダイの意志 27
望み 30
約束 33
備えあれば憂いなし 37
破邪の洞窟へ 39
契約と誓い 41
ポップの挑戦 43
万事休す…？ 45
契約完了！ 48
ドラゴンの杖 51
ダイの姿をさがして 54
背中 57
暗闇 59
夕陽に 62
沈黙 65

精霊ルビス 67
竜達との邂逅 69
真実 72
凍てついた心に 75
殿（しんがり） 78
人間でも魔族でも 81
魔界へ…… 84
ラーハルト、悩む 87
人間だって 90
竜の娘 93
激昂 96
逆鱗 99
地獄の底 102
咆哮 105
逆襲 108
瓦礫 112
夢の跡 114
おかえり 116
祝宴 119
友だち 122
勇者の休日 125
おいでませ！つやつや温泉郷―― 129
～温泉街のポプマ～ 132
～湯けむりポダポ～ 135
～ドキ??ドキ??メルル～ 139

犯人を探せ 143
one step closer 149
怪物小僧 156
ただいま 159
こころ 163
隊員たちの砦 167
動き出す歯車 172
不滅の魂 175
揺れる世界 180
生きるもの 185
進化の秘宝 188
泥沼 192
卑怯者 195
窮鼠猫を噛む 198
新生！竜騎衆 202
地の穴 206
騎士の掟 209
魔界のマグマ 212
魔界、再び。 216
チームプレイ？ 220
動揺 223
火の粉 226
月夜 228
涙 230
砂塵 233

悪魔 236
再生 239
マー君 243
異形 246
稲光 249
器 251
黄金の悪夢 254
命の尊厳を 257
武人の意地 260
狼煙 263
想いをつなげ！ 265
金の筒 268
世界の果てで 270

太陽の子

――ダイが地上から姿を消し、５年の月日が流れた。
かつてバーンパレスがあった場所には勇者達の偉業を讃える石碑が作られ、そこは多くの冒険者が訪れる名所となった。
王宮の兵士達は子供たちに自分がいかに勇敢にモンスターと戦ったかを語り、吟遊詩人達は竪琴を掻き鳴らし、街角でアバンの使徒達を讃える歌を歌った。
既に戦いは過去のものとなり、魔王軍の脅威は、人々の記憶から薄れ始めていた。
――平和になった、と言ってもいい。
ランカークスの街はずれ――
街道を離れ、横道に逸れたところにある坂道を降りていくと、猟師小屋がある。
そこから反対側に広がっている森の中を5分も歩けば、人目を避けるような形で建てられた粗末な小屋が見えてくる。
小屋の煙突からは時折り真っ黒い煙が噴き上がり、中からひっきりなしに金属を叩く音が響いていた。
音が止んだと思った矢先、怒声が聞こえてきた。
「違う！」
ノヴァは４年程前からここでかつての魔界の名工、ロン・ベルクの身の回りの世話をしながら、鍛治職人の修行をしている。
「どこが違うんですか！」
煤で顔を汚した全身汗まみれのノヴァが声を荒らげた。
「全てが違うのだ！」
一事が万事、この調子である。
ロン・ベルクは短くため息をつくと、鋭い調子で続けた。
「いいか、魔界の金属は扱う者の魔力に呼応して伸び縮みする性質がある。だから常に集中して魔力を一定に保たなければならない。お前はそもそも魔力をコントロール出来ていないから集中が途切れるのだ――」

「そんな事言っても、ボクは……魔族とかじゃ無いですし」
　ロンはちっ、と舌を鳴らすと、苛つきを抑えるように一呼吸置いて口を開いた。
「じゃあやめるのか。弟子入りしたいと言ってきたのはお前なんだぞ」
「やめるなんて誰が言ったんですか!!」
　その時、立て付けの悪いドアがギギッと音を鳴らし、隙間からポップの顔が覗いた。
「おっ！さっそくやってんな！」
　ポップはそう言ってニカッと笑うと肩でドアを押しながら小屋の中に入り、腕に抱えた木箱をドン、と床に置いた。
「おう、ご苦労だったなポップ。さっそく見せてもらえるか」
「ああ」
　箱を開けると、中には鈍く光る赤い鉱石のようなものが詰まっていた。
「これだけ有れば十分だ。無理を言ってすまなかったな」
「――ポップさん、お久しぶりです」
「おおノヴァ！どうだ？お師匠さんにビシバシ鍛えられてるみたいだけどよ」
「それが……なかなかうまくいかなくて」
　頭をかきながらノヴァが言うと、ロン・ベルクがため息をついた。
「――ポップからも何か言ってやってくれ。こいつはどうも根気が足りなくてな」
「え!?いや、うーん……だ、大丈夫だろ！ノヴァだったらよ……」
　かつての自分の姿を思い返したポップは曖昧な返事をした。
「俺の手さえ動かせれば……」
「おい！ロン！それは言わない約束だろ。こいつだって精一杯やってるんだぜ」
「――とにかくだ。魔鉱石も手に入ったことだし、ダイを見つけられるかは、ノヴァ。お前の腕に掛かっているのだからな」
「はい！絶対にやり遂げてみせます」

ノヴァが真剣な表情で答えた。
「おっ！頼もしいぜ！じゃあ……俺も行ってくるか！」
ポップは軽くふたりに手を振り、小屋をあとにした。
――人々は大魔王が倒された時、陽の光の下で、再び堂々と自分の人生を謳歌できるようになった事を喜んだに違いない。
しかし、一部の者たちの中では太陽は沈んだままだった。
その兆しが見えるまでは――

アバンの使徒、再び

〜1週間前〜

「ポップ！お客さんよ！」

階下からスティーヌの声がした。

「（誰だよ……まだこんな時間じゃねーか……）」

眠い目をこすりながら階段を降りると、毛むくじゃらの大ネズミの頭が見えた。

フサフサのモップのような尻尾に見覚えがある。

ネズミは咳ばらいを一つして、顔を上げると、ぎろりとこちらを睨んだ。

「こんな時間まで寝ているとはいいご身分だ」

「おっ!!お前チウか!?おおー！久しぶりだなぁ〜！」

（ふっ…僕のあまりの凛々しい変貌ぶりに驚いているな。背も伸び、がっしりと逞しくなったこの……）

「うわ〜！お前全然変わってねぇな!!」

（うっ……！フフフ……か……彼は洞察力が人より劣っているのだったな……無理もない――）

「何でこんなとこまで来たんだよ？お前デルムリン島にいたんじゃなかったのか？」

「君は何も知らないんだなぁ。まぁ無理もない。いつの間にかこんなところで使命を忘れ、ぬくぬくとしていたんだからな」

「なんだと！お前だってどうせブラスじいちゃんにメシでも作ってもらってぬくぬくと暮らしてたんだろ？」

（うっ……！鋭い……）

「それに、ダイを探すって使命を忘れた訳じゃねえよ――」

ポップの顔が曇った。

しばしの沈黙――

チウは少し気まずくなったのか、咳払いをひとつすると捲し立てた。

「き……君にはマァムさんという人がありながら、メルルさんと3人

で旅をするなんて破廉恥な行為をするから……見つかるものも見つからなかったんじゃないのか？　というか……まだマァムさんを諦めずにちょっかいを出してるんじゃないだろうな？この破廉恥魔法使い！」
「へえへえ。何とでも言ってくれよ。で、何か話があるんだろ？」
「うむ。アバン先生から連絡があってね。アバンの使徒を集めて欲しいそうだよ。みんな5年前に旅に出てしまって行方が分からなくなっていたからね」
「でも、フローラ様もアバン先生も国を空けるわけにはいかない。で、少し前にデルムリン島にカール王国から使いがやってきたんだ。ブラスさんは年だし、ヒムちゃんとかクロコダインだと何かと目立って良くないだろう？そこで機動性に優れ、優秀な頭脳を持つ僕に白羽の矢が立ったという訳だよ。やはりみんなこういう大役は僕じゃないと務まらないと思ったんだろうねえ……」
　そう言ってチウは目を細めた。
「なんだ。ただの使い走りじゃねえか」
　ポップがボソッと呟くと、チウはムキになって言った。
「うるさい！君を探すのにも結構苦労したんだぞ！行く先々の町で旅人の噂に聞き耳を立ててだな……」
「優秀な僕は、ポップ君の事だから、きっと泣いて故郷に逃げ帰っているんじゃないか、と推理をしたんだが、まさかその通りになっているとはね…！」
　腕組みをしたチウがチラリとポップの顔を伺うために振り向いた。
　しかし、ポップは窓の外を見ながら、寝癖がついた前髪をいじっている。
「こらーっ！人の話は最後まで聞けーーっ!!」
「お前ヒトじゃねえだろ……」
「――で、アバン先生の用事ってなんなんだ？」
「うむ。ダイ君の事みたいだったな」
「……！」
　ポップの手が止まった。

少し戸惑った様子で振り返る。
「お前……今ダイって言ったのかよ!?」
「そうだ」
「あいつが……ダイが……」
ポップは拳を握り、ソワソワと落ち着かない様子で部屋の中を右往左往している。
「何かダイ君についての手がかりが見つかったのかも知れないな」
「こうしちゃいられねえ!どこに行けば良いんだ?カールか?マァムやヒュンケルは!?」
「そう慌てるな。他のみんなの居場所は知ってるのか?」
「マァムはネイル村だな。姫さんは良いとして、ヒュンケルは……知らねえ」
「そんな事だろうと思ったよ」
チウがため息をついた。
「――姫さんならヒュンケルの居場所を知ってるかもしれないな。うん。きっとそうに違いねえ!」
「じゃあ僕は確かに伝えたぞ。みんなによろしくな」
「おう!任せとけ。ありがとな!」
窓から入ってくる秋風が、棚の鉄枠に無造作に結んであるアバンのしるしと黄色いバンダナを揺らしていた。

ベンガーナの街で

2日後――

ポップはマァムとベンガーナの城下町を歩いていた。

パプニカと海を挟んで向かいにあるベンガーナ王国。

かつてここはギルドメイン大陸いちの経済大国として隆盛を誇っていたが、5年前の度重なる魔王軍の襲撃のせいで壊滅的な被害を受けた。

しかし、国王クルテマッカⅦ世による、この5年間の国を挙げての復旧作業の甲斐もあり、この王国はかつての景観を取り戻しつつあった。

王国のシンボルであるベンガーナ百貨店も営業を再開しており、街をゆく人々の表情も心なしか明るい。

レオナ姫と待ち合わせをする事になっていた2人は、ベンガーナ城に向かって歩いていた。

「――ただベンガーナってだけで、具体的にどこの場所とか全然言わねーんだもんなー」

「でも、レオナだったらなんとなく会える気がするから不思議ね」

「やっぱり城に行ってみようぜ。王様に連絡くらいしてるかもしれないし」

こうしてポップとマァムが一緒に歩くのは、以前メルルと共に旅をした時以来だ。

だが、不思議とお互いに懐かしさは感じない。

一緒にいるのが当たり前のような、家族以上に深い絆で繋がっている感覚がある。

マァムは少し髪が伸び、以前より表情も穏やかになった気がする。

幾分女性らしい雰囲気が強くなった、という感じだろうか。

近況を報告しあいながら、ポップの心は浮き足立っていた。

「昔さ、姫さんとダイと俺でデパートに来た時の話なんだけど……」

ポップはデパートから沢山の荷物を抱えて出てくる女性客を横目に、隣にいるマァムに声をかけた。

「ダイの野郎、何でも買っていいって言われて、すげえカッコいい鎧を買ったはいいけど、あいつちっちぇだろ？　着てみたらでかいわ重いわであいつ全然動けねーでやんの」
「あはは。なんかダイっぽいわね」
「あのちっちぇ体でよ、あいつなりに精一杯頑張ってたんだろうな」
「なぁマァム」
「うん？」
「俺、何て言ったら良いかわかんねーんだけど……　この5年間……なんていうかさ、生きてるって感じがしなかったんだ。時が止まっちまってる……って言うか」
「――私も同じよ」
　少し間を置いてマァムが口を開いた。
「母さんや村のみんなと過ごす時間は本当に穏やかで、楽しくて、子供時代がまた戻ってきたみたいですごく嬉しかった。みんな私が帰ってきた事を喜んでくれたし、私に優しくしてくれて、労ってくれて、幸せだったわ」
「――でも、だんだん自分がこうして毎日を過ごしている事に違和感を感じ始めてしまって……私だけこんなに幸せに過ごしていて良いのかな、っていつからか、心のどこかで思うようになってた」
　――ポップは黙って頷きながら聞いている。
「ダイがいなかったらこの平和な暮らしはなかったのよね。もちろん、今でも必ず帰ってくるって信じているけど……」
　とても長い沈黙の後ポップが口を開いた。
「ダイがいない世界なんて俺はいやだ」
「好きなものを守ったからって、みんなの太陽になったからって、それが何だってんだよ――　あいつが本当に望んでた事って何だったんだよ――こんな事だったのか――違うだろ!?」
　ハッと我にかえるポップ。
「――なんか……わりい。取り乱しちまった」
「――ううん、いいの。きっとみんなダイの事が好きなのよね」
　そう言ってマァムは微笑むと、思いっきり伸びをした。

「最近なんか身体がなまってる気がする」
「へぇ」
少しだけ大人っぽく見えるマァムがポップには眩しく見えた。
彼女の中できっと他にも何か変化があったのだろう。
――昔と変わらないように見えるマァムの横顔をじっと見つめていると、ポップの心の中が少しだけザワザワした。

伝説の大魔道士

「そういえばさ、お前……最近ヒュンケルの野郎には会ったか？」
「うん、この前ね」
（げっ……！あるのかよ）
「ブロキーナ老師に会う用事があって、ロモスに行ったんだけど――途中の森でばったりヒュンケルに会ったの」
「へ……へぇ～」
「老師が住んでいる山の麓にはケガや病気に効く温泉があるのよ。彼、きっと湯治に来てたんだと思う。少しは自分の身体を気遣うようになったみたいでちょっと安心したわ」
（か……彼!?）
　ポップの顔が引き攣っている。
「もう魔王軍も攻めてこないし、無茶をする事も無いだろうけどね」
「ああ、そ、そりゃ～良かった……よな、うん!!」
「なんか……聞かなきゃよかった」
「えっ？」
（しまった……！心の声がっ！）
「いや、何でもねえよ！ハハハハ」
　橋の袂にさしかかり、重厚な城壁に囲まれたベンガーナ城が目前に聳え立った。
　城の敷地内に戦車が見える。
　どうやら動いてはいない様だが、数十台はあるであろう戦車が威嚇するように砲台をこちらに向けている様は嫌でもこちらの緊張感を高める。
「なんかパプニカなんかとは大違いだよな。城に入るのにこんなに緊張する事なんか無かったぜ」
「そうね。平和になったっていうのに何でかしら」
　しばらく橋を歩くと城門が見える。
　槍を構えた門番が２人。

「これ……俺たち入れんのかなぁ？」
「そうねーポップは入れてもらえないかもね」
「なんでだよ！」
　ケタケタとマァムが笑う。
　門番がこちらに気付いた。
「お前達、ベンガーナ城に何の用だ」
　マァムが先に口を開いた。
「私達、５年前に大魔王と戦った勇者ダイの仲間です。パプニカ国のレオナ姫とここで待ち合わせをしているのですが、お城に入れて頂くことはできますでしょうか」
　門番たちは顔を見合わせ、何やら小声で相談している。
「あなた方はマァム様と……ポ……ポッポ様ですね」
「はい」
「王よりその様な方が来られたら通すようにと言われています。どうぞお入りください」
「ありがとうございます」
　城の中に入り長い廊下を歩く。
　しばらく無言の２人だったが、ポップが先に口を開いた。
「――ってか、なんでオレの名前だけ間違えんだよ！」
「あの門番なんなんだよ！ポッポってなんだよ！オレはハトか！」
「良かったじゃない。ポップひとりで来てたら多分牢屋に入れられてたわよ」
「一文字違いで」
「うるせぇ～!!」
　マァムが口を押さえながら爆笑したいのを堪えている。
「大魔王バーンだって……オレの名前を間違えなかったぞ!!」
「ふはっ……フフッちょっとやめてよ……!!」
　マァムがついに堪え切れなくなって笑い出した。
　腹を抱えてピクピクしている。
　廊下を通り抜けると赤い絨毯の間が現れた。
　両脇に槍を持った兵士達が怪訝そうにこちらを見ている。

「よくいらっしゃいました。王様が御二人にお会いしたいとのことです」
「ご丁寧にありがとうございます」
まだ少し余韻を引きずっているマァムは顔を元に戻しながら答えた。
「――ポッポ様も長旅お疲れ様でした」
思わずマァムが吹き出すと、ポッポ、いやポップがイラついた様子で口を開いた。
「あのなぁ～！オレの名前はポップ！大魔道士ポップ様だ！」
「そ……それは……！大変失礼いたしました……!!」
敬礼する兵士を見た途端、マァムはもう限界だと悟ったのか、顔を伏せ微かに震えた――

少女の記憶

大きな窓のある応接室に通された2人は、豪奢なソファに腰掛け、王が来るのを待った。
案内をしてくれた従者の話によると、どうやらレオナは気球でここに来るらしい。
普段はあまり使わない半分物置きのようになっている部屋だが、この方角からだとパプニカ方面がよく見えるとのことだ。
日はまだ高く、大きな窓から差し込む光が、部屋に佇む2人の影をくっきりと映し出している。
「しかしすげえ椅子だな～」
ポップとマァムは背もたれに身体を埋めると、顔を見合わせた。
「ベンガーナってなんか私、好き。みんなセカセカしているけど、気取ってなくて」
「オレは嫌い」
マァムが微笑むと、後ろでドアが開く音がした。
ひとりやって来たベンガーナ王は眉間にシワをよせ、難しそうな顔をしている。
威圧感の塊のような顔を近づけ、2人の顔を代わる代わる覗き込むと、にっこり微笑んで言った。
「やぁ！来たな！伝説の勇者たち！ようこそベンガーナへ！」
「まぁ……勇者はいねえけど……」
「もちろん、儂は君らの勝利を疑わなかったよ！でも本当に世界を救ってしまうとはな！我が国の民も皆、ダイ君を初め、君らの事を英雄と崇めておるよ」
微笑むマァムの隣で、ポップは5年前の強すぎるダイに怯え泣いていた街角の少女のことを思い出していた。
彼女は今どうしているのだろう。
あの子もダイの事を英雄だと思っているのだろうか。
大魔王バーンやマトリフの言葉が頭をよぎる。
ダイが帰ってきたなら、きっとこの町の人々は喜んで迎えるのだろ

う。
　でも、当のダイがこの場にいたら一体どう思っただろうか。
「ポップ何考えてるの？」
「いや……ダイと来たかったな、って思ってさ――」
「そうよね。みんな歓迎してくれたでしょうね」
「ああ、そうだな」
　その時、外から兵士の声が聞こえてきた。
「パプニカ方面より気球が接近中！」
「レオナだ！」
　２人は窓に駆け寄った。
「窓の横のドアからバルコニーに出られるぞ」
　王が部屋の隅の暗緑色のドアを指差した。
　ポップがドアを開けると、ドアの隙間から強い光が差し込んできた。
　２人は思わず目を閉じる。
　薄目を明けつつ、そろそろとドアの外に出ると、ふたりの目に山々の稜線と吸い込まれるような青空が目に飛び込んで来た。
　そして遠くにはエメラルドブルーの海――
「うわぁー！」
「綺麗！」
「考えてみたら向こうは南国なんだよな。」
　空を見上げると遠くに薄く白い点が見える。
　気球か鳥かよくわからないくらいの大きさだが、だんだんと近づいて来ているような気がする。
　王が何か手を挙げて合図をした――
　数秒後、地響きのような音が鳴りはじめた。
　ゴゴゴゴゴゴゴゴ……
「何……!?この音……」
　マァムが不安そうな顔で呟いた。

危機

状況が掴めない2人はあわてて音の発生源を探した。
注意深く辺りの様子を伺いながらバルコニーの縁まで行き、地上に目をやると眼下に戦車が見えた。
城門に入る時に見た戦車とおそらく同型のものだろう。
丸みを帯びたフォルムに紋章のようなものがデザインされている。
よく見ると、砲台がゆっくりと動いているのが分かった。
さらに見続けていると、砲台はどんどん角度を上げ、上空を向いて静止した。
砲台の先にあるのは…
「やべぇ!・まさか!」
「大変!!」
「王様は一体、どういうつもりなんだよ!!」
辺りを見回したが、ベンガーナ王の姿はない。
気球はどんどん近づいて来ており、そのシルエットがはっきりと見えている。
「やべぇ…やべぇよ!!」
「なんて事なの…」
逆光になって細部が見えにくいが、なんとなく籠に乗っている人物が手を振っているようにも見える。
2人の緊張がピークに達した時、
「どーーーーーーーーーーん!!!!」
耳元で爆音がした。
「うわあああああああああ!!!!」
後ろを振り返るとそこには、ふざけた顔をしたベンガーナ王。
立ち尽くす2人をよそに王は続けた。
「大成功!!いやー!・戦車も今はこんな事くらいしか使い道がなくてのう〜!・弾はだいぶ前から抜いてあるから安心せい。ワッハッハッハ」
呆気に取られる2人。
ポップが下を向いてわなわな震えたかと思うと、唾を飛ばしながら

怒鳴った。
「訳の分からねえことするんじゃねえーーー！この糞じじい!!」
ポップは王に飛びかかったと思うと、関節技をかけながら何か喚いている。
「すまんすまん！ほんのジョークのつもりだったんじゃよ」
「やめて！ポップ！王様よ！」
「それに、おまけに部下に変な名前教えやがって!!」
「いや…それは何のことじゃ!!」
「とぼけんじゃねーよ!!」
「やめてーーー!!」
大きな影が3人を覆った。
後ろから懐かしい声が聞こえる。
「おーい！ちょっとー!!何やってんのよみんな！」
振り返ると気球から降りて来たレオナが、腕組みをしながら呆れた顔をしている。
彼女はパプニカ王家の紋章入りのマントを翻し、バルコニーの縁まで歩いて行くと、下にある戦車に目をやった。
レオナはこちらに向き直るとため息をつきながら言った。
「もう！まだこんな事やってんの!?――2人ともゴメンね。私はやめろって言ったんだけどね……ホントに呆れた王様よね！」
レオナに冷たい視線を浴びせられ、しょんぼりしているベンガーナ王を無視して、レオナは2人の元に駆け寄った。
マァムとしっかりと抱き合い、ふたりを見て言った。
「2人とも元気だった？」
「おう！もちろんだぜ！」
「元気よ！レオナは？」
「私もよ。パプニカの王女としての仕事は大変だけどね」
昔と変わらないレオナの笑顔が太陽に照らされていた。

GIRL，S×TALK

「よく抜け出して来れたわね」
「私が抜け出すのは王宮のみんなももう慣れっこだから。あと、今回は事情が事情でしょ？」
「あと……レオナ、すっごくキレイになったわ！」
「ホントに!?うっれしー!!」
「確かにこう……なんか色気が増したっつーか、大人の階段を登り始めたっつーか」
「あんたは黙ってなさい」
　マァムがポップの後頭部をどつくと、すかさずレオナがマァムの手を取り、小走りでバルコニーの端にある小屋の陰に連れて行った。
　周りに誰もいない事を確認すると、レオナは小声でマァムに聞いた。
「ポップとはどうなの？あれからなんか進展はあった？」
「キスくらいはしたの？あっ……もしかして……」
「いや……何も変わってないけど」
「えっ何で!?一緒に旅とかしてたんでしょ!?」
　思わず大声になってしまった事に気付き、ハッとして手で口を押さえるレオナ。
「そうなんだけど……あれから何となくうやむやになっちゃって…」
「あー、メルルもいたもんね。それは難しいわよね」
「でも2人っきりになる事もあったでしょ？」
「そうだけど…なんか2人っきりになると何も話せなくなっちゃって……ケンカならいくらでもできるのに」
「かーっ！もうなんなの……」
　頭を抱えるレオナ。
「分かった。やっぱりヒュンケルの事が気になってるんでしょ!?本当に優柔不断なんだから」
「別に……そういう訳じゃ……」
「あー！そういうところ！もうじれったいなぁ……」

ポップが裏側で耳をダンボのようにして聞き耳を立てている。
（くそ……全然聞こえねえ……）
「レオナはやっぱり……その……ダイが――」
マァムが言いかけると、レオナはそれにかぶせるように早口で言った。
「まあ、私くらいの美貌だと毎月のように色々な国の王子からラブレターが届くけど、毎回読まずに捨ててるわね。お見合いって柄でもないし、まだ私は自由でいたいの……ほら、仕事も忙しいし、今は仕事が恋人っていうか？」
（やっぱりダイの帰りを待ってるんだ……）
マァムは心の奥がじん、と熱くなった。
ポップは柱に耳を当てて、体全体で会話を聴き取ろうとしている。
ポップは、離れたところから2人にじっ、と冷たい目で見られている事に気がついた。
「あっ……！」
「何？聞いてたわけ？」
「いや……あーこれは……その……」
「変態」
「ドスケベ魔道士」
「マトリフ2号」
女子ふたりが軽蔑の眼差しを浴びせながら口々にポップを責め立てた――
「いや……！何も聞こえなかったぜ！信じてくれよ！」
「ちょっと!!やっぱり聞こうとしてたんじゃない!!」
「絶対許さない」
「あんた、アバンのしるし返しなさい」
マァムがそう言うと、観念したのかポップは土下座して頭を垂れた。
「わ……分かったよ！す、すまねえ……」
ポップを取り囲む2人の女子――
そして、見張り塔から双眼鏡越しにそれを見ているベンガーナ兵士

（なんだあれ……？）

気球に乗って

ポップ、マァム、レオナの3人はベンガーナを出発し、北西の方向に向かった。
「気球に乗るのなんて久しぶりだぜ」
「気球ってこんなに気持ち良い乗り物だったのね。眺めも良いし最高！」
「ふふ。前にみんなで乗った時は景色を見る余裕なんかなかったものね」

「ほら！ポップ！あそこランカークスじゃない？」
マァムが東の方角を指差した。
「こんな高いところからじゃよく分かんねえけど、言われてみればそうかもな」
「あっ！ポップのお母さんが手を振ってるわよ！」
「えっ!?本当か？どこだ？」
「ほら！あそこにいるじゃない！」
気球のカゴから身を乗り出すと、ポップはマァムが指差す方向を必死に追った。
「えっ？どこだよ？」
「ふふふ。ウッソー！自分でこんな高いところからじゃ分かんない、って言ってたじゃない」
マァムがゲラゲラ笑っている。
「お……お前!!ふざけんなよな!!さっきからバカにしやがって!!なんだ？まだベンガーナの事、根に持ってんのかよ！」
「はぁ？騙されたからって何よ！」
「お前が重すぎるからこの気球、スピード出ねえんじゃねーのか？」
「……ポップ、もう一度言ってごらんなさい（ポキポキ）」
（……こわ……）
「お……おう！何度でも言ってやらあ!!お前のケツの重さのせいで高度が下がってんだよ！だからお前にはかーちゃんが見」

ガッ!!!
マァムの肘打ちがポップの下顎に綺麗に決まった。
ポップはカゴの縁に引っかかったまま気絶している。
「ホントに……いつまでもガキなんだから」
気球の操縦をしていたレオナが振り返った。
「ちょっと2人とも!!仲がいいのは良いけど、あまり揺らさないで!気球の操縦ってけっこうシビアなのよ!」
「あっ……ごめんなさい……」
マァムが恥ずかしそうに下を向くと、先ほどよりいくぶん穏やかな調子でレオナが続けた。
「気を抜くと、変な方向に行っちゃって戻って来れないわよ。――ちなみに、だいたい今飛んでるところの真下がテランかなぁ。うっかり見過ごしちゃいそうよね」
「メルルにも会いたいなあ――あの子、テランにいるの?」
「多分いないと思うわ。あの子、そこまで故郷に未練とかないみたいだったし……この前一緒にポップと3人で旅をした時も、私達は旅をするのが性に合ってる、って言ってたから、多分今頃はナバラさんとどこか別の国にいるんじゃないかな」
レオナは納得顔で頷いた。
「そうかー。テラン国王も高齢で王国の存続自体も危ういみたいだしね……メルルもまだ若いし、あんな老人ばっかのところにいても面白くないわよね。パプニカに来れば素敵な出会いがあるかもしれないのになぁー!」
レオナはわざと語尾を強調して言うと、ポップの様子を伺った。
――ポップはまだ目の焦点が合わずフラフラしている。
話を聞いていたのかどうかはよく分からないが、無視してポップはレオナに訊いた。
「話は変わるけどよ、姫さん、アバン先生とは会ったりするのか?」
「うん。アバン先生も今やカール王国の国王でしょ?国際会議なんかでたまに見かけるわよ。まぁ……だいたい見ると居眠りしてるんだけどね」

ポップとマァムが同時に吹き出した。
レオナが嬉しそうに続ける。
「で、フローラさんに叩き起こされたりしてる」
「ハハハ、なんか想像つくぜ」
「アバン先生、国王って柄じゃないもんねぇ」
ポップもマァムも心から可笑しいらしい。
「あの夫婦は奥さんがしっかりしてるからうまくいってるのよね。あーあ。なんか――そういうのって良いわよね……」
レオナが少し寂しそうにそう呟くと、マァムはいたわるような表情で言った。
「レオナも絶対、素敵な人と夫婦になれるわよ。フローラさんも長く待ったけど、結局はいちばん好きな人と一緒になれたんだから――」
「そうね……ありがとうマァム」
レオナは少しだけ寂しそうに微笑むと、一呼吸おいてから話し始めた。
「あっ、そういえば、ヒュンケルのことだけど――言ってなかったわよね」
「あいつ今どこにいるんだ？」
「エイミが知ってるみたいだったから、居場所を聞いたのね、そしたら」
「そしたら？」
マァムが身を乗り出した。
「教えられません――って」
「はぁ――――っ!?」
ポップとマァムが同時に叫んだ。
「彼は今、体力が充実していて、心身の鍛錬に集中したい大事な時期なんです。彼の方には私から伝えておきます、とか言われてね……」
「勝手に女房ヅラかよ……」
ポップはつまらなそうに悪態をついた。
「私もなんて言おうか迷ったんだけど、あの子の事は信頼してるし、まぁ良いかなと思ってね……」

マァムは口をぽかんと空けている。
「だから多分、ヒュンケルにも今回の件は伝わってるはずよ――――
さあ、もうすぐ着くわ。うまく風に乗れると良いけど――」
遠くにカール王国の旗が揺れている――

国王、アバン

気球は徐々に高度を落とし、カール王国東の平野に降り立った。
「無事に着いて良かったー」
「まったくだぜ……」
伸びをするマァムを横目に服のホコリを払いながらポップが言った。
カール王国の城の裏手をしばらく行った所にある丘の崖の上、ひっそりと主人の帰りを待つようにダイの剣がある。
岩に刺さっている剣を囲むように咲いている花たち。
その中で一際目立つ薄橙色の雛菊は、かつてアルキード方面に自生していた品種だという。
この剣はカール王国とテラン王国が共同で管理することになっていた。
しかし、実質的に機能していないテランは名前だけの存在となっており、主にカール王国がその管理を担っていた。
２週に一度は花の手入れをし、剣のホコリを払い、以前と変化がないかをつぶさに観察した。
そして、これは国王アバンの大切な仕事のひとつだった。
カール王国方面に向かって３人が歩いて行くと、遠くで煙が上がっている事に気がついた。
どうやら誰かが焚き火をしているようだ。
微かに何かが焦げる匂いも流れて来る。
さらにしばらく歩くと、火の側に佇む男のシルエットがはっきりと見えてきた。
――特徴のあるカールしたグレーの髪、がっしりした背中――
そして、軍服のような物を纏っている。
「アバン先生！」
ポップとマァムの目が輝いた。
２人が叫んで駆け出すと、焚き火の主はこちらを振り返った。
「おっ！遅かったじゃないですか。待ちくたびれちゃいましたよ！」

そう言ってアバンは弟子たちに手を振った。
「お久しぶりです！」
「先生、お元気でしたか」
「元気でしたよ。ポップ君もマァムもしばらく見ない間に精悍な顔つきになりましたね」
久々の再会を喜び合う４人だったが、呼ばれた理由が気になって仕方がないポップは早々に話を切り出した。
「アバン先生……ダイの事……」
「そうですね――さっそくお話ししましょうか」
「――と、その前に、大事な話があります。」
３人は息を呑んだ――
「焼き芋食べませんか!?」
ドッとズッコケる３人。
「秋は美味しい食べ物がいっぱいで良いですよねー！」
ゴソゴソと木の枝を焚き火に突っ込むアバン。
「みなさん、長旅でお疲れでしょう。サツマイモはデンプンに包まれているので、加熱してもビタミンCが失われにくいんです。疲労回復や肌荒れにも良いんですよ」
「あっ…はい」
マァムは差し出された焼き芋を受け取ると、
一口頬張った。
「美味しい!!」
「でしょう?さあさあレオナ姫もポップ君もどうぞどうぞ」
焚き火の周りで皆で焼き芋を頬張っていると、赤とんぼがアバンの肩に止まった。
「おや?君も焼き芋に興味があるんですか?」
「先生、焼き芋も良いけど、何で俺たちを集めたんです?」
ポップが指を舐めながら言った。
「そうそう、ダイ君の事でしたね」
「百聞は一見にしかずです。まず皆さんに見てもらいたいものがあります――」

３人はアバンに連れられてカール王国に足を踏み入れた。
街ゆく人々に気さくに挨拶をしながら、カールの街中をずんずん城に向かって歩いていくアバン。
――そしてその後ろを着いていく３人。
「アバン国王の後ろにいるの、大魔王を倒した勇者の仲間じゃないか？」
「えっ？本物？」
「あんなにかわい子ちゃんがいたのかい？」
「やっぱり凛々しいわねぇー！」
「うちの息子とお見合いしてくれないかしら……」
街の人々が噂をするのを聞いて、レオナとマァムは恥ずかしそうに下を向いている。
「ほら！あの子！なんだっけ魔法使いの…！」
「そうそう！大魔道士の、あの…」
ふふんと得意げな表情をするポップ。
「ポッポ!!」
ガクッと肩を落としたポップを見て、後ろの２人が何やらヒソヒソ話をしている。
レオナが走り寄り、半笑いでポップの肩を叩いた。
「ポップ君！気にすることないわよー！伝説っていうのは伝聞されていくうちにどんどん細かい所が間違って伝わったりするものよ！」
「まだ５年前だけどな……」
「おっー！ポップ君、大人気じゃないですか！」
アバンが嬉しそうに笑う。
一行がカール城が近づくと、アバンを見つけた門番達が敬礼をした。
アバンが城の隣の小径を指差すと、門番の１人が頷いた。

ダイの意志

カール城の外側にある小径は、城の正面からは目立たない場所にあるが、草刈りがきちんとされ、道はタイルで舗装されていた。
アバンは少し歩くペースを落とした。
「私は柄にもなく一国の王などというものをやっていますが、やはりこんな私でも迷う事があるんです。心がモヤモヤして、自分がやりたい事がわからなくなったりね。そんな時、よくここに来ます」
「もし、ダイ君なら、彼なら、何て言うかな？とここでひとり、自問自答するんですよ。すると、ダイ君と話しているような気分になって、いつの間にか気分が楽になっているんです。私の心の中の、彼の人懐っこい笑顔が迷いを洗い流してくれるんですね」
「おかしいでしょう？アバンの使徒から教えられる事は多いとはいえ、一応、私はダイ君の師匠なのに、これではいけませんよね」
3人はじっとアバンの話に耳を傾けている。
「だから、私は少なからずショックを受けましたよ。これを見た時はね」
丘のふもとにたどり着いた4人はダイの剣がある方を見上げた。
ポップが一気に駆け上がった。
息を切らしながら、頂上で見たものは――
ない――
ダイの剣が、ない。
「……！」
ポップは驚き過ぎて声が出ない。
誰かに壊されて盗まれたというような雰囲気でもなく、荒らされたという訳でもなく、ただきれいに抜けて無くなっている。
これまで何人もその剣を抜こうとした者がいるのは知っているが、どんな力自慢のものが抜こうとしてもびくともしなかったという。
あの大魔王バーンの胸に刺さったまま、最後の瞬間まで抜けることのなかったあの剣が、そう易々と抜けるものではないことは、ポップがいちばん分かっている。

その剣を抜ける者は…
「おい!!お――――い!!ダイ!!居るんだろ!?!!お前なんだろ!?」
「返事してくれよ!いつ帰ってきてたんだよ!!水臭えじゃねえかよ!!」
ポップは気がつくと大声で喚いていた。
崖から四方八方に向かって大声でダイを呼んだ。
が、返事はない。
「ダイ君はまだ帰ってきてはいませんよ」
後ろからアバンの声がした。
「何度もリリルーラでダイ君の気配を探ってみましたが……たどり着かず、最終的にここに戻って来てしまうのですよ」
「そんな……でも、現に剣は無くなってるじゃないですか!」
「ダイ君が帰ってきたのではなく……剣がダイ君の元に帰って行った、と考えれば辻褄が合いませんか?」
「それは……」
後からレオナとマァムがやってきた。
「これって一体どういう事!?」
マァムが走り寄り、剣が刺さっていた辺りの砂を手で払いながら叫んだ。
「なんでダイの野郎、剣なんか……!もう大魔王も居ねえっていうのによ!」
「理由はわかりませんが、剣がダイ君の意志に反応したと考えれば、今ダイ君には剣が必要なんだと思います。大魔王は居なくなりましたが、邪悪な存在はこの世から消えたわけではないですから」
「もし、そうだとして……じゃあ俺だってダイの助けになりてえよ……それって、アイツが困ってるって事だろ?」
「だって、ダイは戦いたいなんて思ってるはずねえんだ!!これまでだって仕方なく、勇者だから、自分がやらなくちゃいけないからってだけで…本当は戦うのが好きな訳じゃねえんだよ、アイツは!でもよ……どこに居るのかも分からねえんじゃ…」
座り込んでいるレオナが泣き出しそうな声で言った。

「なんで……ダイ君……戦いなんてやめちゃえば良いじゃない。もう、頑張る必要なんてないのに。地上が好き、って言ってたじゃない」

背後から声が聞こえた。

「いや、ダイがどこに居るかわかるかもしれないぞ」

望み

声の主はロン・ベルク。
彼は言い終わると、腰を落とし剣が抜けた跡の孔に触れた。
「今回の件はチウ君からランカークスにいるロンにも伝えてもらっていました。彼はダイ君の剣を作った張本人ですからね――ロン、どういう事か説明してもらっても良いですか」
アバンが言うと、ロンはゆっくりと立ち上がりポップ達の方に向き直った。
「――ダイの剣は知っての通り、ダイの魂を通じてダイの意志に反応し、自ら考え、動く性質を持っている。という事はやはり、剣はダイが持っていると考えるのが自然だ」
「でもリリルーラではダイ君を探せなかったんでしょ？」
レオナが涙を指で拭いながら言った。
「リリルーラの使用範囲は術者の魔力に比例する。通常の使用ではルーラと同じくらいの範囲の移動しかできん」
「でも前にアバン先生がキルバーンと決闘した時、異空間からバーンパレスに戻ってきたわ――」
今度はマァムが聞いた。
「おそらく、それは異空間などでは無いはずだ。キルバーン程度の魔力では相手に幻を見せる事は出来ても、本物の異次元空間を作り出す事など出来はしまい。バーンパレスの中の何処かにそれらしい空間を演出していただけだろう」
「――あの使い魔の方がいれば、キルバーンが術を解いても私に異空間の幻覚を見せ続ける事は可能だったでしょうからね」
「――ダイの剣の宝玉は、それ自体がダイの竜の騎士の力で増幅され強い魔力を持っている。そして、それに共鳴できるような大きな魔力を持つものでなければ、持ち主を探し当てる事はできん――ダイの剣が失われた今がチャンスなのだ。ダイの魂と共鳴するような大きな魔力を持った者がリリルーラを使い、ダイと共鳴する事ができれば、理論上はダイの元へ行くことができるだろう。ダイのいる場所がど

こであろうとな」
「ほ、本当かよ！じゃ……じゃあ！」
「しかし、再びこの地上に戻って来れるという保証もない。魔力を封じ込められたり、力が尽きてしまえばこの世の狭間で永遠に彷徨い続けることになるかもしれん」
一同が息を飲んだ。
「前に言ったかもしれんが――やはりダイがいる場所は地上ではない。そもそも人間が足を踏み入れることが出来る場所ですらないかもしれんのだ」
ロンベルクはそう言うと、崖の向こうに目をやった。日没が近づき、空が色付き始めている。
「それでも行くと言うのなら、協力しよう。アバンの使徒であれば、リリルーラの契約も恐らく可能だろう」
「分かった！オレが行く！」
ポップが力強く言った。
「そもそもアバンの使徒でルーラ系呪文は俺しか使えねえ。それに……前にダイが氷河の中に閉じ込められて行方不明になった時、氷の中で俺の声が聞こえたらしいんだ。その時、ダイの剣は間違いなくあいつの近くにあった。剣が共鳴したのか、紋章が反応したのかは知らねえ。ただ、俺はあいつと2人で何度も奇跡を起こして来たんだ――」
「ポップ――本当に良いんだな？」
「おう！俺はあいつと黒の核晶もろとも地上から消えるつもりだったんだ。今更どうなろうと怖くなんかねえよ」
「ポップ……」
「そんな顔すんな！心配ねえよマァム」
「アバン先生！良いですよね？」
アバンはしばらく考え込んだ後、口を開いた。
「きっと、私が止めても行くのでしょう？」
無言のポップ――
「わかりました。危険だと思ったらすぐに帰ってきて下さい。もしそ

れが無理でも、少し時間はかかるかも知れませんが、私が必ず助けに行きます」
「はい！」
「また私はダイ君の助けにはなれないのね……」
　レオナが肩を落とした。
「何を言っているんですかレオナ姫。あなたはダイ君が地上に戻るかどうかの最後の希望なんですよ。彼が地上に未練があるとすれば、それはあなたの事でしょう――自分の愛に、ダイ君との絆に自信を持って、どんと構えて待っていてください」
　レオナはアバンの口から不意に愛という言葉を聞いて狼狽したが、すぐにいつもの顔に戻り、しっかりと頷いた。
「ねえ、レオナ。私達も……出来ることをやりましょう。せっかくダイとまた再会出来るかもしれないチャンスなんだし」
「そうよね。マァムの言う通りだわ。出来る限りのことをしましょう！アバン先生お得意のあれ、よね。」
「ジタバタしか出来ないなら、ジタバタしましょう、ですか？」
「そうそう！俺もジタバタしてやるぜ！地上でいちばんジタバタする男になってやるさ！」
　夕陽に笑い声がこだまする。
　アバンの使徒達に、ようやく笑顔が戻ってきた。

約束

ロンベルクの話では、リリルーラの効果を最大限に高めるためには、対象者との共鳴を図る際に高水準の魔力を維持し続ける必要があるという。

また、もし相手が強く共鳴を拒んだ場合でも、相手との強い繋がりを象徴するアイテムや、相手の持ち物と共鳴しやすい素材などを身につける事で、精度は下がるが、相手がいるエリアの探知くらいまでは可能になる、との事だ。

まず必要なものは魔鉱石。

魔鉱石はダイの剣の宝玉に使われている鉱石で、

魔力を蓄積、放出する性質がある。

ダイの剣では、持つものの魔力を闘気に変え、武器そのものの威力にフィードバックする効果を果たしていた。ダイの剣に使っているものは、覇者の冠に散りばめられていた装飾用の宝玉を溶かして錬成したものだ。

ポップはあちこちの鉱山を周り、魔鉱石の情報を集めた。

魔鉱石は深い地層に僅かにしか含まれない、とても貴重な素材であり、王宮の古い宝物庫の外壁や祭事用の道具などで僅かに使用例があるが、現在では採掘をしている場所は殆ど存在しないという。

「あんなに探してこれだけかぁ」

ポップは手の平大の赤銅色の鉱石を見つめて言った。袋に石をしまい、森の木陰に寝転ぶと、様々な過去の出来事が頭に浮かんできた。

子供の頃いじめられ泣いて家に帰った日のこと。

アバンの弟子になりたいと言って殴られ、こっそり荷造りをした夜のこと。

マァムに初めて出会った時のこと。

親父みたいに強くなりたかった。

大事なものを守れる男になりたかった。

ハッと気づいたポップは梢から漏れる光を瞼に感じながら、目を開けた。

「まだ聞いてないヤツがいたぞ」
そう呟くと立ち上がり、ルーラで飛び立った。

「ただいま」
「おう」
「相変わらず客が少ねえなあ」
店の隅に溜まっている埃を手で払いながらポップが言った。
「お前らのお陰でこちとら商売あがったりだぜ」
ニヤリとするジャンク。
店番をしている父親にポップは事の次第を話した。
「なんだ、最近おまえ忙しそうにしてると思ったらそういう事だったのか」
「なんか知らねえか？親父ロン・ベルクと仲いいんだろ？」
「ついてこい」
ジャンクはカウンターの奥のドアから物置に入ると壺や陳列用の什器、地図などをどかし始めた。
「おい、ちょっと手伝え」
２人で古い机を動かし、床の埃を払うと、蓋のようなものが見えた。ジャンクが両手で蓋を持ち上げると、地下へ続く隠し階段が現れた。
「こんな所に部屋なんかあったのかよ」
「覚えてないだろうが、お前小さい頃よくここで遊んでたんだぞ。一度、母さんがうっかり忘れて蓋を閉めちまってな」
「あっ、ちょっと覚えてるかも」
「あん時はお前、カンカンに怒ってずっと母さんと口をきかなくてな。大変だったぜ。まぁメシの時間までだったけどな」
「母さんそそっかしいからなぁ」
「あの頃は客も多かったから、昼間はお前と遊んでやる暇もなくてな。母さんも忙しかったんだろうよ」
木製の階段を降りて行くと、小部屋が現れた。
子供の背丈くらいの本棚には絵本が並び、
側にある箱には縫いぐるみや人形、おもちゃの刀などがパンパンに

詰まっていた。
無造作に箱に突っ込まれていた絵本をポップは手に取った。
「うわー！懐かしいなこれ！俺、この本すごい好きだったんだよな」
絵本の表紙には「まほうつかいのでし」と書いてある。
ポップはゆっくりページを捲った。
みなしごの弱虫の男の子が、意地悪な魔法使いに弟子入りし、３つの魔法を教えてもらう。
途中で出会った小さい男の子のお母さんを助けるために、その魔法を順番に使いながら困難を切り抜け、冒険の末にドラゴンを退治する、という物語だ。
「どれだったかな…」
ジャンクが部屋の隅にある箱をひとつずつ開けて何やら探している。
この物語の最後、家族がいなくて寂しかった主人公は、小さい男の子ときょうだいになり、３人で楽しく暮らす。
ポップは、主人公が小さい男の子とシチューとパンを分け合うシーンが好きで、よく母親にシチューを作って！と頼んだ事を思い出した。
「あった」
ポップが振り向くと、ジャンクは箱をドンと床に置いた。
「開けてみろ」
ポップが蓋を開けると、箱の中には赤銅色の石が沢山入っていた。部屋のランプの灯りを反射して鈍く光っている。
「これって…!!」
ジャンクは余っている木箱に腰掛け、汗を拭った。
「昔、ロン・ベルクが俺はもう使わないからって俺に預けてきたんだよ。あいつ忘れてんのかな」
「お前がアバン先生の弟子になるって家を飛び出した後の話だ。持っていく所に持っていけばかなり高く売れただろうが、いつかきっとこんな日が来ると思ってな」
「なんだよ、それ。魔族って長生きすぎて忘れっぽいのか？」

「どうだろうな。一緒に酒を飲んだ時、お前の事を話したんだ。その時、お前の息子が俺が認める世界一の魔法使いになったら必ずこれが必要になる、って言ってたな」
「……」
「ほら、これがいるんじゃないのか。早く持ってけ」
「ありがとよ！親父」
ポップは箱を抱えて、後ろを見ずに階段を駆け上がった。

備えあれば憂いなし

ロンベルクに魔鉱石を渡したポップは、もと来た山道を石ころを蹴飛ばしながら歩いていた。
「あとは、リリルーラの契約だよな…俺、契約できっかな…」
アバンによれば、リリルーラを契約したのは破邪の洞窟の地下２０階。
今のポップのレベルであれば問題なく到達できるだろう。
ポップはミナカトールを使ってバーンパレスに乗り込もうとした時、アバンのしるしが自分だけ光らなかった事を思い出していた。
「やるって言ったのは俺だけど、今回も責任重大だな…」
ポップはぐっと両方の拳を握りしめた。

一方、カール王国――
王の間の奥の部屋からフローラの声が聞こえる。
「それじゃポップ君は契約できないかもしれないって事!?」
テーブルの紅茶のカップが揺れた。
「いえ…そんな事はないと思いますが、一抹の不安があるのです」
「誰か別の使徒が行くというのはダメなの？」
「レオナですか…彼女は確かにアバンの使徒の1人ですし、契約ができる可能性は高いでしょう。そうは言っても一国の王女です。事情を話したら間違いなく王宮全体から大反対されるでしょうね」
「それは…そうよね」
「それに、いちばん今回の役目を務めたかったのは彼女だったでしょう。でも自身の立場を省みて名乗りを挙げられなかったのだと思います。その気持ちは汲み取ってあげる必要があると思います」
「もう！私が行けたらどんなに良いか…」
「そういう問題じゃないんですよ」
アバンが慌てて制した。
「わかりました。私に考えがあります」
アバンが胸を張った。

――数時間後、ポップはカール王国の王宮にいた。
「えっ？俺が着るんですか？カールの法衣を？」
ポップは薄いワンピース姿の自分を思い浮かべ、げんなりした。
「いえ。そのまま着るのではありません。何枚も重ねてマントにするのです。この素材は軽いですが服の上からつければブレスや攻撃呪文の威力を軽減してくれますし、あらゆる属性を隠し…ゴホンゴホン。あらゆる属性の攻撃を軽減します」
「属性って？暗黒闘気とかそういうやつですか？」
「だいたいその様なものです」
「地下２０階までに出てくるモンスターの種類を聞いた限りだと、そんな装備が必要だとは思えないんですけど」
「ポップ君。何事も”備えあれば憂いなし”ですよ。このアバンもあの洞窟では何度も危険な目に遭いましたからね」
「そうですか…」
「さあ！このマントを着てみてください！」
言われるがままアバン作の破邪のマントを装備したポップは鏡の前でヒラリと回ってみせた。
「おっ！アバン先生！これなかなかカッコいいじゃないですか！ちょっと動きにくいけど」
「そうでしょう！よく似合っていますよ！それとこれも持っていってくださいね」
アバンは魔法の聖水をポップに手渡した。
「道中、魔法力が足りなくなっては困りますからね」
「先生、なにもここまでしなくても」
「ポップ君」
「わかりました」
アバンの圧に押されたポップは、釈然としない思いを抱えつつ、破邪の洞窟に向かった。

破邪の洞窟へ

破邪の洞窟地下１Ｆー

「おっ。お前ら久しぶりだな」

飛び付いてくるスライムを無造作に足でどかしながらポップは洞窟を進んでいく。

「しかしアバン先生、やたらと心配してたけど…２０階って言ったら、出てくるモンスターって言っても、せいぜいさまようよろいとかゴーレムだって言うし。先生も歳を取って心配性になったのかな？それとも俺が強くなりすぎちまっただけだったりして」

角を２～３回曲がり、大小いくつかのトンネルを潜ったが、まだ下に続く階段は見つからない。

「まだ地下一階だよなー。こりゃー意外と骨が折れる仕事かもしれねえぞ」

洞窟内はそこまで複雑な構造ではないが、曲がりくねった道が多く、かつ曲がり角ごとに魔物が飛び出してくる。

宝箱は既に開けられているものが多く、たまにキメラのつばさや薬草が手に入るくらいで、モンスター自身もほとんどアイテムを落とさない。

洞窟内をしばらく進んで行くと不意に広い場所にぶちあたった。ひと休みしようかと思ったポップだったが、何かを思いついた。

「よし、イチかバチかだ！」

ポップは洞窟の地面に向けて両方の掌を向けた。

「おっと、威力を加減しねえとな」

「……ベタン!!」

ーーーーー

地鳴りが起き、洞窟全体が揺れる。

ポップの手から猛烈な光と共に衝撃波が巻き起こる。

衝撃波は地面をえぐり、瓦礫とともに吸い込まれる様に地下に消えていった。

「よし、これはうまくいったな」

ポップは鼻を擦ると、呪文で開けた穴の縁に這いつくばり、下の様子を伺った。下の階の地面まで見たところ6～7メートル。どうやら2～3階分ほど下まで穴が続いていそうだ。
「狙いどおりだ。これでラクできそうだぜ」
穴から落ちて地面に足が着く瞬間、一瞬軽くトベルーラを使い、安全に着地する。このやり方でポップは順調に下へ下へと進んでいった。
たまに驚き戸惑った様子の魔物と目が合う。
「へへへ。あいにくお前らの相手をしてるヒマなんかないんだよーだ！」
ポップが何度目かに地面に掌を向けようとした時、上からパラパラと小石の様なものが落ちてきた。
「ん？」
ポップが上を向くと、天井の穴のはるか向こうから先の尖ったツララのような大岩がいくつか猛烈な勢いで落下しているのが見えた。
「ぎょえええええええええ!!!!!」
絶叫して思わず飛び退いたポップは壁際に向かって死に物狂いで犬のように地面を這って逃げた。
背後で轟音がし、恐る恐る振り向くと、岩がぎりぎりポップの背中をかすめて地面に刺さっている。
絶句するポップ。
「こんな所で全滅したら一生の恥だぜ…」
「うん…同じ場所に穴を開け続けるのはやめよう……うん」
真っ青になりながら階段を降りるポップ。

破邪の洞窟地下１５Ｆ－

契約と誓い

破邪の洞窟地下２０Ｆー

「イオラ！」

さまようよろいとホイミスライムがポップの放った閃光の中に消えていく。

ポップは額の汗を拭うと迷宮を歩き続けた。

「もうだいぶきたな…そろそろってとこか」

道幅の広い真っ直ぐな道を進んでいくと急に視界が開けた。

遠くに地底湖に囲まれた小島が見える。

湖ぎりぎりまで近づくと、中央に石造りの祭壇のようなものがあるのがわかった。

湖の周辺を見回してみると、反対側にある橋から小島に渡れるようだ。

橋を渡った所から祭壇までの道の両脇に燭台が並び、ひとつひとつに明かりが灯されている。

「ここに違いねえな――」

橋を渡りポップが祭壇の前に立つと、どこからともなく声が聞こえてきた。

「――リリルーラを求める者よ。汝は何故この力を必要とする」

「困っている友達を救うためです！行っても何も出来ないかもしれない、もしかしたら迷惑かもしれねえけど……でも、力になってやれることがないか、確かめに行きたいんです」

「――心清きものよ、この力を受け取るがよい」

ポップの身体が白い光に包まれ、精霊の祝福が聴こえてきた。ポップがホッと胸を撫で下ろした矢先――

光が急に消え、声が再びポップに語りかけてきた。

「――お前に竜の騎士の匂いを感じる」

「ど…どういう事だ!?そんなわけねえだろっ！」

ポップはかつてバランとの戦いに敗れた際、バランの血を受け、蘇った事を思い出した。

それ以来、傷の治りが早くなり、少しの事ではダメージを受けない身体になった事は確かだが、竜の騎士と同じか、と言われると全くそんなはずは無かった。
「――竜の騎士の血を宿す者は災いを呼び込む存在になり得る。マザードラゴンの承認なしには、破邪の呪文を授けることはできん」
「それじゃあ契約は出来ねえってのかよ！ここまで来たってのに！」
「――立ち去るがよい」
「ちょっと待ってくれよ！俺が竜の騎士だって？そんなわけねえ！俺は人間の両親の間に生まれた、ただの武器屋の息子だぜ？」
「――では仕方ない」
激しい光と轟音が鳴り響き、祭壇から光に包まれた岩の巨人が現れた。
「私は破邪の守護者。力を得るに相応しくないものを焼き尽くす為に神に遣わされた」
ポップは悪夢を見ているようだった。
竜の騎士だと因縁をつけられた上に、今まさに神の使いによって自分は消されようとしているのだ。
「……こうなったら神の使いだろうがなんだろうが構わねえ！ダイに会う前に死んでたまるかよ!!」
ポップはキッと巨人を睨み、身構えた。
「一発で決めてやる……!!」
ポップは精神を集中させ、右手に氷、左手に炎のエネルギーを溜め始めた。
ポップの目が怒りに燃えていた。

ポップの挑戦

ポップが相手の様子を窺おうと顔を上げたその時、巨人は洞窟全体が震えるほどの声で咆哮した。
「オオオオオオオオ！」
猛烈な風と衝撃波がポップの全身を襲う。
あまりの衝撃に身体が震え、足元がふらついた。頭の中でキーンと耳鳴りがする。両脚で大地をしっかりと踏みしめると、ポップは再びエネルギーを溜め始めた。
もうこれしかこの怪物を倒す術は残されていない――
歴戦の経験で培われた本能が彼にそう教えていた。
そして、ここで勝たなくてはもう後がない――
頭上で巨人がギロリとこちらを見やると、恐ろしい一つ目が青白く光りだした。明らかに攻撃体勢に入っている。
「おい…何する気だよ！」
次の瞬間、光輪が見えたと同時に
猛烈な光線がポップに向かって放たれた。
「うおっ!!!!」
慌てて横に飛び退くポップ。
光線が放たれた場所に目をやると黒々とした穴が空いている。
「おいおい…まともに当たったらひとたまりもねえな…いよいよやべえかもしれねえぞ。」
あともう少し…ポップは心の中で（10、9、8…）とカウントダウンを始めた。
巨人はこちらの様子を窺っている。
時折、不気味に岩同士が擦れる音が聞こえる。
再び巨人の目が光り始めた。
「よし…！」
右手と左手に凝縮された炎と氷のエネルギーがひとつになり、それらは巨大な閃熱の弓矢へと姿を変えた。
バチバチと火花が飛び散り、今にも爆発しそうなエネルギーの塊が

今まさにその力を解放されようと四方に光を放っている。
ポップは憎き巨人の顔めがけ弓を引き、叫んだ。
「メドローア!!!」
恐るべき閃熱の矢は内部に大きな渦を作り、その回転の速度を上げながら巨人に向かっていく。
しかし、ほぼ同時のタイミングで、巨人の目から放射された光線が一瞬早くポップを捉える！
間一髪避けたポップだったが、放った呪文は巨人から大きく的を外れ、洞窟の壁を貫いていた。
光線を掠めたマントの端が焼け焦げ、煙が上がっている。
「…くそったれめ…!!」
ポップが拳を握り締めた。
巨人が一つ目を動かしながら言った。
「――私はお前の鏡。お前が私を捉える時、私もお前を捉えている――」
「じゃあ…まともに的を狙う事なんかできねえって事かよ…！」
ポップは地面に開いた穴を見つめながら懸命に考えた。絶体絶命のピンチ。しかし、これまでも何度もあった瞬間のはずだ。自分は一体、どう切り抜けてきた？もし、ダイだったらどうする、アバン先生だったらどうする、マトリフ師匠だったらどうする、マァムだったら…と思いを巡らせていると、不意にある考えが頭をよぎった。
「穴…的が狙えない…動くものと動かないもの…そうか!!魔法の聖水のお陰でメドローアはあと数発は打てる…じゃあ、やれるかもしれねえ!!」
巨人の方に向き直るとポップは叫んだ
「おい！この堅物の勘違い野郎!!神の使いだかなんだか知らねえが、お前をぶっ潰す方法が分かったぜ!!」
さっきまでとは別人のような顔つきでポップは全身に力を込めた。

万事休す…？

ポップはこれまでの巨人の攻撃パターンを分析した。
自分が攻撃に転じようとすると、おたけびをあげ、こちらを威嚇してくる。そしてしばらくすると目が光り、光線を出す。
おそらく、この繰り返しだ。多少移動はできるようだが、その他の物理攻撃などは今の所ほとんどしてくる気配はない。
メドローアを撃つためにはある程度の時間がかかる。その間は回復などもできない。また、光線を撃たれた際は確実に避ける必要がある。とすると、攻撃のチャンスは光線を撃った直後だろう。
しかし、こちらが呪文を撃つために力を溜め始めた時点で巨人は攻撃体勢に入るので、メドローアを放つチャンスは相手の攻撃とほぼ同時になる。
光線をかわした直後のスキを使うには詠唱にそこまで時間がかからない攻撃呪文、または直接攻撃、あるいは光線をかわし損なった際の回復に充てるしかない…
そして、動く的を狙うことはできない。
やはりこれしか手はない…
ポップは小さく頷くと、両手に力を溜め始めた。
「――何度やろうと同じことだ――」
「へっ！お前、割とおしゃべりなんだな」
ポップは巨人の真下に入り叫んだ。
この方法を成功させるには、なるべく相手の懐に入る方がいい。
「おい！石頭のノロマ野郎！当てられるもんなら当ててみろ！」
巨大な一つ目がギロリと眼下のポップを睨んだ。
「さあ！お前の得意技を出してみろよ！」
巨人は大きく息を吸い込むと、一瞬その動きを止めた。不気味な静寂が辺りを包む。
そして次の瞬間、ポップに向かって強烈な叫びとも唸り声ともつかない声を浴びせかけた。
「……!!!!」

必死に目を瞑り堪えるポップ。
そして狙いどおり、巨人の目が青く光り始めた。
「これでも喰らえっ!!!メドローア!!!」
標的に向かって放たれた光の矢は巨人の頭をかすめ、真上の天井をえぐると、そのまま上空に吸い込まれていった。ポップはそれを確認すると、一瞬遅れて巨人の目から放たれた光線をギリギリまで引きつけ、当たる直前に斜め前方に転がって避けた。光線は出るタイミングさえ認識できれば、避けられない事はない。
ポップは再び同じやり方でメドローアを打ったが、巨人へのダメージを与える事は出来なかった。
「くそ…おーい!もっとこっちに来いよ!それじゃお前の得意技だって全然当たんねえぞ!」
巨人を挑発しようと叫んだ直後、ポップは異変が起きていることに気付いた。
巨人の目が光っている。
「あれ…?なんかタイミングが早くねえか?」
巨人の目の輪郭がぼやけた、と思った直後、
一つ目が激しく光り、眩しい光がポップを包んだ。思わず腕を目に当て遮ったが、そのくらいでは防げないほどの強い光だ。
「うわっ…や…やべえっ!!!」
おたけびを上げるだけではない。こいつは目を眩ませてくる。
ポップがやっと目を開けられたのは数十秒後だった。
とすると、次にくる攻撃は…
ポップがようやく薄目を開け、敵のいる方向に目を向けると、巨人の目からまさに光線が放たれるところだった。
「!!!」
咄嗟に体を捻って避けたつもりだったが、
光線はマントを貫通し、包まれていたポップの右腕を焦がした。
「がああああっ!!!」
呻き声をあげ、その場に崩れるポップ。
服に穴が空き、煙が上がっている。

「――当たらないのではなかったかな――」
巨人が落ち着き払った声で言う。
「大魔道士様にも読みが外れる事はあるさ…」
ポップは激痛を耐えながら、左手で自身にベホマをかけた。

契約完了！

巨人はポップに対し違和感を感じ初めていた。
これまでの経験から考えても、追い詰められた人間はがむしゃらに攻撃を仕掛けてくるのが常だった。しかし、明らかに勝ち目がないように見えるこの若者にはどこか余裕が感じられる。
まだただの一度もこちらに攻撃を当てていないにも関わらずだ。
「おい！何もしねえんならこっちから行くぞ！
ポップが叫んだ。
巨人は再び光線を撃つ体勢に入った。また避けるのであれば避ければいい。
いくら強がっていても、ただの人間だ。これを繰り返していれば相手はいつか必ず力尽きる。
…何か策があるのか。
しかし実際のところそんな事はどうでも良かった。自分がこの破邪の洞窟の守護を任されてから、ただの一度も自分を追い詰める人間は現れていない。神の名の下に振るわれる巨大な力に抗える者など存在しないのだ。
だいたい、どうやって勝つというのだ？
このちっぽけな人間ごときが。
巨人は大きく咆哮すると、ポップに向かって狙いを定めた。その時

――

「イオナズン!!!!!」
大魔道士と名乗る若者は先程までとは違う呪文の名を叫んだ。
上空に一筋の閃光が走った――
――同時にこちらの光線も相手に向けて放たれる
一瞬、光に包まれたその直後、複数の爆発と共に洞窟内を揺るがす大きな振動が襲った。
先程までの呪文と違い、明らかに威力が落ちる。
こちらに積極的に当てようとしてきているわけでも無い。ただのこけおどしか、それともいよいよやけを起こしたか。

巨人は洞窟内を覆うように舞っていた土煙の中から固唾を飲んでこちらを伺っているポップを見つけた。
――どうやらまた少し光線が掠ったらしい。片腕を押さえ、肩で息をしている。
それにしても、土煙が一向に収まらない。
巨人は頭上から小石や砂が降ってきている事に気がついた。それだけではない。何かが揺れている音がする。
しばらくすると、だんだん音は大きくなり、いよいよ振動は洞窟を揺るがすほどになっていった。
砂が大量に降ってきた、と思った。
と同時に視界が低くなり意識が薄れていく――

ポップは肘で土埃を避けながら口元を緩ませた。
巨人はメドローアで開けた穴から降ってきた瓦礫や大岩の下敷きになり、完全に動きを停止している。
「おしっ!!狙い通りだっ!!」
ポップは袋から出した魔法の聖水を飲み干すと、
魔力を溜め始めた。
「消えちまえ!!メドローア!!!!」
ポップは目の前の瓦礫の山に向かって特大のメドローアを放った。
その時、背後から聞こえてくる声があった。
「ポップ君!!」
アバンが血相を変えて走って来た。
「大丈夫でしたか!?…はぁはぁ…」
「先生!!」
「これは…一体何があったんですか!?」
「こっちが聞きたいですよ!危うく死ぬとこだったんですから!」
ことの次第をポップが説明した――
「私は大変申し訳ないことをしました。ポップ君」
「破邪呪文というのは神が力の弱い人間に対して与えたものです。ミナカトールのように、心の正しいものであれば、その呪文の発動の

きっかけを作る事はできますが、邪悪な人間はもちろん、人間と違う種族の者…例えば竜の騎士や魔族の血を引く者などがその呪文の契約自体をする事はできないのです」
「ポップ君は以前に竜の騎士を血を受け、蘇った過去があります。この場合の契約の可否については私にとっても未知の世界でして…」
「そうだったのか。だから万が一の事を考えて先生は…あっ！そういえば…俺、まだリリルーラの契約がっ!!」
「いっ!!!!」
2人は慌てて祭壇があった場所へ走っていく。
「リリルーラを司る精霊達よ…この者に破邪の呪文を与え給え」
アバンがそう言うと、ポップの体が光に包まれた。
「――心清きものよ、この力を受け取るがよい」
どこからか声が聞こえてきた。
「…セーフでしたね」
「って言うか、最初からこうすれば良かったんじゃないですか…」
「そ…そうかもしれませんね。でも、リリルーラの契約はあくまで1人で行うのが原則ですから…」
「まあ、何はともあれ契約が出来たのですから、おめでたい事ですよ。さぁ帰りましょう。みんな心配して待っていますよ！」
「はい…」
「何となく、早くここを出た方が良いような気がします」

――はるか下の方で何かが開く音がした。

ドラゴンの杖

「ポップさん！」
　ロン・ベルクの小屋に入ると、頭に手拭いを巻いたノヴァが出迎えた。
「呪文の契約は出来ましたか!?」
「ああ！危ないところだったけどな…で、そっちの調子はどうだ？」
「お待たせしました…」
　ノヴァが目をやった先には布で巻かれた細長い棒のようなものがあった。
「あと最後の仕上げが残っているだけです」
「おお！もう出来たのか…ありがとうな。ノヴァ」
　見上げたノヴァの顔が充実感に満ちている。
　彼は恥ずかしそうに鼻をこすり、白い歯を覗かせ爽やかに笑った。
　半開きになっていたドアが開き、ロン・ベルクが奥の部屋から出てきた。
「ポップ、よく戻ってきたな。仕上げの件については俺から説明しよう…」
「それって前にダイにやってたようなやつか？」
　ポップは両方の掌をロンに差し出した。
「いや、違う。剣と違い、肉体ではなく魔力を同調させる必要があるのだ」
　ロン・ベルクは壁に立てかけてあるノヴァの努力の結晶を手に取り、巻きついている白い布を丁寧に外した。
　現れたのは、杖だった。
　今にも動き出しそうな、鱗を逆立てた暗緑色のドラゴン。
　それがぐるりと赤い宝玉に巻き付いている。
　長く延びた尾にあたる部分の下端はドラゴンの爪になっており、ひとまわり小さい宝玉を握っている。
「お前の相棒…そうだな。ドラゴンの杖、とでも名付けようか」
　美しさと禍々しさを凛とした佇まいが中和しているような、不思議

な佇まい。
細部までこだわり抜いて作った事が分かる逸品だった。
ポップは息を呑んだ。
「す…すっげえ！これで、ダイのところに行けるのか？」
「さあな」
「えっ…!?」
ロン・ベルクは咳払いをひとつして言った。
「ポップ…俺たちは全身全霊を込めてこれを作った。それを生かすも殺すも、ここから先はお前次第だ」
不意にポップの脳裏に浮かんだのは、
あの日、あの時、自分を蹴落としたダイの呟き。
あの日から自分は、
生きる事の意味をさがし続けている。
ダイに問いかけたかった。
いや、胸ぐらを掴んで問いただしたかったのかもしれない。
何故、自分の大切なものの為に生きようとすると
傷つかずにはいられないのか。
どうして、何かと引き換えにしか手に入らない幸せが存在するのか。
ポップは静かに言った。
「ああ…そうだな」
「仕上げ、さっさとやっちまおうぜ」
「無論そのつもりだ」
3人は小屋の外に出ると地面にドラゴンの杖を突き刺した。
そして数メートル離れてぐるりと杖の周りを囲んだ。
ポップは進み出ると、刺さっている杖のドラゴンの頭に掌を下に向けてかざした。
「よし、そのまま魔力を集中させるんだ」
ノヴァが固唾を飲んで見守っている。
「この儀式は武器にお前の魔力の最低値と最高値の振れ幅を教えてやるためにある。杖の持つエネルギーの波動を受け取ったら、なるべく

一定のスピードでゆっくり魔力を限界まで高めろ。急に上げるなよ」
「おう…やってみる」
ポップが目を瞑り掌に魔力を集中させると、
足元から血潮が頭のてっぺんまで駆け上っていくような感覚が通り抜けた。
すると、頭の中に雲の隙間から姿を覗かせる竜のイメージが浮かんできた。
ポップはゆっくり息を吐き、魔力を徐々に高めていった。
鬱蒼と茂った森の木々はザワザワとざわめき、
空には暗雲が立ち込めた。
そして、地面が微かに揺れていた。揺れはだんだん大きくなり、頭上から雷鳴が聞こえてきた。
「もう一息だぞ!」
ロン・ベルクが叫ぶ。
ポップの顔に汗が滲む。
身体中から魔力が解き放たれるイメージを思い描きながら叫んだ。
「おおおおおおおっ!」
その時、頭上の雲から放たれた白い稲光が杖に命中した。
ポップは息を一気に吐くと、脱力し地面にへたり込んだ。
「これで完成だ」
ロン・ベルクが言った。

ダイの姿をさがして

風が吹きぬける丘の上、集まった者達は、
緊張の面持ちで成り行きを見守っていた。
ポップは屈伸をしたり、首を回したりと体操をして身体をほぐしている。
彼は周囲に余計な心配をかけまいと、いつも通りの雰囲気を崩さない事を心掛けていた。
ヒュンケルが何かの気配を感じ取り、ポップに近づいて言った。
「ポップ、本当にもう準備は良いのか？」
ヒュンケルはエイミから事の次第を聞き、数時間前にカール王国に到着していた。
知らせを受けたとき、何故そんな大事な事をすぐ伝えなかったのかと彼は声を荒らげたという。
ヒュンケルは自分が役目を引き受けられないことを心から恥じていた。
自分は幸せになって良い人間ではない。
ダイが消えてから、彼の胸中もまた苦しかった。
今まで自分は進んで死地に赴いてきたつもりだった。命を捨てる事など全く怖くは無かった。
しかし、結果として年端も行かない少年が犠牲になる事で生き永らえた。
自分はこの拾った命をどう使えば良いのか。
どう生きれば、いや、どう死ぬかをこの5年間考え続けてきた。そして、そう思っている事を誰にも悟られたくなかった。
自分の身体が回復する事に何の意味があるのだろう。強くなる事に何の意味があるのだろう。
生きる事も死ぬ事も出来ない自分は一体何のために存在するのだろう。
エイミに対し刺々しい態度で接してしまった事は後悔している。
自分の身を案じ、いつも気に掛けてくれる彼女に対して恩義を感じて

いる。
しかし、それとこれとは別の問題なのだ。
知らせを聞いた時、自分がこの場に現れるべきか迷った。しかし、アバンのしるしを身に付け、この場で全てを見届ける事は自分の役目のような気がした。どのような結果も受け止める。それが彼によって生き永らえた者としての責任だと思うからだ。
「ああ！大丈夫だぜ！」
ポップは両手の拳をポキポキ鳴らしながら答えた。
胸元にはアバンのしるしが揺れている。
太陽は真上にある。
時刻は正午、予定の時間だ。
「よし！じゃあ行くか！」
そう言うとポップはかつてダイの剣があった石の台座を見た。
アバンが口を開いた。
「ポップ君。くれぐれも無理だけはしないで下さい。お話ししたように、いざとなれば私にリリルーラを試みて下さい」
「はい。必ずそうします」
ポップがドラゴンの杖を握り、魔力を集中させると、杖の宝玉が光り、周辺の空気の流れが変わった。台座の周りに咲く花々が揺れている。
薄い光に包まれたポップは目を閉じ、ダイの気配を探した。
（ダイ…何処にいる？）
かつて氷の中にいるダイに必死で呼びかけた時、不意に頭の中が静かになって波の音も風の音も聞こえなくなる瞬間があった。
ポップは杖を持った手と逆の手でアバンのしるしを握りしめる。
頭の中に微かにダイの輪郭のようなものが浮かんできた。目を開け、アバンのしるしを見ると、淡く光を放っている。
（…これか？）
不意に頭の中が真っ白になり、
ダイの寂しそうな後姿が見えた。
「…リリルーラ!!」

ポップが叫ぶと、風の中に消えた。
「ポップ君…お願い」
レオナがアバンのしるしを握り呟いた。

背中

「おおおお…！」
身体から重力が消え、どこまでも落ちていくような感覚に襲われる。
極彩色の景色がものすごい速さで入れ替わり、
ゴウゴウという耳鳴りのような音がひっきりなしに聞こえてくる。
あまりの事に頭がどうにかなりそうだ。
ポップは拳をしっかり握った。
そして、ダイの姿を捉えることに集中した。
再びダイの輪郭が見えてくると、混沌とした景色は互いに溶け合い、クリーム色に近い色になっていった。
不意に目線の先に時空の裂け目が現れる。
手を伸ばすと、ポップの体はあっという間に吸い込まれた。

意識が戻ったポップが目を開けると、そこには荒野が広がっていた。
「うまくいったのか…？」
ポップは自分の両手を見つめると、
一歩ずつ進み、大地を踏みしめる感覚を確かめた。
昼間だというのにやけに薄暗い。
空を見ると、雲なのかオーロラなのかわからない、モヤモヤとした空間が広がっていた。
様々な絵の具を出鱈目に混ぜてできたような暗い空。
目を凝らすとシャボン玉の表面のような膜が薄く覆っている。
それは口では説明できない奇妙な光景だった。
そして、空に浮いているのは、太陽というにはあまりにも弱々しい、月というにはあまりに禍々しい、白い巨大な天体。
耳を澄ませると、遠くで雷鳴や獣の唸り声も聞こえる。
「ここ…あの世じゃねえよな…？」
墨色の土についた足跡を振り返り、ポップが言った。

あてもなく荒野を歩くと、岩山に囲まれた砦が見えてきた。
かつての魔王軍の本拠地、死の大地を思い起こさせる。
まるで闇の中にうずくまる黒猫のような――
恐ろしい、と思った。
しかし、何故か足を進めるのを止められなかった。
ポップは砦に足を踏み入れると、気の赴くまま歩き回った。
ここが何の為にある場所なのかは見当もつかない。
ただ、砦としての機能はないも同然だろう。
柱は崩れ、屋根は落ち、既に遠い昔に朽ち果てているように見える。
それなのに、なぜか息苦しくなるような緊張感を感じる。
奥に足を踏み進める度にどこからか湧き出した霧が濃くなっていった。
砦の端まで行くと、そこは崖になっていた。
崖の向こうにはささくれ立った岩山が、何かを守るように無数に聳え立っている。
その中で、一際高い、まるで塔のように見える岩があった。
霧でよく見えないが、塔のてっぺんには檻のようなものが見える。
静寂を切り裂き、雷鳴が轟いた。
ポップは直感的に思った。
「俺はこいつを知っている」
なぜ、そう思ったのかは分からない。
ポップは心の奥に沸々と怒りの感情が湧いてくるのを感じた。
もうここを出よう。
そう思って、踵を返したその時、視線の端で何か人影が見えた気がした。
胸騒ぎを感じ、早足でその影を追いかける。
まさか――
「ダイ…!!」
忘れようがない、見慣れた背中。
「ポップ…!?」
振り返ったダイの顔はどこか怯えて見えた。

暗闇

「本当に、本物のダイなのか…？」
ポップは突然のことに目の前の光景が信じられない様子だった。
様々な想いが頭を巡っていた。
しばしの沈黙の後、ポップは口を開いた。
「なんで生きてんなら帰ってこねえんだよ。心配したじゃねえか……もしかしたらもう二度と会えねえんじゃないかって…」
震える息で溜め息をつくと、涙が滲んできた。
「帰ろうぜ、ダイ」
ポップは溢れる涙と鼻水でぐちゃぐちゃになりながら跪いた。
そしてダイの胸に頭を預け、しっかりと抱きしめた。
凍りついた時間が溶けていくのを感じる。
ポップはこの瞬間をどれほど待った事だろう。
しかし、ダイは下を向いて言った。
「ポップ…どうして…どうして来たんだよ…」
ポップの表情がみるみるうちに凍りついた。
「みんなと地上で幸せに暮らしていて欲しかったのに…俺のことなんかもう忘れてさ…」
「何言ってんだ。そんな事出来るわけねえだろ！お前が居ないのに平和だなぁなんて喜べるかよ！」
ポップは反射的に叫んでいた。
「ここに来ちゃいけないんだ」
「おい！ダイ！どういう事か説明しろ！」
ダイの胸ぐらを掴もうとした時だった。
朽ちた壁の向こうから誰かが近付いてくる。
ポップは息を殺し、じっと足音のする方を睨んだ。
現れたのは女だった。
ポップよりも少し背が高く、見慣れない形の鎧を身につけている。
引き締まった薄い褐色の肌。
白く長い髪をあみだに結んでおり、首には装飾の付いた紐飾りのよ

うなものを身につけている。
グレーがかった瞳は冷たい光を宿していた。
「…人間…？」
端正な彼女の顔にかすかに戸惑いの色が見えた。
「おい。お前誰だ。ダイに何をしやがった」
女はポップの言った事に気をとめずに言った。
「なぜ人間がここに居る？」
「お…お前に教えてやる義理なんかあるかよ…！」
ポップは驚きとまどいながら、彼女をねめつけた。
「人間がここに来る術はもう残されていない筈…そうか、封印が…順番が変わったという事か」
「お前は誰だ！」
その時、地鳴りが起きた。
それはまもなくこの奇妙な大地を揺るがす、大地震へと変わった。
「うおっ！なんだ！」
何処からともなく声が聞こえてくる。
「貴様、バーンを倒した勇者ダイの仲間だな」
ポップは言葉を失った。
「人間という生き物は本当に往生際が悪い。何故、神はこんな者達に肩入れする」
（こいつ…あの時の…！）
「ここはお前達の来るところではない。いずれこちらから出向くつもりではあったがな…」
「くそっ…！」
振動は強さを増していく。ポップは立っているのがやっとだった。
「そして、ダイは我らと志をひとつにする仲間なのだ。地上に返すわけにはいかん」
「……!!」
「立ち去るがよい」
「ひとつ教えておいてやろう。そこに居るのは私の娘だ。ダイといずれ子を持ち、その者はこの世の王となるだろう」

「ふっ…ふざけんな!!デタラメを言いやがって…」
大地が裂け、ポップの体が地割れに飲み込まれていく。
「また会おう。坊主」
ポップは目の前が真っ暗になった。

――どれだけ時間が経ったのだろう。
目を覚ましたのはある洞窟の中だった。
仰向けのまま、しばし呆然と天井を見つめるポップ――
足元にあるドラゴンの杖を手繰りよせると、
立ち上がり部屋を見回した。
先程まで自分がもたれていたのは階段だった。
中央の高くなっている部分に向かって四方から登る事ができるようになっている。
慎重に階段を登った。
覗き込むと、中央部分が正方形のプールのようになっている。
ただ、そこに張られていたものは水ではない。
先程まで自分がいた空間、あの悪夢のような時間を過ごした世界の空と同じ色をしたトロリとした何かだった。
ポップは身震いをし、嘔吐した。

夕陽に

ポップは胃から込み上げてくる不快感に耐えながら、洞窟内をあてもなく歩いた。

「とりあえずここから出ねえとな…ウッ…」

ポップは無感情に足を進める。

もう何も考えたくない…

しかし、様々な疑問が浮かんでは消えていくのを止める事はできなかった。

リリルーラは成功した。

しかし、自分は何処にいたのか。

ここは何処なのか。

ポップにわかったのは、ダイが生きていたという事。

自分が会ったのは本物のダイであるという事。

そして、今は最悪の状況であるという事だ。

なぜダイは戻ってこれないのか。

おそらく、ダイは自分が現れた事そのものというより、その背後に予想されるものを恐れている。

そして、バーンをよく知っている様子のあの声の主…

考えたくはないが、きっとあのキルバーンを遣わせた張本人だ。

だとすると、ダイは何故…5年間も…

ポップは暗く湿った暗黒の世界で、冷たいグレーの瞳の女が、虚な目をしたダイの腰に手をまわし、ダイがそれを受け入れるところを想像した。

また吐き気が襲ってくる。

ポップは深呼吸をした。

それからは何も考えずに、ひたすらに洞窟内を歩いた。

そして階段を見つけたら上に登る、を繰り返した。

数時間も経っただろうか、冷静さを取り戻し始めたポップの頭の中に、ある疑念が湧いてきていた。

似ている。

この洞窟の迷路のパターン。
曲がり角で視界が開ける感じ。
何も入っていない宝箱。
モンスターが出てこない事以外はそっくりである。
階段を登り続け、あるフロアに達した時、ポップは確信した。
天井に見覚えのある直径5～6メートル程の穴が空いている。
ポップは腕組みをしながら部屋の中をぐるぐると周り、この状況を理解しようと努めた。
しかし、考えても分からないものは分からなかった。
ふとポップは閃いた。
ここが今までと違っていること、
それはモンスターが出てこないこと…
それを踏まえて、試してみたい事…
「リレミト！」
ポップの体が光に包まれた。
気がつくとポップは地上に降り立っていた。
紛れもない破邪の洞窟の入り口である。
木々が風に揺れ、太陽の光がポップを照らしている。
遠くにカール王国の国旗が揺れているのが見える。
――地上に戻ってきたのだ。
「やっぱりな…リレミトが使える…それにしても…」
ポップの意識が揺らいでいく。
体力は限界だった。そして、あまりにも色々な事が起こりすぎた。
その場にばったりと倒れると、居眠りを始めた。
しばらく死んだように眠り、目を覚ましたポップは、
森の中に座り、木々の隙間から夕陽が沈むのを見つめていた。
さっきのダイの顔を思い出そうとしたが、思い出せなかった。
ダイに会いに行った事を少しだけ後悔している自分に気付くと、
ポップは静かに泣いた。
涙が頬を伝い、喉の奥から嗚咽が漏れた。
手で顔を覆ったまま、しゃくりあげるように声をあげてしばらく泣

いた。
　やがて涙が枯れると、重い身体を引き摺りながらポップは帰路に着いた。

沈黙

ポップはカール王国に戻ると、皆を王宮の会議室に集めた。
そして、起きた事を伝えた。
話し終えたポップが腰を下ろした後も、口を開く者はいなかった。
憔悴しているヒュンケルは、握り締めた手をテーブルに置き、顔を横に向け口を一文字に結んでいる。
目を瞑り、しばらく沈黙していたアバンが口を開いた。
「ポップ君、それで全てですか」
「……はい」
アバンはポップの後ろにまわると、肩に手を置いて言った。
「まずは……ポップ君がこうして無事に私たちの前に戻って来れた事に感謝しましょう。なにより……それがいちばんの収穫です」
耐えきれずにポップが立ち上がって言った。
「先生……ダイをどうやって取り戻すか考えましょう」
ポップの胸のアバンのしるしが揺れている。
誰のものかわからない小さな溜め息が聞こえた。
「ポップ」
「話を聞いた限り、お前がリリルーラで行った場所は魔界だ。そしてお前に話しかけてきた声の主は紛れもない、冥竜王ヴェルザーだ。――娘がいたというのは俺も知らなかったがな」
「何故……ヴェルザーなんかの……」
レオナの今にも消えてしまいそうな弱々しい呟きを無視して、ロン・ベルクは続けた。
「ヴェルザーは強力とはいえ、神によって岩の中に封印されている。魔力もそれ相応に封じ込まれているはずだ。娘も一緒であったとしても、あの大魔王バーンを屠ったダイだ。力でねじ伏せるのは容易いことではないだろう。ましてやあいつの剣も手元にあると考えれば……」
「……」
「俺もやはりダイの言葉の中にヒントがあると思っている。武力を使

わずにダイを無力化させる何かがな……それがわからない限り、たとえ俺たちが魔界に乗り込んだとしても、無駄に終わる可能性が高いとは思わないか」
「ダイ君はヴェルザーの仲間になったのではなく、何かの事情で仲間にさせられている、と……彼の事ですから、争わずに済む方法を選択したのかもしれませんね――」
アバンが手袋を外しながら言った。
彼の顔にも疲れの色が滲んでいる。
「ごめんなさい……私、気分が悪くて……申しわけないけど、先に休ませてもらうわ」
そう言うとレオナは部屋を出た。
マァムは膝の上に手を置いたまま、じっと下を向いている。
「結局、何も分からなかったって事なのか……!?」
ポップがテーブルを拳で叩いた。
沈黙が流れる部屋に、不意にドアをノックする音が響いた。
「どうぞ」
アバンが答えると、部屋に入ってきたのはメルルだった。
「皆さんお久しぶりです」
「メルル……!!」
「ポップさん。お元気でしたか?」
「元気も何も、なんていうか……もう、どん底って言うか……」
「今、廊下でレオナさんとすれ違ったのですが、とても声を掛けられるような状態ではありませんでした……今にも崩れてしまいそうで…あんなレオナさん、初めて見ました……」
アバンはメルルに事の顛末を話した。
「そうだったのですね……ダイさん……」
メルルは沈痛な面持ちで言った。
「おそらくその事と関係があると思うのですが……」
彼女は手に持っていた水晶玉をテーブルに置くと、ゆっくり話し始めた。

精霊ルビス

メルルの話によれば、昨晩眠りに落ちる時、頭の中に声が聞こえてきたらしい。
彼女はきっと疲れているのだと思い、無視をしていたが、「ダイ」という言葉にいっぺんに目が覚めてしまったとの事。
うろ覚えの部分もあるが、大まかな内容は以下のようなものだ―

私は精霊ルビス―
天界より、神の意思を伝えしもの。
そして、この世の理―
光と闇を司るものです。
竜の騎士ダイによって、そして彼の心の光に導かれた、勇気ある者たちによって地上は救われました。
心から感謝します。
しかし、そのダイが邪悪な存在によって魔界に囚われています。
このままでは彼の輝きは失われ、地上と魔界のバランスは危うくなるいっぽうです。
そこで、ダイを助けるために、地上の勇者達に協力してほしいのです。
この事を彼をよく知る、正しきものに伝えてください。
詳細は別の者に託してあります。
神々に愛されているあなたなら、今後の進むべき道を照らすことができるでしょう。
そして―再び大きな邪悪がこの世を包もうとしている予兆があります。
マザードラゴンが力を失った今、
世界に光をもたらすことができるのはあなた達しかいません。
神の愛はいつもあなた達と共にあります。
全てが正しい道に導かれますように…
メルル…頼みましたよ―

「精霊ルビス…古い魔導書や古文書等で頻繁に出てくる名です。一説によると、この世界を創造した存在とも…」
顎を手で触りながら聞いていたアバンが呟いた。
「私も最初は信じられませんでした…それで翌朝、半信半疑で枕元に置いた水晶玉を覗いてみたのです。するとそこにダイさんが映ったんです。それは…崩れかけた廃虚のようなところでダイさんが手にした剣を見つめている様子でした…」
ずっと横を向いていたヒュンケルがこちらを振り向いた。
「私は巡礼の旅の途中で、ある小さな町に滞在していましたが、この事をすぐに伝えなければと思い…ここでしたら、アバン王経由で皆さんにお話が伝えられると思いましたし」
「ありがとうメルル。グッドタイミングでした。ちょうど皆さんが集まっていましたからね」
「メルル…久しぶりね。会えて嬉しい」
マァムが少し疲れた様子でメルルに微笑んだ。
「マァムさん！私も嬉しいです。なんだか一緒に旅をしたのがつい昨日のことのようで…」
「レオナも会いたがっていたのよ。どうしているかなって…」
「わぁ！そうなんですね。嬉しい…でも、彼女は今大変そうですね…私なんかが来ても助けになるかどうか…」
「そんな事はありませんよ。メルルは皆に希望を持ってきてくれたじゃないですか」
アバンがそう言うと、マァムはにっこり微笑んだ。
「皆さん、もう一度、ジタバタする時がきたんじゃないですか？」
アバンの言葉を聞いて、ポップが鼻息荒く頷く。
メルルははにかみながら水晶玉をテーブルに置いて言った。
「ルビス様は別の者に託したと言っていました。どこに行けばいいのか占ってみます」
メルルの横顔がキリリと頼もしく見えた。

竜達との邂逅

「メルル、何か分かったか？」
　ポップが待ちきれず声をかけると、メルルは水晶玉に手をかざしながら答えた。
「…竜の像…そして湖が見えます…」
　ポップは頭の中に情景を思い浮かべた。
「ってことは…あっ！もしかして…」
「…テランですね」
　メルルが微笑んで言った。
「近いな…」
「えっ…!?」
　メルルはびっくりした顔をして後ずさった。
「なんか…すいません…」
　申し訳なさそうな顔をしている。
「えっ？いや…テランならここからすぐだな、って意味だったんだけど…」
　ポップは頭を掻いて言った。
「あっ…なんかもう…私ったら…恥ずかしい…！」
　メルルは顔を両手で押さえると、みるみるうちに耳まで真っ赤になった。
「俺がそんな事言うわけあるかよ…」
「ポップさん、たまに独り言なのか何なのか分からない時があるんですよ！」
「…こういうのなんだか懐かしいなー。３人で旅をした時を思い出すぜ」
　ポップはずっと続いていた緊張がほぐれていくのを感じた。
「…２人にしてあげましょうか？」
　マァムが後ろからやって来ると、ニヤニヤしながらふたりの顔を覗きこんで言った。
「もう！マァムさんからかわないで！」

ポップの顔は引き攣っている。
「おっと…こうしちゃいられねえ」
そそくさとその場を離れたポップは呼びかけた。
「みんな俺と一緒に来てくれ！場所がわかったぞ！」
ポップは部屋に閉じこもって出てこないレオナ以外の皆を、城のバルコニーに集めた。
「まとめて行けっかな…？」
自分の袖を掴ませるとルーラで翔んだ。

テラン王国―
森と湖に囲まれた神秘の国。
そしてメルル達の生まれ故郷―
地上に降り立つと、ポップ達は人影もまばらな町の北側を通り、湖に浮かぶ小さな島に向かった。
細い参道を渡った先にある祠には、竜の神が祀られている。
竜の石像の前までくると、メルルの水晶玉が光を放ち始めた。
「これは…！」
水晶玉から伸びた光が湖を照らすと、水の底から一筋の光が空に向かって伸びていった。いつの間にか辺りには靄も漂っている。
戸惑っていると、光のヴェールの中からある意外な人物が姿を見せた。
「久しぶりだな…お前達」
一同が息を飲んだ。
「話は聞いているな」
アバンがバランに会うのはこれが初めてであったが、彼がダイの父親である事はすぐに分かった。
「…あなたが竜の騎士バランだったのですね。しかし…どうしてあなたがここに？」
「…私は竜の騎士としての生涯を終え、この世界での実体を失った。しかし、その後、天界で新たな生を受けた。私の竜の騎士としての役目はまだ終わっていない、そう神々が判断したからだ。そして、私は

最後の竜の騎士であるダイの魂を見守っていた…そんな折に命が下ったのだ」
「あの…ダイに何が起こったんですか？」
マァムが尋ねた。
「それは私から説明しましょう」
バランの周りの靄が生き物のように動いたかと思うと、あっという間に竜の姿に形を変えた。
その佇まいは魔王軍のモンスター等とは明らかに違う、気品と知性を窺わせる。
「あなたは…もしやマザードラゴンでは…？」
メルルがおずおずとした調子で訊くと、竜は穏やかに答えた。
「…昔そう呼ばれていた事もありました。しかし、今はバラン同様、神の計らいによって、僅かな間だけ魂を繋ぎ止めている、竜の紛い物に過ぎません」
「そんな事…」
マザードラゴンは落ち着いた様子で続けた。
「まず、地上の皆さんに今起きている事についてお話しします」
皆の顔つきが変わった。

真実

マザードラゴンは滔々と語り始めた。

「皆さんが知る通り、5年前、ダイは地上を守るため、黒の核を上空に逃がす途中で爆風に巻き込まれました…しかし、すんでのところで服の中に入っていた、神の涙の欠片が光を放ち、ダイの身体を包み守ったのです」

「それを見ていた神々は、ダイをそのまま天界に連れて行くつもりでした。そして彼がもう戦わなくて良いように、彼の父や母と穏やかに暮らせるようにしようと考えたのです」

「しかし、気付いた時にはダイはそこにいませんでした。大魔王バーンを倒したダイに、利用価値があると考えた冥竜王ヴェルザーは、彼を魔界に連れて行ったのです。ヴェルザーは傷ついたダイの世話を娘や部下のモンスターにさせました。そして、ダイが意識を取り戻した時、ヴェルザーはダイに吹き込んだのです」

「魔界にはもうひとつ大きな勢力がある。それらはバーン亡き今、再びその力を拡大し始めている。もし、自分達と協力し、一緒に戦うのであれば、地上への侵略はしない、と。その代わり、地上に帰ろうとしたり、仲間とコンタクトを取ることは許されない。この要求を飲むのなら、出来るだけ平和的な解決が出来るように考える。自分はバーン等とは違い、もともと地上を破壊しようとまでは考えていないのだから、と…」

「そして、先にリリルーラで魔界に戻ってきていたキルバーンを、自分の命令に背き、アバンへの私怨だけのために黒の核を地上に向けて使おうとしたと断罪しました。そしてダイの目の前で両手両足を吹き飛ばし、地下牢に閉じ込めたのです」

「キルバーン……あの時……まさか生きていたなんて……」

マァムが驚愕の表情を浮かべたが、ポップは身じろぎひとつせず、じっと話に耳を傾けている。

「そして、ヴェルザーは今後戦うのに必要になるからと、ダイに剣を魔界に呼び寄せさせました。――実際は地上への未練を断ち切らせる

為だったのですが」
「これがこの5年間で起こっていた事です」
沈黙が流れた。
皆の心の中にやり場のない怒りと悲しみが溢れていた。
マァムは途中からずっと顔を押さえ、声を殺して泣いている。
「何という卑劣…ダイはまだ年端も行かない子供なんだぞ…!!」
ヒュンケルが怒りに我を忘れそうになるのを堪えながら、絞り出すように言った。
マザードラゴンが続けた。
「魔界には――特殊なガスが大気に充満しており、基本的には人間は行く事ができません。魔族など、魔界の血を持つものや竜族などに限定されます」
「基本的には、ってどういう事ですか？」
ポップが訊いた。
「並の人間ではその環境に耐えられないからです。肉体的にも精神的にも負荷が掛かりすぎます。大きな魔力を持つ者などでしたら、ある程度は耐えられる、と言ったところでしょうか。その昔、人間が迷い込んだ例がありますが、眩暈や吐き気、精神汚染がひどく、地上に戻ってきてからもしばらく後遺症に悩まされた、という事です」
ポップは顔からさっと血の気が引くのを感じた。
「――ところで、あなたが持っているその杖……」
「あ…ああこれ…」
「この杖はまだその真価を発揮出来ていないようです。私が力を引き出してみましょう」
沈黙を貫いていたロン・ベルクの眉がピクリと動いた。
「その杖をこちらに向けてください」
ポップが恐る恐る握ったドラゴンの杖をマザードラゴンの方に向けると、赤色の宝玉が光り始めた。七色の光を放ちながら、辺りの靄を吸い込んでいく。
「何かの助けになると良いのですが…」
「ダイを…どうか…よろしくお願いします」

マザードラゴンはそう呟くと再び靄の中に消えた。

凍てついた心に

マザードラゴンが靄の中に消えると、バランは横を向いてひとつ咳払いをした。
ふっとゆっくり息を吐くと、俯き加減で言った。
「――ヴェルザーは自分が封印されるきっかけを作った竜の騎士という存在そのものに根深い恨みがあるのだ…もちろん直接の原因である私にも激しい怒りを感じているだろう。そのせいでダイにも辛い思いをさせてしまった。…実に不甲斐ない」
「お前達、どうかダイを頼む…」
あのバランが頭を下げている。
皆が驚きの表情でこの哀れな父親の姿を見つめた。
「任せてくれ。命に替えても俺たちはダイを連れ戻すつもりだぜ」
ポップが力強く言った。
「…ヴェルザーの仕業かは分からないが…ルビスによると、先日何者かによって破邪の洞窟の守護巨人が倒されてしまったそうだ。そのせいで今、地下２００階の旅の扉の封印が解かれている。そこから魔界に行ける筈だ」
アバンとポップは動揺を隠しつつお互いの顔を見合わせた。
（…これは黙っておいた方が良さそうですね）
（はい…）
バランが光のベールの中に消えると、メルルは湖の方に向けて一礼した。
参道を戻る皆の顔には一様に沈んだ表情が浮かんでいた。
憔悴した様子で隣を歩いていたロン・ベルクがポップに話しかけた。
「ポップ…済まない」
「えっ…？その…魔界の事か？」
「そうだ…俺はもともと魔界の住人…人間が魔界に足を踏み入れた際の身体への影響など想像した事もなかった…お前の身に何かあってからでは遅かったのだ…俺はお前にも、お前の両親にも…もう顔向け

できん…」
「いや…確かに魔界から戻った直後は色々しんどかったんだけど、ちょっと寝たらスッキリしたし、もともと何があっても構わない、って言ったのは俺だからなぁ」
「それに、あの杖で魔力を増幅できてたおかげであの程度で済んだのかも知れねえし…ロンには本当に感謝してるぜ。もちろんノヴァにもな」
「そう言って貰えると有り難いが…」
　空気を変えようと、ポップはドラゴンの杖を取り出し、宝玉を見つめながら言った。
「マザードラゴンのおばちゃん、真の力を引き出す、とか言ってたけど結局何をしたんだろうな…？」
「分からんが…お前…おばちゃんって…」
　ロン・ベルクが一瞬ぎょっとした顔をしたが、すぐニヤリとしてポップに言った。
「マザードラゴンをおばちゃん呼ばわりとはさすが大魔道士様だな」
「いや…だっておばちゃんだろ…？人間で言うと何歳くらいなんだろう…俺の母さんと同じくらいか…？」
　ロン・ベルクはふっ、と笑った。
「ポップ…あまり周りに気を遣わなくて良いんだぞ」
「えっ…」
　ポップは虚を突かれた気がして、思わず高い声が出てしまった。
「今回のことを聞いて俺だって…もちろん皆そうだろうが、ショックを受けた。でも本当の事が分かったからこそ、次に何をするべきかが分かったじゃないか？」
「ダイを何があっても絶対に取り戻す…だろう？相手がバーンだろうが、ヴェルザーだろうが、もっと手強い奴だろうとな。お前が魔界に行けようが行けまいがそんな事は関係ない。みんな同じ気持ちだ」
「辛いのは、ダイに会いたいのは、みんな一緒だ。お前ひとりで背負うんじゃない」
　ポップは凍てつき、張り詰めていた自分の心にゆっくり温かい血が

流れ込んでいくのを感じた。
「うん…」
「そうだ。お前、デルムリン島に行くだろう？」
「ああ。そのつもりだけど」
「ノヴァも連れてってやってくれんか。ダイの生まれ故郷を見てみたいと前から言っていた」
「構わないぜ。でも、あいつモンスターの群れを見てビビったりして！」
「大丈夫だろう。何せ『北の勇者』だからな」
ロンがニコッと笑った。

殿（しんがり）

下の階に行けば行くほど、ひんやりとした冷気のようなものが身体にまとわりつくのを感じる。
この迷宮自体が巨大な悪意を持った怪物であるかのような――
それは恐れとなって冒険者の判断を鈍らせる。
地獄の底に向かって足を進めている亡者のような心持ちになってくる。
いつしか何のためにここに来たのかも分からなくなり、自分が何者であるかさえ分からなくなってくる。
濃い闇が、静けさと共に心の隙間に忍び込み、希望を、未来を、須く喰らい尽くしてしまうかのように。
破邪の洞窟――
地下２００階。
３人は地獄の釜の淵に辿り着いた。
「いよいよだな…」
屈強な戦士が呟いた。
「そういえば、バランからこんなものを預かってたんだ。何かの役に立つだろう、ってさ」
ポップは腰に付けた袋から何かを取り出すと彼に手渡した。
「『竜の鱗』ってアイテムらしいぜ」
「ほう…」
戦士は華奢な紐飾りのついた緑色の鱗を受け取ると、目の高さに持ち上げ、不思議そうに裏表を見比べた。
「天界に伝わるアイテムで、伝説の竜の鱗で出来てるらしいぜ。よく分からねえが、持ってるだけですっげえ強くなるんだってさ」
「…まあバランが言うのなら本当なのだろう。有り難く頂くぞ」
「こいつの分はないのか？」
懐に鱗を仕舞うと、彼はポップを挟んで隣にいるもうひとりの戦士を指差してポップに訊いた。
「あっ、そうそう。これもあったんだ…」

ポップは袋の中をゴソゴソとかき混ぜると、何かをつまみ出した。
「む…指輪か…」
青みがかった金属でできており、凝った装飾がしてある。
もうひとりの戦士がその古めかしい小さな指輪を受け取った。
「こっちは『戦士の指輪』って言って、竜の騎士に代々伝わるものらしい。防御力を高める不思議な効果があるんだとさ」
彼は右手の薬指に指輪を嵌めた。
「こんな由緒正しいものを俺が身につけるとは…畏れ多い…」
「確かに俺は指輪って柄じゃないな」
それを見ていた隣の戦士が豪快に笑った。
ポップも一緒に笑ったが、すぐに真顔になって言った。
「みんな…すまねえ。俺が一緒に行きてえのはやまやまだが…お前らに頼るしかねえ…足手まといになるのだけはやだもんな」
「ポップ。俺達に任せろ。命に換えてもダイを連れて帰る」
「じゃあ…行ってくるぞ」
そう言うと、獣王クロコダインと陸戦騎ラーハルトは旅の扉に飛び込んだ。
「信じてるぜ…」
２人の背中を見送ったポップが呟いた。
ポップの役目は、封印の解かれた旅の扉から魔界のモンスターが現れた時の為の見張りだった。
ヴェルザーが地上にモンスターを送り込み、魔界からダイを連れて戻った彼らを不意打ちしようとする可能性も考えられるからだ。
敵の本拠地を攻めるためには殿（しんがり）が重要になる――
一番避けなければいけない事態は挟み撃ちになる事。
バーンパレスでヒュンケルがアバンを欺いてまで担った役目である。
ポップは今回その役目を進んで請け負った。
――表向きの理由はそうだ。
でも本当は出来るだけダイの側に居たい、というだけのことなのかもしれない。

この冷たい地獄の底でしか見る事のできない、唯一の光。
眩しく、あまりに儚い光。
ポップは階段の縁に腰掛け、すぐそこで微睡んでいるような地獄の釜の深淵をじっと見つめていた。

人間でも魔族でも

目を覚ますと、クロコダインとラーハルトのふたりは薄暗い建物の中にいた。
目に入って来たのは、ところどころ崩れかけている石造りの壁と柱。
松明の明かりが反射し、影がゆらゆらと揺れている。
一見、何かの神殿のような雰囲気だが、それにしてはあまりに小ぢんまりし過ぎている――
部屋の暗さに目が慣れてくるのを待ってから床の端まで歩くと、自分達は階段で囲まれている、天辺が平らなピラミッドの頂上にいる、ということがわかった。
つまり、地上の旅の扉からこの祭壇の上に自分達は移動したのだ。
しかし、ここが何のための場所なのかを知る手掛かりは辺りには全くない。
「ここは魔界なのか？」
「多分な」
そんなやり取りの後、祭壇の一辺から埃っぽい階段を降りると、そこは広い部屋になっていた。
見渡すと、本棚や祭祀用の道具や敷物、壺、その他得体の知れない物がそこら中に無造作に積み上げられている。
忘れ去られた町はずれの倉庫や物置、と言った雰囲気だろうか。
ふたりは、これらの不思議な調度品の中に椅子と机があるのに気付いた。
机の上には開いたままの本と一緒に陶器のランプが置かれ、蝋燭の灯りが灯っている。
近づいてみると机の周りに古びた地図や資料の切り抜き等が散らばっていた。
不意に背後から声が聞こえた。
「お前さんたち――何処から来なすったかね」
振り向くと、そこには魔族であろう小柄な老人が佇んでいた。

腕に本を抱え、ランタンを片手に掲げている。
「ああ……儂はな、ここで地上と魔界を自由に行き来する門について長いこと研究しておるのだよ」
ふたりは自分達が旅の扉を使い地上から来た事を話すと、老人は目を丸くして興奮した様子で言った。
「何と……！　扉は存在していたのか！　この祭壇は地上と繋がっていると古い言い伝えにはあったが、まさか本当だったとは……」
老人は口の端に泡を作りながらひとしきり捲し立てた後、2人の顔を見て言った。
「儂の名はメディテ……私ができる事ならなんでも協力しようじゃないか」
そう言って皺くちゃの小さな手を差し出した。
「是非もっと話を聞かせてくれ」
ふたりと握手を済ませると、老人はどこからか二脚の椅子を持ってきて勧めた。
そして自分もさっきまで座っていたであろう机の前の椅子に腰掛けた。
難儀そうに身体をずらしてこちらを向くと、わくわくした様子でメディテは2人に訊いた。
「――で、お前さんらが旅の扉を通って魔界に来た目的は何かな？そう、例えば……親でも探しているのかな？」
キョトンとした顔をしているふたりに構わず、メディテは話を続けた。
「希望を胸に地上に出て行く魔族の若者の多くは、結果的に人間から虐げられて隠れるように暮らしている――」
「そうした暮らしが長いものは、いつしか自分のルーツが知りたいと思い始めるものじゃよ。魔族には自分の親の顔を知らないという者も多いからなぁ……」
ラーハルトが顔を顰め（しかめ）ているのに気付いたクロコダインが先に切り出した。
「俺達は訳あってダイという少年をここに探しに来たんだ」

「ほう――その者は魔族かな……？」
「いや、人間だ」
「人間に味方するとはなかなか珍しい魔族もいたもんじゃな」
　するとラーハルトが静かに言った。
「人間も魔族も過ちを犯す事がある、という点では何も変わらない……」
「そこからどう這い上がるかが、その者の価値を決めるとオレは思うがな」
「――良い出会いがあったのじゃな……そのダイという少年に儂も会ってみたいものじゃ」
　メディテがため息混じりに返した。

魔界へ……

「ほう……なるほど……ヴェルザーか……」
「やつの砦ならここから西にあるが、あそこに誰か居るとは思えんがのう……」
「爺さん。バーンが居なくなってから魔界は変わったのか？　」
　クロコダインが居住まいを正して聞いた。
「うむ……バーンやハドラーと言った連中が健在だった頃は魔界の住人達もそれなりに盛り上がっていたようじゃが、今では何も無かったかのようにすっかり落ち着いているのう」
「……地上を手に入れる、等と意気込んでいた連中というのは魔王軍と呼ばれる者達が中心で、元々魔界で生まれた我らのような市井の者は冷やかな目で見ておったよ」
「太陽がどうだの、神々がどうだの言っても仕方がないからのう。我々は皆、与えられた環境で生きるしかないんじゃ……」
「メディテ……最近、竜の騎士の噂を聞いた事はないか？ここ5年くらいの間で」
　今度はラーハルトが訊いた。
「いいや……竜の騎士の話は知らんな。魔王軍に協力している、と風の噂で聞いた事はあるが、それくらいじゃな」
　メディテは机の上にあった紙切れを折りたたみながら言った。
「さて……久しぶりにたくさん話ができて楽しかったわい。おまえさん達、ヴェルザーのところに行くのじゃろ？途中に村があるから、寄って行くといい。食べる物や寝る所くらいはあるはずじゃ」
「爺さん、色々教えてくれて助かった。礼を言うぞ」
　ふたりは魔界の地図や薬草、毒消しなどを土産にもらい祠を出た。
　外に出た2人の前に魔界の景色が飛び込んできた。
　墨色に近い暗い土に半分埋まった魔物の骸骨が転がっている。
　地表にはごつごつとした岩肌が露出し、朽ち果てた木の残骸があちこちで風に煽られビリビリと音を立てていた。
　ラーハルトが立ち尽くして言った。

「ここが魔界……」
「お前は初めてだったか……？」
「流石のオレでも気分が滅入るような場所だな」
薄明かりの下、ふたりは西に歩を進めた。
岩山の間を吹き抜ける風がヒューヒューと不気味な音を立てている。
「俺はここで生まれてからずっと、戦う事が全てだった。それが自分の存在証明だったよ。敵対する者がいれば、叩き潰す。ただ、それだけの事だったのに、俺はいっぱしの武人を気取っていた」
「俺から戦いを取ったら何も残らない、ずっとそう思っていたが、今思えば、魔王軍としてダイ達と最初に闘った時から、何かが変わり始めていたんだろうな」
目線の先に黒々とした森が見えるが、一つひとつの木は全て枯れたような色をしており、その奥に何処までも続くかのような闇が広がっている。
「……大魔王バーンの目にはバーンパレスから見た景色がどう映ったんだろうな」
ラーハルトが呟くように言った。
その時、目の前に森の中からモンスターが飛び出してきた。
グリズリー型とピクシー型……
グリズリーはいきなりクロコダインに襲いかかり、
同時にピクシーはメラを唱えてきた。
クロコダインはグレイトアックスをひと振りしてメラをかき消すと叫んだ。
「爆音!!」
直後、イオラの爆発が魔物たちを包んだ。
爆発が収まると同時に、ラーハルトが音もなく魔物達の背後に周ると、２匹の魔物を素早く魔槍で貫いた。
ヨロヨロと立ちあがって、まだラーハルトに爪を立てようとしているグリズリーを後ろからクロコダインが一刀両断すると、ふたりは再び歩き始めた。

「魔界のモンスターとて、我らの敵ではない……」
「うむ……数さえ多くなければどうという事はないな」
「どうする……？森を抜けていくか？」
「……この地図をみる限りだと、その方が近道のようだな」
ふたりは森の奥に足を進めた。

ラーハルト、悩む

森を抜けると、メディテに教えてもらった村がようやく見えてきた。
人口数百人程度といったところだろうか。
住民が魔族である以外は地上と何も変わらない。
宿屋や武器屋など商店なども点在し、人々は商いに精を出している。
若者の姿もちらほら見かける。
男女で連れ立って歩いているものもあり、彼らは幸せそうに見える。
「さて…まずは腹ごしらえだな。ん……その前に今日の宿か……？」
クロコダインがキョロキョロと店を物色している。
その時ラーハルトの脳裏にはメディテの言葉が浮かんでいた。
「――自分達は地上から来た、等と村で言ってはならんぞ。ただでさえ魔界において若者は貴重なのだ。地上への興味を焚きつけてしまっては、魔界の衰退に繋がりかねん。村のものに恨まれたくは無いじゃろ？――」
複雑な表情のまま口を結んでいるラーハルトにクロコダインが声を掛けた。
「おい、どうした？」
「いや……何でもない」
（――みてみて！あの人……渋くてカッコいいわ）
ラーハルトの隣を魔界の女性２人が噂をしながら通り過ぎていった。
「おっ、お前も隅におけんな。俺と一緒に嫁でも探すか？わっはっはっは」
クロコダインが肘でつつくとラーハルトは声を荒らげた。
「おい！クロコダイン！オレをからかうな！」
しかし、それも無理はなかった。
ラーハルトは今回の報告を聞いてからというもの、

まともに眠れず、腹わたが煮えくりかえる思いでここ数日を過ごしてきた。
ずっとギリギリの所で平静を保っていたのだ。
――考え得る最も卑劣な行為であの純真なディーノ様の心を傷つけ、あまつさえ気高いバラン様に頭を下げさせた……
ヴェルザー……!!必ずオレのこの手で粛清してやる……
ヴェルザーに対する強い殺意が身体から溢れ出し、このまま自分の姿形まで変わってしまうような気がした。
実は魔界に来る前、クロコダインに自分の苦しい胸の内を話している。
「お前はどう思うか？」
そう訊くと、クロコダインは落ち着いた口調で答えた。
「――お前の気持ちもわかる。もちろん俺とてヴェルザーを赦すことは絶対にないだろう。しかし俺達の本来の目的はダイを取り返す事だ。ヴェルザーを殺すことではない」
「ダイが俺たちとの絆を、過ごしてきた日々を、そう簡単に忘れる筈がない。俺はそう信じている。あいつが失った5年間をみんなで少しずつ埋めていけばいい。そうしたらダイの笑顔がいつかまた見れるに違いないさ」
おそらく、クロコダインも熟考した末に出した答えなのだろう。
言葉に重みがこもっていた。
その時は納得できたつもりだったが、自分の中の怒りの感情は容易にそれを認めなかった。
時間が経つと再びヴェルザーへのどす黒い憎悪の感情がむくむくと黒い雲のように湧き上がってくる。
ふたりは何となくギクシャクしたまま宿に入り、近くの食堂で簡素な食事を済ませた。
部屋に戻ると、久々の魔界だから、と言って酒を浴びるように飲んだクロコダインは先にいびきをかいて寝てしまった。
寝付けないラーハルトは、店を出ると裏手に積んであった木製のパレットに腰を下ろした。

右手の薬指に嵌めた戦士の指輪をじっと見つめると、その形をなぞるように指でなぞった。
ひとしきり指輪をもて遊ぶと、ラーハルトは空を仰いだ。
指輪をした握り拳を自分の目線まで持ち上げ、遠くに見える白い天体に指輪を重ねてみる。
白い偽物の太陽と、竜の騎士が出会い、そして別れる。
ラーハルトはしばし物思いに耽ると、ふうっと小さくため息をついた。

人間だって

ラーハルトが立ち上がろうとした時――
「ねえ」
不意に自分を呼ぶ声が聞こえた。
振り向くと少年がこちらを見ている。
見た所、１２～３歳くらいだろうか。
「お兄ちゃん、地上から来たんだろ？」
「いや……」
突然の問いに思わず口籠った。
しかしそれに構わず少年は話し始めた。
「僕、地上から来た人って分かっちゃうんだよね。なんか、雰囲気が違うっていうか」
「――地上に興味があるのか？」
「僕のお兄ちゃんも、地上に行ったんだよ。５年前に魔王軍に志願してさ」
「何……本当か？」
「うん。鬼岩城でコックみたいな事をやってたらしいんだけど、途中で逃げ出して、知り合った人間の女の人と一緒に暮らしてたんだってさ」
「でも、その事が人間にばれちゃってお兄ちゃん無理矢理別れさせられたんだよ。大きな男の人が家にいっぱい来て、お兄ちゃんをぶったんだって」
「……」
「村にはいられなくなって、魔王軍にも帰れないから友達とちょっと前に帰って来たんだよ。ルーラ？っていうのを使って」
「そうだったのか……」
ひとこと呟くと、ラーハルトは目を伏せ黙した。
一度話し出すと止まらないらしく、目の前の魔族の少年は途中途中で口籠りながらも早口で捲し立てた。
「でも、お兄ちゃんはその女の人の事が好きだから忘れられなくて、ま

た地上に行こうとしてるんだ。また人間にいじめられるかもしれないけど、それでも良いんだって」
「お兄ちゃん地上に行く前と比べてすごく変わったんだよ。たまに怖いけど、なんか前より優しくなったっていうか……」
「村のみんなには内緒だけど、人間って本当はそんなに悪い生き物じゃないのかもしれないって最近思うんだ。お兄ちゃんをいじめる人間と好きな人間がいて……よくわかんないよ」
ラーハルトは
「人間だって……」
と言いかけて口をつぐんだ。
「本当だな。お前の言う事はもっともだ」
そう言ってラーハルトは少年に優しい視線を投げかけた。
「お前、お兄さんの事が好きなんだな」
「うん」
「地上にいようと魔界にいようと兄さんはずっとお前の兄さんだ。これからも仲良くな」
「うん」
「色々話を聞かせてくれてありがとう。――さあ子供はもう寝る時間だぞ。俺も寝ないとな」
「うん。じゃあね」
気がつくと少年の姿は消えていた。
ラーハルトは一つ大きく伸びをすると踵を返しゆっくり歩き出した。
先程の少年の話を胸の中で反芻していた。
自分の中の魔族の血を恨んだ事は一度や二度では済まない。
だから自分の親父とお袋がどうやって出会ったか……
そんな事はこれまで考えた事もなかった。
もし、この村で魔族と人間のハーフの子供が生まれたとしたら、その子供と親をこの村の人々は迫害するのだろうか。
きっと魔族の血が入っている事をこの村の人々は喜び、皆で大事に育てるのではないだろうか。

……いや、それは希望的観測すぎる。
あの子供だって「村のみんなには内緒」と言っていたではないか。
これだけ地上を目指す魔族が多いにも関わらず、人間界について話す事はやはりある種のタブーになっているのだろう。
ではあの子は兄のせいで他の子に虐められているのだろうか？
そんな事をぐるぐると考えながら歩いていると、いつの間にか自分の部屋の前にいた。
ドアを開けると、クロコダインが頭を抱えて部屋の隅の椅子にもたれ掛かっている。
「どうした？」
「どうやら飲み過ぎたらしい」
「調子に乗るからだぞ」
そう言ってラーハルトはテーブルに置いてあった水差しの水をコップに注いだ。
クロコダインが半開きの目でこちらを見て言った。
「ちょっとは眠れたのか？なんかお前、スッキリした顔してるぞ」
「気のせいだろう」
コップの水をぐっ、と飲み干すとラーハルトはぶっきらぼうに答えた。

竜の娘

夜が明けて――
朝食を取ると、ふたりは村を出た。
おそらく時刻としては朝である筈なのに、ここには日の光は届かない。
朝日、という概念はきっと魔界には無いのだろう。
「お前、体調は大丈夫なのか？」
何となくすっきりしない面持ちをしている相棒にラーハルトが訊いた。
「ああ、なんとかな……魔界の酒は悪酔いしやすい。忘れていたよ。俺が酒に弱くなっただけかもしれんが」
「お前はどうなんだ。ここ最近眠れんと言っていたが」
「不思議と昨日は眠れた。何故かは分からん」
「……そうか、何であれそれはいい事だ。今日は長い一日になりそうだからな」
クロコダインが呟いた。
ふたりはヴェルザーの居城を目指し、地図を頼りに西に歩いていった。
数時間もすると、平坦だった道にはゴロゴロとした岩が目立ち始め、気がつくと山道になっていた。
標高が上がる度にヒューヒューという不気味な風の音が強くなる。
山道を進んでいくと、どんどん道は険しくなっていった。
文字通り崖っぷちをふたりは風にあおられながら、足を踏み外さぬよう慎重に進んだ。
何者かによって作られたのであろう、森を抜けた先に現れた今にも崩れそうな石の階段を登ると、そこには荒涼とした平原が広がっていた。
だいぶ高い所まで登ってきたらしい。
辺りに見える切り立った崖の高さが、それを物語っている。
遠くに見える、ささくれ立った禍々しい岩の群れを目印に歩いてい

くと、間もなくヴェルザーの城跡らしきものが見えてきた。
すぐ横を突然一匹のドラゴンが横切った。
ふたりは身構えたが、攻撃をしてくる様子はないようだ。
そのまま通り過ぎ、ドラゴンはUターンし上空に留まった。
それから何か合図を出すように数回旋回すると、元来た方へそのまま高度を下げることなく帰っていった。
「見張りって訳か」
「……油断するなよ。どこから来るか分からんぞ」
しかし、それきりモンスターの姿を見ることはなかった。
肩透かしを食らった思いだったが、ふたりにとっては有り難い。
なるべく体力を温存するために、余計な戦闘は避けたかったからだ。
瓦礫を避けしばらく歩いて行くと、砦の最深部に辿り着いた。
頭上にヴェルザーの牢獄が見える。
真向かいに立ち、ラーハルトが叫んだ。
「陸戦騎ラーハルト推参！バラン様に代わりディーノ様を貰い受けに来た!!」
不意に地震が起きた。
揺れはどんどん強くなっていく。
「――来るぞ!!」
「……!!!」
ふたりは足を踏ん張り武器を構えた。
「――お前達は本当に愚かだ――」
何処からともなく声が聞こえる。
（ヴェルザー……）
「――ダイは渡さんと言ったであろう――オレは忠告した筈だぞ――あの魔法使いの小僧にもな――」
すると、何処からともなく魔物の群れがあらわれた。
人間のように巨大な斧を持ったドラゴンの兵士が3匹。
地上では見かけない種類のモンスターだ。

ふたりは武器を振るうと、襲いかかってきたドラゴン達をあっという間に倒してしまった。
ヴェルザーは感心したように言った。
「――ほう……流石はダイを助けに来た、などとほざくだけはあるな――本来はオレが直々にもてなしてやりたいところだが、何せこの有様でな……代わりに我が娘が相手をしてやろう」
「そんな事はどうでも良い！ダイは!!ダイは何処にいる!!」
クロコダインが声を荒らげた。
「――そう慌てるな――もし万が一勝てたら地上に返してやるさ。万が一勝てたらな……」
「ダイもこの戦いをどこかで見ているかもしれんな……お前らがやられるのを見れば、諦めもついて丁度いいだろう――」
「黙れ!!貴様のような者がディーノ様の名を呼ぶ事は許さん!!」
ラーハルトが激昂し叫んだ。
「――お前は龍騎衆、バランの手下だったか――お前にも魔界の血が流れているのだろう?どうだ、この魔界でオレの下で共に戦うのは?ダイと一緒に居られるんだぞ。悪い話ではないだろう?」
「――ああ、その減らず口を閉じたら――考えてやる!!!!」
ラーハルトはヴェルザーが封じ込められている岩に向かって鎧の魔槍を力一杯投げつけた。
物凄いスピードで槍がこの魔獣の檻に吸い込まれて行く。
しかし、何者かが岩の前に飛び出し、一瞬の間に魔槍を弾き返した。
（……速い……!!）
ラーハルトは跳ね返された魔槍を手で受け止めると、目の前の刺客を睨んだ。
そこには褐色の女戦士が背中の翼をはためかせながら浮かんでいた。
「――ご紹介しよう。我が娘『ベラ』だ。美しいだろう?――」
ヴェルザーが怪しく囁いた。

激昂

「――さあ、おもてなしをして差し上げなさい」
そう言われると、ベラは上空から滑降し、片脚でラーハルトの目の前に着地した。
気圧され、思わず後ずさる陸戦騎。
「（うっ……）」
声にならない声をあげた瞬間、その腕をベラは掴んで引き寄せた。
――彼女の瞳がラーハルトを捉える。
グレーの虹彩に長い睫毛。
端正で美しい顔立ちだが、まだ少女のような甘さが残っている。
僅かに彼女の口元が歪んでいるのがわかった。
ラーハルトは自分の心の奥底にある恐れを見透かされたような気がして、軽いパニックに陥った。
次の瞬間、体が後ろに吹き飛んだ。
衝撃波のようなもので攻撃されたらしい。
背中から地面に落ちると、体中がズキンと痛んだ。
突然の事に狼狽しているラーハルトにクロコダインが声をかけた。
「おい！しっかりしろ！」
ラーハルトは自分が、なす術もなく少女にあしらわれた事に少なからずショックを受けていた。
クロコダインが雄叫びをあげると、振り上げた斧をベラに向かって投げつけた。
巨大な斧が周囲に真空の渦を巻き起こす。
ベラはその動きを観察すると、見切ったように上空に飛んだ。
「逃げても無駄だ！真空の渦がお前を捉えるまで追って行くぞ！」
気がつくとバギクロスほどに大きくなった真空の刃がベラを飲み込んでいた。
「やったか……!?」
次の瞬間、片腕を掲げたベラが渦の中心から現れた。
翼で囲われた体の周囲に真空波を纏わせ、攻撃を無効化している。

おそらく渦と逆方向に空気の流れを作り出し、相殺したのだろう。
渦が弱まり、ベラが翼のガードを解いた。
その瞬間、待ち構えていたかのようにラーハルトが飛び出した。
周囲の景色を歪ませるほどの超音速で槍を回転させると、血走った目で叫んだ。
「ハーケンディストール!!!!」
薙ぎ払われた槍から放たれた凄まじい衝撃波は大気を切り裂き、巨大な真空の刃となってベラに襲いかかった。
ラーハルトは攻撃の手を休めなかった。
間髪を入れず、再びガードの態勢に入ろうとしたベラの死角に入ると、さらに高速の突きの応酬を繰り出した。
手応えを感じたラーハルトは、一旦距離を取る為に後ろに退いた。
土煙の中から現れたベラは片腕と肩に傷を負っていた。
暗いエメラルドグリーンの血が滴っている。
表情こそ変えていないが、肩で息をしているのが分かった。
「ムッ……効いているぞ!!」
クロコダインが歓声をあげる。
「俺たちを……あまり舐めるなよ……」
息が上がっているラーハルトも苦しそうに呟いた。

するとヴェルザーが突然口を開いた。
「――嫁入り前の娘にキズを付けるとは――お前らはいい度胸をしているな……!!」
突然凄むような口調になったヴェルザーの声が響き渡ると、ふたりは戦慄し、体を硬くした。
それを振り払うようにクロコダインが叫んだ。
「お前はバーンを倒したダイさえ手に入れれば安心と考えていたかも知れんが、俺たちとて戦士の端くれ……この5年間遊んでいた訳ではない!!」
「それに……娘を戦わせているのは何よりお前自身だろう！目論見が外れたからと言って勝手な事を言うんじゃない!!」

痛いところを突かれたヴェルザーは激昂して言った。
「汚い魔界の裏切り者風情が……オレに意見出来ると思うなよ!!ここでお前らは朽ち果てる運命なのだ……!!」
「運命か……その運命とやらに抗い続けた俺達には負け惜しみにしか聞こえんな……そのおかしな岩の中から何を言おうと響くものなど無い……」
ラーハルトが落ち着いた口調できっぱりと言った。
「ええい!!黙れ!!お前ら絶対に許さんぞ!!!!」
これまでにない、激しい地震が辺りを襲った。

逆鱗

「貴様らは後悔することになるぞ……!!」
　激震と共にヴェルザーの声が轟くと、猛烈な突風が唸りをあげ、ふたりに襲いかかった。
　危険を察知したクロコダインとラーハルトはそばにあった柱にしがみついた。
「ヴェルザー、これ以上無益な戦いはやめろ……!!」
　クロコダインの言葉を無視してヴェルザーは続けた。
「これまでは手加減してやっていたが……お前らは本当に馬鹿な奴等だ。己の浅はかさを思い知るがいい――」
「防御力上昇呪文!!〈スカラ〉」
　呪文を唱えるヴェルザーの声がこだまするとと、ベラの身体がオーラのようなものに包まれた。
「防御力上昇呪文!!〈スカラ〉」
「防御力上昇呪文!!〈スカラ〉」
　ヴェルザーは立て続けに同じ呪文を唱えている。
　唱えるたびにオーラの層は厚くなっていき、今やベラの身体はまるで青白いガスの塊に包まれているかのようだ。
「防御上昇呪文!!〈スカラ〉」
　呪文を唱える声が止んだ。
「あいつ……ヤケになっているぞ……」
　驚き呆れたという様子でクロコダインが言った。
「致し方無い……許せ!!!」
　クロコダインが手で肩の傷口を押さえているベラに切り掛かった。
　そしてグレイトアックスによる、全身の力を込めた一撃がベラの首を捉えた！と思った瞬間、刃はベラの周りの青白いオーラの所で止まってしまった。
「うぐっ……うおおおおおお」
　顔に青筋を立てて、クロコダインは全身の力を込めて振り抜こうとしたが、逆にビシッという音と共に斧の刃がこぼれてしまった。

「なっ……!!」
クロコダインは驚愕の表情を浮かべたが、すぐ我に返り、大きく息を吸い込んだ。
「カアァアーーッ!!」
すかさず吐き出した高熱の息〈ヒートブレス〉をベラはひらりと身をかわした。
そして大きく胸を張ると、翼の風圧でブレスを散らしてしまった。
「おのれ……!」
ヴェルザーの声がまた聞こえてくる。
「おお……苦戦しているようだな。これは私からのプレゼントだ。受け取ってくれるだろう?」
「防御力低下呪文!!〈ルカナン〉」
今度はクロコダインとラーハルトの体が黄色いオーラに包まれた。
「やられたらやり返す。魔界の掟だ……ベラ。遊んであげなさい――」
ベラが攻撃準備に入ろうとした時、ラーハルトが駆け出した。
「おい!!俺が相手だ!!」
素早く背後に回り込むと、渾身の二段突きをベラに浴びせた。
――会心の一撃――
しかし、ベラはダメージを受けていない。
「くそッ……馬鹿な……!!」
ベラは振り向くと、攻撃直後で無防備になっているラーハルトに、真空波を浴びせた。
無数の真空の刃が襲う。
「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!」
まともに攻撃を受けてしまったラーハルトの全身から血が噴き出た。
「ほう。血の色はオレ達と同じか。汚い人間と同じかと思っていたが――」
ヴェルザーが嘲笑うように言った。
ラーハルトは、ばったりと地にひれ伏したが、何とか立ちあがろう

と槍に捕まりもがいている。
「まだプレゼントが足りないようだな――」
「防御力低下呪文!!〈ルカナン〉」
ヴェルザーが唱えると、ふたりの黄色いオーラはさらに強くなった。
「さて……第2ラウンドといったところか」
遠くで風が唸りをあげた。

地獄の底

「ヴェルザー……何か小細工をしたな……!!正々堂々と勝負しろ!!」
　クロコダインが怒りに満ちた顔で叫んだ。
「――正々堂々……？何をいう……これは戦略と言うんだ。力で押すしか能がないお前らには分からんかも知れんがな」
「力で押すだけか……悪いが生憎、それ以外の戦い方を知らなくてな」
　ようやく立ち上がったラーハルトが息を切らして言った。
「そんな哀れなお前達が死ぬ前に……望みを叶えてやろう」
　ヴェルザーが言うと、ベラは虚空に手をかざした。
　そのまま弧を描くようにゆっくり掌を動かすと、軌道に沿って明るい山吹色の光の輪が浮き出てきた。
　輪の縁には夥しい量の火花が飛び散っており、それらは円を中心に車のように高速で回転しているように見える。
　ベラが手を下ろすと、光の輪の中が一瞬光り、トンネルのように別の場所と繋がった。
「……!!」
「感動のご対面だろ……？」
　輪の向こうに見えたのはダイだった。
　驚いた様子でこちらを向いている。
「……クロコダイン……ラーハルトも……!!」
　見慣れたダイの顔を見つけると、ふたりは一瞬呆気に取られた。
「ダイ！今、助けてやる!!」
　先に我に帰ったクロコダインが手を伸ばしたが、輪の中の像は水面のように歪んでしまい、向こう側に手を伸ばす事は出来なかった。
「おっと……『勝てたら』と言ったはずだ。今はこうしてお互いの姿を魔力によって映しているに過ぎない」
　ヴェルザーがいかにも残念そうに言った。
「さぁ。第2ラウンドだったな。お前達の戦いっぷりをダイに見せてやるがいい……」
「くっ……ふざけおって……」

「――轟火!!!」
クロコダインが真上から斧を振り下ろすと、燃え盛る火の玉が光の尾を引きながらベラに向かっていった。
ベラは落ち着き払った様子で、火の玉を睨むと、真空波で炎の勢いを殺してしまった。
「ちいっ……」
様子を見ていたラーハルトが悔しそうに歯軋りをした。
ベラは両手を顔の横に掲げ魔力を集中した。
バチバチと火花が散り、凝縮されたエネルギーが光を放っている。
そして両手を合わせ構えると叫んだ。
「イオナズン〈極大爆裂呪文〉!!」
一つとなった巨大な光の玉が凄まじい勢いで迫り、ふたりを飲み込んだ。
「――ぐあっ!!」
その直後、凄まじい爆音が鳴り響いた。
爆風が瓦礫もろとも地表を吹き飛ばすと、ふたりは抉れた地面の上にゴミのように転がっていた。
「……うっ……」
ダイは苦しそうな表情をすると、耐えきれずに目の前の光景から目を逸らした。
「やめろ……!やめろよ……」
ベラはクロコダインに近づくと右腕を掴んで身体を持ち上げた。
反応がないのを確認すると、腕を掴んだまま真空波を放った。
「ぐあああああああああああ!!!」
切り刻まれたクロコダインの腕から血が吹き出した。
「お願いだ……やめてくれよ……」
「……もう戦わないで欲しいのに……」
今にも泣き出しそうになっているダイが絞り出すように懇願した。
「おっと……これはいかん……腕が無くなってしまうかもしれんな」
ダイの声を無視して、ヴェルザーの冷酷な声が響く。
(お父様……これ以上は……)

ベラが父にテレパシーで話しかけた。
（まだだ……まだバランの部下がいる――）
その時、破邪の洞窟にいるポップに異変が起きた。
「……なんだ……？なんか今物凄く邪悪なエネルギーを感じ……」
「……ダイなのか……？いや……ヴェルザーか……」
「ダイ――――」
ポップの脳裏に今にも泣き出しそうなダイの顔が浮かんだ。
「今……助けてやる……」

咆哮

ポップは手元にあるドラゴンの杖を握りしめて呟いた。
「何が起きてるのかは分からねえが……これだけは確かだ――」
「――ダイが助けを求めてる――」
こうなる事はわかっていた――
”ダイは帰ってくる”
”ただし――自分の命と引き換えに――”
遠くに離れていくダイを繋ぎ止めるにはそれくらいの代償を払わないといけない――
ポップは心の奥底でずっとそう感じていた。
もちろん、クロコダインとラーハルトを信用していなかった訳では決してない。
ただ、本当に本当の最後の瞬間には、自分は命を捨てなければならないのだと――
ダイの為にこの身を煉獄の炎に焼かれる。
そう考えると、不思議とポップの心の中は満ち足りた。
こんがらがり、もつれ合った感情の糸が解け、自分の運命が輪となって閉じていくような――
「今度こそ俺はもうダメかもしれねえ……でも良いよな――死にぞこなっちまった俺をここまで生かしてくれたのは――」
「――お前なんだからよ――」
胸のアバンのしるしをぐっと握ると、急にポップの両目から大粒の涙が溢れた。
「きっと……俺はずっと昔から死んでたんだ。お前と一緒に夢を見てただけで……それで……」
胸の奥の方から溢れ出てくる嗚咽に耐えながら涙を手で拭うと、ポップは手を着き地面に跪いた。
「……でも、本当は……きっと、俺たちは同じ夢を見てなかった。それだけが心残りだけど……もう、しょうがねえよな……」
涙が地面を濡らす横で、地面に転がったドラゴンの杖の宝玉がうっ

すらと光っていた。

――ベラは悶え苦しむクロコダインの腕を離すと、呻き声をあげているラーハルトに近づいた。

そしてその脚を掴むと、崩れた瓦礫のところまで引きずっていった。

獲物は逆さまに磔にされたような格好で朽ちかけた白い石壁の上に投げ出された。

「うっ……」

ラーハルトがようやく目を開けた。

状況を把握し、起きあがろうとしたが、全身が痺れるような痛みが続いていて、身体が動かない。

踵を返し、元いた方に戻っていくベラ。

呪文が炸裂した場所の周辺をキョロキョロと見回している。

何か探しているようだ。

しばらくして何かを手にして戻ってきた。

無表情の彼女の手に握られていたのは――

鎧の魔槍――

咄嗟にベラの意図を読み取ったラーハルトは必死に身体を動かそうとした。

気がつくと、ベラは目の前に迫っていた。

彼女は鎧の魔槍を逆手に持ち替えると、彼の鍛え上げられた脚の上に槍先を向けた。

そしてそのまま、左脚の腱の辺りまでゆっくり槍を滑らせると、頭上高く掲げた。

「――やっ……やめろ!!!」

耐えきれなくなったダイが叫んだ。

次の瞬間、ベラが手を離すと、自重に任せて落下した魔槍が無慈悲にラーハルトの脚を貫いた。

（――がぁあああっ!!!!――）

飛び散る鮮血が魔の大地を染めていく。

「……あ……あ……！」
泣き崩れるダイの頭上にヴェルザーの声が響いた。
「――所詮は魔族の出来損ない――竜の騎士に仕えるなど、出過ぎた真似をするからだ――」
その言葉にダイはビクッと身体を震わせると、
震える手で地面の砂を掴んだ。
そして何度もその拳を地に打ちつけた。
咆哮が静寂を切り裂く。

――その時、ポップの頭の中に大音響が響いた。
わんわんという鐘の音とも風の音ともつかない巨大なノイズ。
そして、悶え苦しむ生き物が絶叫しているような鳴り止まぬ残響音。
間も無くやってくる、身体がうねり、自分のものでなくなるような感覚――
ポップはダイの悲しみ、怒りが凄まじい勢いで身体の中に入り込んで来るのを感じた。
「お……おおおオオオオオオォォォォオオオオオオ!!!!!」
ポップはいつの間にか獣のように雄叫びをあげていた。
そして、転がっていたドラゴンの杖の宝玉が激しく光を放ち、その光はポップの全身を包んでいった。
破邪の洞窟が揺れていた。

逆襲

自分を助けに来たがために死に瀕している。
そんなふたりの友人を前に、ダイは自分の無力を呪った。
固く握りしめられたその両手の拳には竜の紋章が浮かんでいる――

不意にダイの頭の中にバランの懐かしい声が聞こえてきた。
（ダイ――）
「父さん……？」
（ソアラ……太陽のような……）
（ただそこにいるだけで……）
「――なんだよ……」
（お前も大人になれば……きっと）
「――何を言ってるの……わからないよ……父さん……」
涙を目に溜め、うわ言のように何かを呟いているダイの様子を見て、ベラは沈鬱な表情を浮かべた。
（お父様……私にはもうこれ以上……）
（ああ……もういい……済まなかったな――）
ヴェルザーがそう言うと、ベラはその場を離れようと顔を伏せたまま振り返り歩き始めた。
――その時、遥か上空に何かが光った。
異変を感じたベラは細い顎を上に向け、光の放たれた方向を見上げた。
見えたのは放射状に光を放っている巨大な光源だった。
「太陽……？ではないようだが――」
手で庇を作りながら薄目で様子を伺っていると、いきなり目の眩むような閃光が彼女を包んだ。
「――うっ……!!」
ベラは咄嗟に両目を手で押さえ、その場にしゃがみ込んだ。
――地上に出た魔界出身の者がまず悩まされるのは、太陽の反射光であるという。

太陽が存在しないが故に、魔界に長く暮らす者は強い光を苦手とするからだ。
もっとも、地上にいれば数年で目が慣れてしまうのだが、それでも敢えて森の中など薄暗い場所に居を構える魔界出身の者も多い。
視力が回復したベラが目を開けると、そこにいたのは稲妻を纏った、巨大な竜だった。
「……!!」
ベラはあまりの驚きに後ずさった。
（――ボリクス……？いや……そんな筈はない――）
ヴェルザーもこの状況に困惑していた。
これまで見た魔界のモンスターや自分の部下の中にも心当たりがない。
そもそも、ここまでの巨大な竜が魔界にいれば自分が気付かぬはずがないのだが。
竜は咆哮すると口から強烈な衝撃波を浴びせかけた。
後ろに吹き飛ばされそうになっているベラに対し、竜は立て続けに燃え盛る火炎を吐いた。
ベラは身を翻すと翼と真空波を全開にし、ダメージを受けながらもなんとか耐えてみせた。
炎が弱まり、ベラが翼のベールを慎重に解くと、ぎらぎらとした巨大な瞳がベラをじっと見つめているのが分かった。
その醸し出す殺気にベラは戦慄した。
普通のドラゴンが混乱して闇雲に攻撃しているのとは訳がちがう。
明らかに自分を殺そうとしている――
生まれてから今まで、ここまで直接的な殺意を向けられた事のないベラは激しく動揺した。
間を開けず、竜はベラにダイアモンドダストのように輝く、超低温のブレスを吹きかけた。
ベラは再び真空波を出したが間に合わず、翼と脚の一部が凍ってしまった。
逃げられないベラに対し、竜は再び燃え盛る火炎を近距離から浴び

せかけた。
「ぎゃあああああああああああ」
業火に包まれたベラの悲鳴が魔界の空に響いた。

――ベラの悲鳴を聞いたクロコダインが意識を取り戻した。
左腕を押さえながらよろよろと立ち上がると、相棒の姿を探した。
「お前……！脚を……！」
クロコダインは瓦礫の上に転がっているラーハルトを見つけると、片手で脚から槍を抜いた。
「ぐあっ……!!」
ラーハルトの傷口から血が吹き出す。
「手荒な真似をしてすまんな……」
クロコダインはラーハルトの上体を起こすと、その腕を自分の肩に回して立ち上がった。
「立てそうか……？」
「すまん。俺が不甲斐ないばっかりに……それよりディーノ様は無事なのか……？」
「ああ……どうやらな……それにしてもあの竜は一体……」
ふたりは少し離れたところで繰り広げられている地獄絵図をじっと見守るより他なかった。

――竜は炎に巻かれ悶え苦しむベラに輝く息を吹きかけた。
火は一旦消えたが、ブレスそのものにより受けているダメージ量が相当に大きい。
「うう……」
意識が混濁しているベラに竜はもう一度燃え盛る火炎を浴びせると、再びベラの身体が燃え上がった。
「ああああああああああああ」
その後、竜はまるで虫けらでも弄ぶかのように、炎と氷をベラに向かって交互に吐き続けた。
（――これは……何という事だ……）

ヴェルザーは突然ベラを蹂躙し始めた見知らぬ竜の登場に恐れ慄いていた。
竜は動かなくなったベラを見届けると、ヴェルザーの方に向き直り、再び大きな咆哮をあげた。
巻き起こった衝撃波で辺りに瓦礫が飛び散った。
その眼は怒りに燃えているように見えた。

瓦礫

ヴェルザーは混乱した。
（――こいつ……!!オレやボリクスと同じように――）
知恵ある竜――
竜族の歴史において、その名を受ける事ができた者はごく僅かであった。
しかし、ヴェルザーは目の前にいるこの狼藉者にある種の知性を認めないわけにはいかなかった。
――もしあずかり知らぬところで、ひっそりと新たな『知恵ある竜』が現れていたとしよう。
しかし、その性質から――
覇権を握ることに無関心で居続けられる者が果たしているだろうか。
そう考えれば、この行動も理解出来なくはない。
だが、何かが引っ掛かる……
ヴェルザーは違和感の正体について必死に思考を巡らせた。
竜は口を開けると、火炎と氷のブレスを口の中で混ぜ始めた。
みるみるうちにふたつのブレスが渾然一体となり、凝縮されたエネルギー体へと形を変えていく。
口から漏れる光を見るに、それはブレスと言うより粒子砲と言った方が近いような雰囲気だった。
（――まさか……こいつ……）
ヴェルザーの脳裏に電撃が走った。
「オオオオオオオオオォォォオオオオオオオオオオオオ!!!!!」
咆哮と共に放たれた砲撃は、岩山の頂に鎮座するヴェルザー像を捉えていた。
その一撃はくっきりとした断面を残しながら、像の約２／３を牢獄ごと削り取ると魔界の空の彼方に消えていった。
右半分を根こそぎ削りとられてしまったヴェルザー像は、バランス

を失い、グラグラと頼りなく揺れている。
（貴様……！なんという事を……このガ――）
哀れなヴェルザーの１／３は魔界の突風に煽られると大地に向かって落下し、地面に強かに叩きつけられた。
像にヒビが入るのを見ると、竜は巨大な尾を打ち付け「それ」を粉々に叩き壊した。
その辺の瓦礫と変わらない風体となってしまったヴェルザーが、それ以上声を発する事はもうなかった。
一部始終を見ていたクロコダインとラーハルトのふたりは呆気に取られたような顔で立ち尽くしていた。
「あいつ……ヴェルザーを……」
「何が起きているのか全くもって分からんが……俺たちはどうやら勝利したらしいな……」
ラーハルトの独り言のような呟きにクロコダインが応えた。
ふたりはしばらくその場を動く事ができずにいたが、ハッと気が付いたラーハルトが脚を庇いながら歩き出そうとした。
「――早くディーノ様を……」
その時、様子を見続けていたクロコダインが竜がピクピクと鼻を動かしているのに気づいた。
「ラーハルト、待て……！」
不吉な予兆を感じとったクロコダインが相棒を制止すると、ふたりは物陰に隠れた。
竜は上空に飛び上がり静止した。
空から何かを探しているようだ。
目線の端に傷ついた身体で地面を這っているベラの姿が見えたが、この竜の関心は今や別のところにあるらしい――
竜はしばらく辺りを見回していたが、ふたりがいる場所を捉えると、ものすごいスピードで近づいて来た。

夢の跡

「来るぞ!!」
クロコダインが叫ぶとふたりは武器を構え戦闘態勢に入った。
しかし予想と裏腹に、竜はふたりと距離が縮まるにつれてその速度を落とし、あまつさえ彼らの側にまるで犬のように腹這いになってしまった。
ふたりは面食らった――
「――少なくとも敵意はない、と考えて良いのだろうか……」
ラーハルトが眉間に皺を寄せて呟いた。
「そうらしいな……」
ふたりが考え込んでいると、竜は促すようにしきりに背中の方にくいくいと顎を動かし始めた。
「……乗れ、という事か……?」
クロコダインが恐るおそる口にすると、竜は少し高めの声で唸った。
「しかし……何処に連れて行かれるのか分かったものではないぞ……?」
未だ事態が飲み込めないふたりにしびれを切らしたのか、竜はふたりを咥えるとそのまま背中に乗せてしまった。
パニックに陥ったふたりをよそに、竜はそのまま上空に浮かぶとやや低空で飛び始めた。
為されるがままのふたりは振り落とされないように必死にしがみついている。
そのまましばらく敷地内をぐるぐると飛び回っていたが、途中でピクンと何かに反応し急停止した。
「ディーノ様!!」
地面にひれ伏しているダイを見つけると、ラーハルトは叫んだ。
クロコダインは隣でじっと顔を伏せたままである。
ダイは両膝をつき、まるで大地に祈りを捧げる異教徒のような格好で突っ伏したまま動かない――

どうやら気を失ってしまっているようだ。
竜はそろそろと側に近づくとダイを咥え、今度は背中に乗せずそのまま口の中に隠した。
ラーハルトはこの間、竜の様子をまじまじと観察した。
ギリギリまで身を乗り出すと、下の方の鱗の中に何か光るものが引っ掛かっている事に気がついた。
目を凝らすと、ラーハルトは思わず息を呑んだ。
それは紛れもない――アバンのしるしだった。
竜はヴェルザーの居城を後にすると、東に進んだ。
黒々とした大地が眼下に広がっている。
煙突の煙が遠くに見える。
位置的に考えて、さきほどまでふたりが滞在していた村である。
竜は何を思ったか、スピードを緩め空中に静止すると、いきり立った様子で両方の翼を広げ始めた。
何らかの攻撃態勢に入っているようだ。
突然上体を起こされ背中からずり落ちそうになったふたりは必死で鬣（たてがみ）に掴まった。
ラーハルトは竜の背中にぴったりとしがみつくと自分でもびっくりするくらいの大声で叫んだ。
「ポップ!!やり過ぎだ!!良い加減にしろ!!」
ビクッと反応した竜はくるりと旋回すると空高く舞い上がった。
「ポップだって……？」
ようやく顔を上げたクロコダインが言った。
隣に居る、ラーハルトの横顔を一瞥すると不思議そうな顔で訊いた。
「――お前泣いているのか……？」
「バカ言え――そんな訳あるか……」
巨大な偽りの白い太陽を黒いシルエットが横切っていった。
そして、3人の勇者を乗せた竜はスピードを上げると光の中に消えた。

おかえり

石鹸の香り。
それはまるでこの世のやさしい所だけを集めたような香り。
幸せに香りがあるとしたらきっとこんな匂いだ。
もし――
自分に母親がいたら、きっとこんな匂いがするだろうなと思う。
きっと、泣いている自分に
「どうしたの？」
と聞いてくれるだろう。
自分は泣いている訳を母親に一生懸命に話すのだけれど、何を言っているのか半分も伝わらない。
でも、きっと頭を撫でて抱きしめてくれる。
「分かったわ。そうだったのね――」
ぽろりと涙をこぼすと、胸がいっぱいになる。
自分でも分からない感情がたくさん込み上げてきて、ぴったりくっつくと、お腹に向かって大声で喚いた。
それからは、お風呂にいつ入るとか、ご飯は何が食べたいとか、他愛もない話をして――
眠りにつく時、おやすみと言ってドアを閉める母親の背中に向かって、ベッドの中からネズミみたいなちっちゃな声で言う。
「お母さん。明日もその次の日もその次の次の日もずっと一緒だよね？」
「当たり前でしょ」
「大人になってもずっと一緒？」
「大人になったら、その時はお嫁さんがそばにいるでしょ」
「やだ、ずっと一緒がいい」
消え入りそうな声で不安げに言うと、母親は困ったような顔をして戻って来る。
「もう、しょうがないわね」
枕元に座った母親は、背中を掌でとんとんと優しく叩きながら昔話

を聞かせてくれる。
もう何度も聞いた話だ。
当然結末も知っている。
でも、うれしかった。
そう。
いつも――
部屋の向こうから聞こえてくる父親の声。
「なんだ、もう寝ちゃったのか――」
夢見心地の中、自分の呼吸音が聞こえ始めるとだんだん意識が遠のいていく。
そしていつしか静寂が訪れる――

――ダイが目覚めると、そこはどこかのベッドの上だった。
白いシーツと白い枕。
そして白い羽毛の掛け布団。
部屋の窓は少しだけ開いており、その隙間から入って来る風でレースのカーテンが揺れている。
ダイが半身を起こして部屋を見回すと、
不意に棚に置いてある紫色のヒヤシンスの甘ったるい香りがふわりとダイの鼻をかすめた。
(さっきのは何だったんだろう……ただの夢だと思うけど――)
ダイは首を回し、大きく伸びをすると再び布団の中に潜った。
ここが何処だろうが関係ない、とにかく今はもうちょっと眠ろう――

そう思った矢先、ドアがガチャリと開く音がした。
ダイが再び身体を起こすと、ドアの前で頭に黄色いバンダナを巻いた少年が呆気にとられたような顔でこちらを向いているのが見えた。
「おい……お前いつから……!」
少年は持ってきたトレイをそばにあるテーブルにガシャっと置くと早足で近づいてきた。
そして、恐る恐るダイの顔を覗き込むと真剣な顔つきで言った。

「ダイ……おれのことわかるか？」
ダイはようやくその少年がポップである事に気付いた。
「――ポップ――？」
ポップはそれを聞くと、心底安心したようにため息をつき、安堵の表情を浮かべた。
「ホントによ……心配させやがって……」
ポップは鼻を啜っている。
事態が飲み込めないダイはおずおずと訊いた。
「あの……おれ、どうしてたのかな……？」
ポップは、ダイが地上に戻ってきた直後は錯乱状態だった事、仕方なくラリホーで眠らせ今まで2日間も寝続けていた事、クロコダインとラーハルトも無事だった事などを話した。
「おれあんまり覚えてないや……」
「まあ無理もねえよ。それにしても、前みたいに記憶が無くなってたらどうしようかと思ったぜ……」
ポップはうーんと言って首をぐるっと回した。
「じゃあ、改めて言うか……」
ポップはベッドの縁に片膝をかけると、ダイの少し痩せた両肩を抱きしめた。
ぐっと身体を引き寄せ、ダイの顔を胸に押し付けると、覆い被さるような形で肩にあごを乗せた。
そのままの格好で深呼吸をすると、ダイの身体がポップの横隔膜の動きに合わせてゆっくり動いた。
息を吐き終わると、ポップはダイの頭を撫でながら少し震える声で言った。
「ダイ、おかえり――」
「ただいま――」
銀のトレイが窓の隙間から陽光を受け、キラキラと輝いていた。

祝宴

勇者ダイ帰還の知らせは瞬く間に全世界へと広がった。
カールからロモス、テランからベンガーナ、リンガイアからオーザム、そしてパプニカへと――
各国で勇者の帰還を祝う式典が執り行われ、大規模な恩赦が実施された。
商魂逞しいベンガーナ王国のデパートでは、大規模な『勇者の帰還セール』が開催され、今後は街頭パレード等も企画されているという。
また、モルホン一座による演目『勇者ダイ―その愛と苦闘の日々―』が大人気を博しているらしい。
ここカール王宮でも、連日盛大な宴が開かれていたが、ダイ本人が出席する席はアバンの配慮により身内中心の小規模なものだけに留められていた。
この日の主賓はパプニカから招かれた三賢者とバダック、そして――あれからずっと部屋に篭りきりの――レオナであった。
王の間に近い中程度の広さのホールにて、ホームパーティのようなカジュアルな雰囲気の中、ブッフェ形式での宴席が設けられていた。
カチャカチャと食器が触れ合う音や、あちこちから聞こえる笑い声で、会場は賑やかな雰囲気に包まれている。
「フローラ殿、お招き頂きありがとうございます」
蝶ネクタイ姿のバダックがうやうやしくお辞儀をした。
「バダックさんお元気そうで――こちらこそ遠いところをお越し頂きありがとうございます。お会いできて嬉しいわ――」
「こうして皆が集まって楽しくやれるのもダイ君のお陰ですな」
「ええ。彼にはどんなに感謝をしてもしきれないわ――」
「――ところで、うちの姫様ですが……」
バダックが眉を八の字にしながら小声で囁くと、フローラは気の毒そうな顔で頷いた。
「……やはりショックが大きいようで、まだ……さすがに今日の席にはお顔をお見せになるとは思いますが――」

「公務がありますからなぁ……さすがにこのままですと――」
レオナはポップからダイについての第一報がもたらされてから、ずっとここカール王国での自室に引き篭もっていた。
その間、食事は侍女が毎食運んでいたのだが、手がつけられていないことも多かったようだ。
その後の一連の出来事については逐一フローラを通じて伝えられていたが、レオナはずっと沈んだ様子だった。
ダイが戻ってきた事を伝えた際も「そう――」と言ったきり黙ってしまったらしい。
しかし、ダイが戻ってきてから7日目の今日、自国のパプニカから家臣達が訪れ、カール王国内からもパプニカと縁深い者が招かれているこの席で、王女本人が姿を見せないという事は国交上の問題からも考えられない事であった。
「そうですね――アポロさんもだいぶお疲れのようでしたし……」
レオナ不在の間、王女は現在体調を崩している、と要人達に説明し、アポロが代わりに公務を執行していた。
本来の役目である法案の審議に加え、国際会議への出席や国内・国外への視察などが重なり、彼の疲労はピークに達していた。
今日のパーティもあと1時間後には退席し、帰国する予定である。
ふたりがグラスを持ったまま話を続けていると、不意にホールがざわついた。
どうやらアバンに連れられダイが現れたようだ。
「おっ！勇者ダイのお出ましだぞ！」
フローラとバダックは人集りができている方向を向いたが、人混みに阻まれダイの姿を見る事はできなかった。
皆が拍手しダイの名を口々に叫んだ――
涙する者もいれば、中には好奇の眼差しで見つめるものもいる。
「おおー！ダイ！似合うじゃねえかよ！」
ちゃっかりパーティーに参加していたポップが正装したダイを突っついている。
「カッコいいわよー！」

大きく背中の開いたドレスに身を包んでいるマァムも声援を送った。
ダイはもじもじし、恥ずかしそうに下を向いている。
「お前もなんか飲むだろ？」
ポップが葡萄ジュースの入ったグラスを手渡すと、ダイはそれをグッと飲み干した。
「おっ！いい飲みっぷりだ！俺と勝負するか？」
クロコダインが言うと、ドッと笑いが起きた。
ダイもつられて一緒に笑った。
アバンは始終にこやかな表情だったが、時折真剣な顔でダイの表情や様子を観察していた。
ここでは気心知れた仲間が殆どとは言え、約5年も魔界という特殊な状況下にいたのだ。
それもヴェルザーに――洗脳とまではいかないかも知れないが――地上とのコンタクトを禁じられ、圧力をかけられていたこともある。
大きな環境の変化を受け入れるのにはそれなりの時間が必要だろう。
そのため、地上に戻ってからダイはアバンの計らいにより、毎日1～2時間ほど専門家のカウンセリングを受けていた。
ダイを以前から知るものは皆、そんなダイの状況を痛いほどよくわかっている。
しかし――だからと言って、腫れ物扱いするのはやめよう、と帰還後直ぐに持たれた話し合いで満場一致で決まったのだ。
皆、どんな困難もダイと一緒に考え、乗り越えて行く覚悟が出来ているのだから――

友だち

ラーハルトがダイに料理の説明をしていると、不意にヒュンケルが割り込んできた。
「ダイ、美味いぞ。食べてみろ」
褐色のオニオンソースがかかったローストビーフをヒュンケルが差し出すと、ラーハルトは不服そうに言い返した。
「ダイ様は島育ちだ。どちらかと言えば魚介の方が馴染みがある――」
睨み合うふたりを前にダイが困った顔をして言った。
「俺……どっちも好きだよ……」
「おいお前ら。向こうでスシという珍しい料理を作っているらしいぞ。見に行ってこい」
後ろから来たロン・ベルクがふたりに言うと、長兄と義兄弟はふん、と言う顔で人集りができているカウンターに別々に歩いて行った。
「――ダイ君――」
ダイがヒュンケルに渡されたローストビーフを頬張っていると、物陰から呼ぶ声が聞こえた。
ダイが振り返ると、レオナが手招きをしている。
(姫様!)
それを見たアポロが近づこうとすると、マリンがその腕を掴み、制止した。
目の下に深いクマができているアポロがえっ?と言う顔で振り返った。
マリンは厳しい顔で首を左右に振っている。
レオナはダイを連れてホールの奥から廊下に出ると、ダイを自室に連れて行った。
部屋に入りドアを閉めると、レオナはドレッサーの椅子に座り、鏡の方を向いて俯いた。
「ダイ君もそこに座って」
レオナは部屋の真ん中にある籐で作られている椅子にダイを座ら

せた。
　しばし沈黙が流れた。
「レオ――」
　ダイがレオナの背中に向かって口を開きかけると、
　彼女が先に言った。
「遅くなっちゃったけど、ダイ君――おかえりなさい」
「うん。ただいま――」
「もう、ほんと――5年も居ないとかやめてよね。わたし、もう会えないと思っちゃったんだから」
「ごめん――そんなに時間が経ってたなんて、分からなくてさ」
　鏡の方を向いたまま、少しおどけた声でレオナが言った。
「もう！でもいいわ。ダイ君だから許してあげる――でも、ひとつだけ約束して欲しいの。大事なことよ」
「――もう黙ってどこかに行かないで」
　レオナが少しだけ涙声になっている事にダイは気付いた。
「ひとこと――たったひとこと、何か言ってくれさえしたら、きっと――わたし、おばあちゃんになったって待ってられるから」
「うん――本当にごめん……約束する」
「絶対だからね――ねえ、ダイ君？これからも、わたしの〝友だち〟でいてくれる？」
「もちろん。レオナは俺の大事な〝友だち〟だよ！」
「わたし――邪魔じゃないわよね!?」
「えっ!?そんなわけ無いだろ！」
「そ、そうよね！変なこと聞いてごめんね」
「ううん」
　レオナはくるりと振り返ると、クローゼットの方に歩きつつ、首の後ろのネックレスの留め具を外しながら言った。
「ねえ、私、ドレスに着替えなきゃ――王女様にならないといけないからさぁ。……まぁダイ君が居ても良いんだけどね――」
「いや……！俺出るよ……」
　顔を赤くしたダイが慌てて言った。

後ろでドアを閉める音が聞こえると、レオナは小声で溜め息混じりに言った。
「これはまだだいぶ時間がかかりそうね――」
レオナは黄色いドレスに着替えると、背筋を伸ばしホールに向かって歩き出した。

勇者の休日

「あれ？こっちのはずなんだけどな――」
「ポップ……ほんとに大丈夫？」
ふたりの間をタヌキがそそくさと横切っていく。
勇者一行はロモスの山奥で道に迷っていた――
今にも泣き出しそうな顔でポップが叫ぶ。
「あ～！もうこの地図どう見れば良いんだよ……！」
「こっちが北って書いてあるけど」
「北ってどっちだよ！」
「ええ――！今までそれも分からないで進んでたの!?」
「うっ……うるせえな！俺の勘は誰よりも当たるんだよ！」
超絶方向音痴のポップ達が向かおうとしているのは、ロモス地方に伝わる秘湯「つやつやの湯」である。
事の発端は、ポップの思い付きだった。
せっかくダイが帰って来たのだから、これまで出来なかった事をしよう！と言い出したのだ。
渓流釣りがまず候補に上がったが、この時期は水温も低く、シーズンにはまだ早いということで却下。
絵を描いてみようという案もあった。
しかし、自分たちが描いた絵のあまりの下手さにふたりとも黙り込んでしまい、これも却下。
（試しにバダックを描いた絵をマァムに見せたところ、嬉しそうに「うまーい！これ『くさったしたい』よね！」と言われたのが痛恨の一撃となった）
そして、最後に残った候補が温泉だった。
先日のパーティでヒュンケルとたまたまその話になり、教えてもらったのだ。
その時に手書きの地図をもらっていた。
（なぜかエイミから手渡された）
ヒュンケルによれば、この温泉に入ればどんな傷の治りも早くな

り、肌がつやつやになるのだという。
「オレはバーンパレスでの戦いの後、もう二度と戦えない身体だった――最初は半信半疑だったよ」
いつになく熱っぽく語るヒュンケルの話にふたりは引き込まれた――

ダイは前日にポップの家に泊まり、朝早くに意気揚々とランカークスを出発した。
しかし、昼をとうに過ぎ、あと数時間もすれば陽も暮れようかという状況の中、ふたりは未だ「つやつやの湯」に辿り着けずにいた。
「ダイ……やっぱおれもう……ダメかもしれねえ――おれの冒険は……ここまでだぜ……」
ポップが憔悴した顔で言うとダイが慌てて嗜めた。
「そんな事言うなよポップ！おれたち約束したじゃないか。最後まで諦めないって――」
「でも……どっちが北かも解らねえようじゃ……」
「見てよ。この地図だと、ロモス王国がここだろ？で、向こうにロモスの見張り塔が見えるから、おれたちそこまで外れた道を歩いてはいないと思うんだ」
「確かに……！」
ポップの顔に生気が戻って来たのを見て、ダイはホッとした。
「そうだ……もう何時間かかったって構わねえ――おれたちふたりは何度も奇跡を起こして来たんだもんな！」
「ポップ。おれたち……最高の友だちだよ」
「ダイ……わりい……おれ……！」
とめどなく流れる涙と鼻水をそのままに、ポップはダイと熱い抱擁を交わした。
その時、後ろから人の足音が聞こえた。
落ち葉や木の枝を踏みしめる音がだんだん近くなってくる。
ふたりが振り返ろうと思ったのと同時に、後ろから声が聞こえて来た。
「あれ!?あんた達ここで何やってんの？」

声のする方を見ると、アウトドアファッションに身を包んだマァムとメルルがそこにいた。
「マァム……!!」
ポップが泣きながらマァムに走り寄るのをダイは冷めた目で見つめていた――
（うわ……なんか泣いてる――）
マァムが少し体を斜めにして身構えていると、後ろでメルルが手を振った。
「ポップさん！ダイさん！」
「メルル！久しぶり！」
「ダイさん……本当に帰ってきたんですね……」
「うん……心配かけてごめん」
「また会える日が来るなんて……本当に良かった……」
メルルはダイの前に進み出ると目に涙を溜め、ダイの手を両手で握った。
その後ろでは泣きながら抱きついてくるポップをマァムが必死に引き剥がそうとしている。

「――偶然ね！あんた達もつやつやの湯？」
「うん。マァム達もヒュンケルから聞いたの？」
ダイが訊くと、マァムは水筒の水を飲みながら答えた。
「前にこの辺でばったりヒュンケルに会ったときに聞いたのよ。ブロキーナ老師の住んでるところからそんなに離れてないみたいだったし、なんとなく場所の見当はついてたから今度一緒に行こう、ってメルルと話してたの」
「そうだったんだ」
「でもあんた達、私達が来なかったらずっと森をさまようことになってたわね」
ダイとポップは面目ない、と言う顔で下を向いた。
「ポップさん達が声をかけてくれれば、みんなで一緒に出発できてたかもしれませんね――」

「そうよ。あんたの方向音痴は分かってるんだから。５年前ダイを探して３人で旅をした時だって、結局メルルの占いに頼ってたじゃない」
「みんな、おれのためにそこまでしてくれてたんだ……」
ダイが申し訳なさそうに言った。
「そんなの気にしなくて良いわよ！こうしてダイが戻って来たんだから結果オーライよね」
メルルもニコニコして頷いた。
「さぁ！行きましょう。ぐずぐずしてると日が暮れちゃうもんね」
４人になった勇者一行は、マァムを先頭に秘湯「つやつやの湯」を目指して山道を進んでいった。

おいでませ！つやつや温泉郷――

山道を３０分ほど歩き、マァム達は「つやつやの湯温泉郷」にたどり着いた。
入り口のやたらと派手派手しいゲートをくぐると、
そこから道は緩やかな下り坂になっており、両側は土産物屋や飲食店、占いの店等がびっしりと軒を連ねている。
少し道を入ると、そこかしこで温泉の蒸気がもくもくと上がり、老若男女行き交う人々はみな一様に楽しそうだ。
また、遠くを見れば、山の麓の温泉らしく彼方に見えるロモスの山々の景観も楽しむことができた。
まだ麓に残る紅葉と山頂付近の冠雪のコントラストが実に美しい。
温泉に浸かりながら眺める夕暮れの景色もきっと格別であろう。
「やっぱりいい雰囲気ね。これぞ温泉街！って感じ」
とマァムが顔を綻ばせると、
「本当ですね！まさかこんな所にこんなに楽しい場所があったなんて」
と、メルルも目をキラキラさせる。
皆で通りを歩いていると、ポップの隣を若い女性二人組が通り過ぎていった。
温泉帰りなのか、少し濡れた髪と上気した肌が妙に色っぽい。
ひとしきり目で追っていたポップが肘でダイをつっつくと、耳元で囁いた。
（おい、ダイ――？おれたちもしかして凄えとこに来ちまったんじゃねーか？）
鼻の下を伸ばして浮かれるポップの真意を知ってか知らずか、ダイは目を丸くしキョロキョロしながら逆にポップに訊いた。
「ポップ！湯気が立ってるこれ、みんな温泉なの？」
「――そうだろうな。こんなにあったら１日じゃまわりきれねえよな」
「おれ、温泉って入るの初めてなんだ」

「へえ。デルムリン島にはなかったのか？」
「うん。ずっとじいちゃんが沸かしてくれる風呂だったよ。温泉も湧いてたみたいだけど、温度が高すぎてとても入れなかったんだ」
「じゃあ、温泉初体験ってやつか！そりゃ良かったな」
　ポップはダイを連れてきて良かった……と心の中でガッツポーズをした。
「それにしてもこんなに温泉がいっぱいあると……」
「どこに入ろうか迷っちゃいますよね」
　マァムとメルルが頭を悩ませていると、ポップが元気よく言った。
「おっ！マァム！ここなんかいいんじゃねえか!?」
　マァムはポップが指差した看板を見た。
「つやつや源泉掛け流し露天風呂　効能：乾燥、切り傷、やけど、冷え性（男女混浴）」
　と大きく手描き文字で書いてある。
「えっ？どれどれ……えーっと……源泉掛け流し」
（……こん、よく……？）
　ポップの邪悪な思念を感じ取ったマァムの表情がどんどん険しくなっていくのを見て、メルルはソワソワしている。
（ど……どうしましょう……）
「うん、ここなら間違いねえな……」
　マァムは腕を組んで得意げにふん、と鼻を鳴らしているポップを睨みつけ問いただすように言った。
「――ねえ。ポップ？どうして――ここが良いと思ったのかしら」
「えっ――（やべえ気付かれたか……!?）そ、そうだな……効能も申しぶんねえし……」
「そもそも、つやつやの湯って基本的に源泉は1種類だけよね。効能ってそんなに変わらないんじゃないかしら……！」
　耐えられなくなったメルルが慌てて間に割り込んだ
「あっ……あの！入る温泉はゆっくり決めれば良いじゃないですか？せっかくだからちょっとお店を見てまわりません？私達ずっと歩いてきたからお腹も空いてますよね……？」

「それもそうね。先にグルメスポット巡りでもしましょうか」
（チッ――）
「お……温泉まんじゅう、ヤマメの塩焼き、温泉たまご、ロモス名物地獄蒸しプリン、つやつや温泉うどん……私……迷っちゃうな～！」
一生懸命はしゃぐメルルと、店先で蒸しているまんじゅうに釘付けになっているダイを尻目に、ポップは小さく小さく舌打ちをした――

～温泉街のポプマ～

ここは温泉街。
ある路地裏の片隅で――
薄く漏れ聞こえる外の喧騒から逃れるように
ポップは片手で小さな窓にかかっていたカーテンを閉めると、隣に座るマァムの細い肩に手を回した。
「……何……？」
気がなさそうに訊くマァムの眼をポップは覗き込んだ。
彼女は目を逸らすと、うざったそうに首を傾けた。
部屋の角では薪ストーブの炎がチラチラと揺れ、うっすらと心地の良い音楽が流れている。
「何って……お前もその気があるから此処に来たんだろ」
「はぁ……？何その言い方……」
ポップはふっ、と笑うとマァムの耳元で囁いた。
「これ見てみろよ」
――ポップが見せた「それ」は実に立派だった。
「それが……何なの……」
マァムが一瞥した時、微かにごくりと喉を鳴らすのをポップは見逃さなかった。
「――おれは、お前に味わって欲しいんだよ」
「なんで……」
不意を突かれ、思わず下を向いてしまったマァムの手を掴むとポップは優しく「それ」を手に握らせた。
マァムが黙っていると、ポップは「それ」をマァムの口元に持っていき、顔を見つめながら悪戯っぽい口調で囁いた。
「――おれ、知ってんだぜ。マァムが『これ』を好きだってこと――」
「えっ……」と言いかけたマァムの口にポップは「それ」を滑り込ませた。
（んっ……！）
「ちょっ……！と！」

マァムは手で振り払うと、責めるような口調で言った。
「もう……！なんでいきなりそういう事するわけ？」
少しだけ涙目になっている。
「こんなに大きいの……怪我したらどうするの……？」
「わりいわりい！でも……懐かしいだろ……お前の好きな……」
言葉とは裏腹にポップは悪びれる様子もなく言った。
「そうだ……コレをかけるともっと『美味く』なるぜ」
パシャパシャと透明の液体を振りかけると「それ」はてらてらと艶かしい光沢を放った。
それを見たマァムは今度ははっきりとごくり、と唾を飲み込んだのがわかった。
「マァムは正直だな……さっきはおれが悪かった。今度は自分で味わってみろよ」
「……分かったわよ」
マァムは髪をかきあげると「それ」を手に取ってまずじっくりと眺めた。
彼女の白いうなじが少しだけ紅潮しているのが分かる。
彼女は満足そうな表情を浮かべると、マァムはゆっくり口に「それ」を含んだ。
奥までゆっくりねぶりとるように「それ」を動かすと、桜色の唇が（ぱっ）と一瞬開いた。
艶かしく息を吐くと彼女は恍惚の表情を浮かべた。
その様子を満足そうに眺めるポップ。
「今すげえいい顔してたぜ……マァム」
「もう、意地悪……！」
少し汗ばんでいるマァムを見て、ポップが言った。
「上、脱いだ方がいいんじゃねえか」
「余計なお世話」
「ところで……」
「あと2本あるんだけど……」
マァムがポップの手元を見ると、そこには立派なヤマメの塩焼き串

が2本握られていた。
「お前……もう一本食わねえ？」
「はぁ？いらないわよ！」
「うまそうだったから調子に乗って買いすぎちまった……おれ、2本食ったところでなんか飽きちまって……」
「そんなの知らないわよ！自分で処理すれば？私、まだ他にも色々食べるんだから」
そう言ってマァムは炉端焼きの店を出ていってしまった。
取り残されたポップは店内でひとり、3本目を黙々と咀嚼している。
「――あいつ、焼き魚大好物だからいけると思ったんだけどな……しょっぱくて美味いけど――さすがにこりゃ飽きるぜ……」
スダチの汁をかけたヤマメの塩焼きがつやつやと艶やかに輝いていた――

～湯けむりポダポ～

「――来ないのか？」
ポップはとろんとした目つきでダイに訊いた。
「――だって……おれ、こういうの初めてだから」
ダイが少し怯えたような表情で答えると、ポップはやれやれというように頬杖をついた。
「怖くなんかねえよ……」
ダイは目の前の兄弟子に恐る恐る聞いた。
「ポップは初めての時、なんていうか……怖くなかったの？」
「どうだったかな……もう思い出せねえけど」
「でも……」
「でも？」
「――いや、やっぱやめた」
「なんだよー！」
ポップはダイを揶揄うと悪戯っぽく笑ってみせた。
悔しそうな顔で膨れっ面をするダイ。
「ああー！もう勇者のくせにだらしねえなぁ……」
ポップはそう言ってダイに向かって片手を差し出した。
「じゃあ、おれが見ててやるよ。それなら安心だろ？」
ポップは困ったような顔をしながら、どこか楽しそうでもある。
「……」
無言で手を握り返すダイにポップは小声で囁く。
（そんなんじゃ気持ち良くなれねえぞ――）
ポップの声を聴いたダイは意を決したように目を瞑ると、繋いでいる手をぎゅっと握りしめた。
ポップの目の前で顕になったダイの下半身がガクガクと震えている。
「ゆっくりでいいからよ……」
恐る恐る腰を落とすダイをポップは優しい眼差しで見つめている。
「おれ……怖いよ、ポップ――」

「じゃあ１ｃｍずつでいいから自分で動いてみろ」
ダイは眉間に皺をよせながら少しずつ腰を落とした。
「そうだ、いい調子だ。やれば出来るじゃねえか。さすがダイだぜ――」
「あっ……うッ……」
ダイは苦悶の表情を浮かべながら、ぐっと歯を食いしばっている。
「熱い……熱いよ……」
ポップは上気し紅潮したダイの頬に手を当てると
嗜めるように言った。
「おい、力みすぎだぞ。気持ち良くなりたいんだろ――もう少し力抜けよ――」
「……だ、だって……初めてだし、なんて言うか…身体が溶けちゃいそうだ」
今にも泣き出しそうなダイが堪らず腰を浮かせようとすると、ポップはすかさずダイの両肩に手を置きその身体を押さえつけた。
「おい！ポップやめろよ……！」
「逃がさねえ――」
「本当に怒るぞ。おれのこと、なんだと思ってるんだよ……！」
「――まるで弟みたいな存在、ってやつ？――」
怒りをぶつけるダイに対して、悪びれる様子もなくポップがさらりと言うと、勇者は顔を背け乱暴に溜め息をついた。
――しばしそのままの体勢でじっとしていたふたりだったが、ダイの表情が幾分柔らかくなってきたのを見て、ポップは優しく声を掛けた。
「どうだ？もう大丈夫だろ？」
「ああ……慣れてきたよ」
「おう」
「おれ、さっきはイライラしてたけど、ちょっと気持ち良くなってきたかもしれない」
「そりゃひとつ大人になったな」
とろんとした目をしているダイから手を離すとポップはダイに頭

を寄せて耳元で囁いた。
「おれの言ったとおりだったろ――」
「そうだね」
　恥ずかしそうにダイが笑った。
「しかしお前――」
「ブラスじいちゃんのとこでどんだけぬるい風呂入ってたんだよ」
「おれ……熱いの苦手でさ。子供の頃からずっと風呂はぬるめだったんだ。おれが入った後はブラスじいちゃん自分で沸かしてたよ」
「ほんとお子ちゃまだよな……おれなんか熱くないと風呂に入った気がしねえぜ」
「熱い風呂もいいもんだね。なんか血の巡りが良くなって身体の疲れが取れていくような気がする」
「おっ、いいぞ。分かってきたじゃねえか」
　天井を見上げながら、ポップが嬉しそうに言った。
「そう言えば――」
　何か思い出したようにダイが呟いた。
「ポップの口の中、あったかかったなぁ」
　想定外の言葉にポップはうっ、という顔をした。
「お前――こんな所でいきなり気色悪いこと言うなよな……」
　ダイはポップに構わず続けた。
「おれ、うっすらとだけど覚えてるんだ。なんかあったかくて湿ってて、でも妙に落ち着くっていうか。ああ、おれポップの中にいるんだ、って思って」
「おい、お前……それ……絶対に姫さんの前とかで言うなよ……」
　ポップが頭を抱えているとダイが無邪気に返した。
「えっ……？なんでだよ。だってポップがドラゴンになって、魔界からおれを連れてきてくれたんだろ？」
「いいから、絶対に言うな……！」
　いつになく真剣な表情のポップに気圧され、ダイは黙って頷いた。
　この空気を変えようと、ポップが話を切り出した。
「――そういえば、お前、5年経ってるのにあまり身体が大きくなって

ねえよな」
「その事、ロンに聞いたんだけど、魔界の瘴気の影響で身体の成長が遅くなってるんじゃないか、ってさ。地上に戻ったから、多分だんだん普通の成長スピードに戻るだろう、って言ってたけどね」
「へえ。ちっちぇーダイのままじゃ困るもんな」
ポップがニッと笑うと、ダイは負けじと得意気な口調で言った。
「おれ、ポップの背丈なんかすぐに追い越しちゃうよ。ポップってマァムよりちょっと身長低いだろ。多分あっという間だよ」
「あっ、言ったなお前！おれが地味に気にしてることを！お前もう許さねえぞ！」
ポップがダイの顔にお湯をかけると、ダイも対抗してバタ足でお湯をかけ返した。
湯けむりの中、楽しい時間はいつまでも続いた――

～ドキ??ドキ??メルル～

メルルは薄暗い部屋のベッドの上で目を覚ました。

（――あれ……私……？）

ベッドの横に置かれたチェストの上に、東洋風の彫刻があしらわれた古びたランプが置かれている。

どうやらこれがこの部屋の唯一の灯りらしい。

足側には古い事務机があり、無造作に書類が広げられているのが見える。

そして、何かの薬品だろうか、ビーカーに入った透明の液体が何種類か。

ガラスの表面には何かのラベルが貼ってあるが、明るさが足りないせいで読むことができない。

メルルのそんな状況を嘲笑うかのように蝋燭の灯りが壁でチラチラと揺れていた。

そして何処からともなく漂ってくる花のような、樹脂のような、妖しい香り――

その香りを鼻腔に吸い込むと、メルルは夢とも現とも付かない心地になるのだった。

不意に部屋を仕切る木製のパーテーションの向こうから低い声が聞こえてきた。

「お目覚めかな――？」

屈強な男がふたつのパーテーションの隙間から顔を出した。

その男は無精髭を生やし、使い込まれ襟のよれた緑色の麻の半袖シャツを雑に羽織っている。

その顔は幾分疲れているように見えた。

まだ意識が朦朧としているメルルに近づくと、男は投げ出されているメルルの艶かしい白い脚を見て、ぶっきらぼうに言った。

「――じゃあ……そろそろ――」

男は机に置いてあるビーカーのひとつを手にやって来ると、メルルの無防備な下半身をねっとりと眺めた。

そしておもむろにガラス瓶の中に手を突っ込み、微かに芳香を放つとろりとした馨しい液体を毛深い指に纏わせると、思わせぶりな仕草でぐりぐりと指を器用に動かしながら掌に馴染ませた。
男は跪くと、メルルの敏感で柔らかい部分を下から上に撫で上げるようにしてその液体を満遍なく塗りはじめた。
（あっ……うっ……！ん……）
メルルは男のなすがままにされながら、苦悶と快感、そして少しの羞恥が入り混じった表情を浮かべていた――
「いきますよ」
落ち着き払った声が聞こえ、不意に男の太い指が入ってきた。
メルルは身体の芯に杭を打たれるような重さに目眩を感じつつも、その奥に微かに感じる痛痒いような感覚に神経を集中させた。
時折、苦悶の表情を浮かべながらも、指が下から上に流れる度にメルルの全身は素直に反応した。
「あっ……はっ」
男の指の動きに合わせて呼吸をしているメルルは、自分がまるで人形か何かになったような錯覚に陥った。
「隣でお友達も楽しんでいらっしゃるようですね」
男はそう言うと、くちゅくちゅと指が擦れる音を部屋に響かせた。
そして、指の形をくの字に変えると、いっそう低い声でメルルに訊いた――
「ここはどうかな……？」
男の指がメルルの違う部分を擦りはじめる――
「あっ……いゃああっ!!!」
メルルは脳天に突き刺さるような衝撃に耐えながら、陸に打ち上げられた人魚のようにビクンと身体を震わせた。
息がどんどん荒くなっていくメルルに男は優しく尋ねた。
「ここはやめましょうか――？」
メルルは顔を真っ赤にして叫んだ。
「いえ――大丈夫です！やめないでください！」
男は安心したようにぐちゅぐちゅと音をたてながら、そのまま指を

動かすスピードを早めていった――
メルルは唇の端を歪めながらタオルケットの端を両手で握りしめていたが、
途中で頭の中が真っ白になってしまい、その後はどこをどうされたのか覚えていない――
いつの間にか行為が終わった事に気づくと、メルルは顔を白い腕で隠しながら呼吸を整えていた。
メルルの頬や太腿の内側はうっすらと薔薇色に色付き、背中に汗が滲んでいるのがわかった。
――全身が暑い。
ゆっくり服を着替えていると、パーテーション越しに男の声が聞こえてきた。
「お疲れ様でした」
トレイに小さい透明なガラスの急須とグラスを乗せて男がやって来た。
「マロウティーです。心を落ち着ける効果がありますよ。よくかき混ぜて召し上がって下さいね」
「わあ！綺麗な色のお茶ですね」
メルルはお茶の入ったグラスを眺めながら恥ずかしそうに言った。
「すいません……なんか最初……私、寝ちゃってたみたいで……」
「ああ、大丈夫ですよ。温泉帰りでしょう？そういう方いっぱいいますし」
メルルはふふふ、と笑うと、大きな目をウルウルさせて訊いた。
「でも……足つぼマッサージってあんなに痛いんですね！わたしびっくりしちゃった」
「ああ、親指のところ痛かったですよね。あのツボが痛いっていう人は普段から頭を使っている人が多いんですよ」
「まあ！」
「まだお若いのに、色々と大変でいらっしゃるんですね。たまには息抜きすると良いですよ」
そう言うと男は奥からリボンの付いた小さな包みを持ってきた。

「ロモスで採れるカモミールを使った、自家製のハーブティーです。不安や緊張をやわらげ、睡眠促進の効果もあるので、寝る前に飲むといいと思いますよ。良かったらどうぞ」
「こんな素敵なものを……なんかすみません！ありがとうございます」
「いえいえ！気が向いたらまた来て下さいね」
男はにっこり笑った。

「私、手のツボマッサージも追加でやってもらったんだけど、もう気持ちよくて途中で寝ちゃった！いやー！これは私ハマるかも」
会計後、マァムがメルルに興奮気味で言った。
「そんなのもあったんですね！今度私もやってもらおうかな」
「そういえばメルル、なんか全身痒くない？」
「確かに！血行が良くなったからかもしれないですね」
「けっこう汗もかいちゃったし……もうひと風呂浴びちゃう？」
「行っちゃいますか！」
――その時、マァム達と入れ替わりに怪しい人影が建物に忍び込んでいくのが見えた――

犯人を探せ

あれから2時間もの間、お湯の中で戯れていたダイとポップはすっかりのぼせていた――

「ポップ～なんかフラフラするよ～」

「そんなの気のせいだろ～！おっ、あの看板、ぐるぐる回ってて面白えなあ」

その時、千鳥足で通りを歩くふたりの耳に、絹を引き裂くような若い女性の叫び声が飛び込んできた。

「きゃーー！ドロボーよーー!!」

ふたりの目が途端に真剣な眼差しに変わった。

「おい！ダイ！」

「わかってるよ」

「あっちから聞こえたよな?!」

ポップが先に走り出したが、予想通りその足もとはフラフラとおぼつかない。

「ポップ！待ってよ！」

ダイが産まれたての子鹿のような足捌きでそれを追う。

稲妻のように勇ましくジグザグに進んでいったふたりだったが、50メートルほど進んだところで脚がもつれ、ふたり揃って道端にある植え込みに突っ込んでしまった。

「くっそ～!!せっかく温泉に入ったのによー！」

逆さまに土の中に埋まっているポップが悔しそうに叫んだ。

「ポップ……無理しないでいっぺん休もうよ……」

10分後――

ふたりは街中にあるベンチに腰を下ろし、道行く人々の話に聞き耳を立て情報収集をしていた。

どうやら話を総合すると、件の泥棒は温泉街の建物に忍び込んでは女性ものの下着を盗み、おまけにのぞきまでしているらしい。

「絶対に許せねえな……女の敵、ってやつか？」

つやつや天然水（5G）を飲みながらポップが厳しい口調で呟いた。

「なんでそこまでして下着が欲しいんだろう……」
「……さあな」
　ふたりがもの思いに耽っていると、マァムとメルルが通りがかった。
「あら？あんた達何してるの？」
　マァムが声を掛けるとポップは飲み終わった天然水のカップを潰しながら悔しそうに言った。
「ああ、おれたちで例の泥棒を捕まえようと思ってたんだけどよ……見失っちまったんだ」
「ああ、噂の……！サイテーよね」
「何も盗られなかったとしても、もし覗かれてたらと思うと、リラックスできないですよね……」
　メルルも不安そうに肩をすくめた。
「本当よ！見つけたら絶対にとっちめてやる！」
「まあでも、わざわざマァムを狙うやつはいねえんじゃないかな……」
「それ、どう言う意味よ！」
　見かねたダイがふたりの間に入って言った。
「ねえマァム、おれたちで犯人を探してみるからさ。ふたりは安心して温泉に入ってよ」
「ダイがそう言うなら安心ね」
「おい！なんでダイの言うことは素直に聞くんだよ」
「だって……あんた信用できないもん」
　ポップが口を尖らせると、マァムが訝しげな目をして答えた。
「――あっ！そういうこと言うのかよ！」
「ハイハイ。じゃあ、ふたりとも期待してるわよ！」
　そう言って通りの人ごみに消えていったふたりを見送ったダイがこちらを振り向くと、ポップが何やら考え込んでいる。
　しばらくした後、彼は真剣な顔で言った。
「ダイ……俺、すげえ事を思い付いちまった」
「どうしたの……？」
　神妙な顔でダイが聞き返すと、ポップの表情に翳りが帯びた――

やおら彼は伏目がちに話し始めた。
「犯人は、女をターゲットにしている――って事はだ――」
「って事は……？」
ダイがゴクリと唾を飲み、言葉を促すと、ポップはニヤリとして言った。
「美女の後をついていけば――自然に犯人に辿り着けるんじゃねえか……？」
「――――!!」
ダイは衝撃を受けた、という顔をしている――
しかし、すぐ冷静に聞き返した。
「ポップ……確かにそうかもしれないけど――なんかそれって……」
「うん？」
「根本的に何か間違ってる気がするんだ――」
弱々しい調子で発したダイの言葉を聞いたポップは深々とため息をついた。
「でもよ……ダイ……マァムやメルルを助けるにはこれしかねえんだ」
がっくりと肩を落とすポップを見てダイが言った。
「……わかったよ……でもおれは少し離れて歩くからね……」
ダイの同意を得ると、ポップはさっそく意気揚々と女性を物色し始めた。
ダイは１０メートルほど離れてポップの背中を追いかけている。
しばらくすると、ひときわ目立つ浴衣姿の３人組の女性グループが向こうからやって来るのが目に入った。
（むっ、あの３人は……狙われるかもしれねえ……）
ポップは３人の視界から外れると、真剣な表情で、いや――鼻の下を多少伸ばしながら――Ｕターンし、この美女達の３メートルほど後ろを歩き始めた。
そのまましばらく美女達の後ろを追いかけていると、ポップの気配に気付いたのだろうか、端にいたショートカットの女の子が不意に後ろを振り向いた。

彼女は表情を変えずそのまま進行方向に向き直ると、真ん中の明るい髪の女の子に何か話しかけた。
そして真ん中の女の子は反対側を歩いている黒髪の女の子の肩を叩き、何かを合図した。
数秒後、彼女達は突然歩くスピードを早めると、前方に見える占いの館の中の人ごみに紛れてしまった。
「くそ……あの子達を守れなかったか……」
「ポップ……もうやめようよ……」
ダイは辟易した表情でポップを嗜めた。
その時――
「きゃーーーーー!!」
女性の叫び声が通りに響き渡った。
騒然とする周囲の人々。
「おい！今のはマァムの声だ！」
ポップが血相を変えて叫んだ。
しかしダイは一瞬考えると反対側の通りを指差して言った。
「でも、マァムとメルルが歩いて行ったのってあっち側の通りじゃなかったっけ？」
「そんなの関係ねえよ！あちこち歩き回ってるかもしれねえだろ？こうしちゃいられねえ！」
「――あっ！」
ダイの言葉を無視してポップは声が聞こえた方に走っていってしまった。
（おれ……やっぱり……マァムの事が……）
息を切らせながら路地裏を走り回るポップ。
しかし、犯人は見つからない。
（いちばん好きだ……！あいつの笑顔を守るためなら……悲しい顔を見なくて済むのなら）
袋小路にぶち当たってしまったポップは意を決したように両手の拳を握りしめた。
（なんだってするさ……!!）

そして、マァムへの想いと共に彼女の姿を心の奥に結んだ。
「リリルーラ!!!」
大きく呪文の名を叫んだポップの姿が光に包まれた。
一方、とある温泉――
「キャー!ちょっとやめてよ!」
「すごい筋肉……」
「キャー!やめて!くすぐったい!」
「それなのに……こんなに胸もあるって羨ましいなあ……ちょっと分けてくれません?」
「メルル!なんかソフトタッチで触るのやめて!」
「えっ!マァムさん……すごくないですか?よく見せてください。隠さないで!」
「ちょっと!」
メルルが顔を上げると、目線の先に光の渦のようなものが浮いているのが見えた。
「――あれ……これはなんでしょうか――?」
その直後――
光の中からポップが現れた。
「えっ……?あれ……?」
ポップは不思議そうな顔で辺りを見回している。
「キャーーー!!」
女湯に突然現れたポップのせいで浴室のあちこちから悲鳴が上がっている。
「おい……お前……大丈夫だったのか……?」
「――大丈夫か心配なのは……あんたの頭よ……!!」
マァムがタオルで前を隠しながらわなわなと震えている。
「さっき、お前の悲鳴が聞こえたと思って――それで――」
マァムはポップを睨んで言った。
「あんたはバカでスケベだけど――人の道を踏み外す事だけはしないと思ってたのに……!!」
マァムの顔が哀しみに沈んでいくのを見て、ポップは慌てて首を

振った。
「ち……違う！それは誤解だって!!おれは……！」
「問答無用!!……武神流奥義……!!」
構えをとるマァムの身体から物々しいオーラが立ち上っている。
「猛虎――――破砕拳!!!」
マァムの拳が身体にめり込むと、一瞬ポップの顔が歪み、それに続けて体の軸が大きく捻れた。
「ぎょえええええええええええーーー!!!」
ポップは絶叫すると、くの字になったまま回転し、温泉の窓からミサイルのように外に吹き飛んでいった。
薄れゆく意識の中ポップは
（閃華裂光拳、じゃなくてまだ良かった――）
と思った――
――らしい。
一瞬で遠ざかり小さくなっていくポップの姿を見て、メルルは顔を真っ青にしてマァムに聞いた。
「あの……ポップさん、大丈夫なんですか……」
マァムは髪をかきあげるとメルルの目を見て言った。
「大丈夫……今のは〝みねうち〟よ――」
（――みねうち――!?）
メルルは大きな目を潤ませながら戸惑いの表情を浮かべている。

そして翌日――
ランカークスの自宅に戻ったポップは鬱々とした気分でベッドに寝転んでいた。
さっきまでダイが部屋に居たのだが、ロン・ベルクの家にお土産を持って行くとかで今しがた出掛けて行ったところである。
結局、温泉街を荒らしていた男はあの後、待ち伏せしていた警官に取り押さえられ、あえなくお縄となったらしい。
ポップはがらんとした部屋の中、昨日の出来事を思い出しながら何度も溜め息をついた。
マァムと自分の関係は一体何なのだろうか――
自分がスケベな事は認めるが、それを差し引いたとしても、何年経っても一向に距離が縮まらない。
自分のマァムへの想いはいつも空回りし、結局は毎回ケンカになってしまう。
メルルの前で勇気を振り絞ったあの時から――
バーンパレスのあの日から――
どこか心が宙ぶらりんなまま、時間だけが過ぎてしまった。
「――やっぱり、おれとマァムじゃ釣り合わねえ、ってことなのかな」
そう呟くと、ポップはごろりと壁に向かって寝返りを打った。
その時、不意に階下からスティーヌの声が聞こえてきた。
「ポップ！お客さんよー！」
なぜか母親の声が妙に明るい。
いつもと微妙に違うテンションなのが気になる。
「――ああ、入ってもらってよ」
ゆっくり階段を登る足音が近づいてきた。
ポップは妙だな、と思った。
今日はダイの他に誰かと会う約束をした覚えはない。
ダイ以外に誰かと会いたいという気分でもなかった。
ポップが面倒くさそうに身体を起こそうとした時、背後でドアが開

く音がした。
ポップが顔を向けると――
そこにいたのはマァムだった。
「えっ？お前……どうしたんだよ？」
ポップは声が裏返りそうになりながら慌ててベッドの端に座った。
部屋に入ってドアを閉めたマァムはポップを見つけると、黙って隣に座ってきた。
彼女はやや緊張した面持ちで下を向いている。
（――うわぁ……きっと……もう二度と私に近づかないで！とか言われるんだろうな――それとも……）
「昨日はごめんなさい」
心臓バクバクのポップに対し、マァムは予想外の言葉を呟いた。
「ダイから聞いたわ。私の悲鳴が聞こえたと思って慌てて駆け出したって――」
「ああ――結局、人違いだったけどな。信じてもらえないかも知れないけど、おれ――お前が無事だって分かって本当に――ホッとしたんだぜ」
「――でも本当にバカよね。何でリリルーラで行こうと思ったの？」
よく見るとマァムは少し笑いそうになるのを我慢して真剣な表情を作り続けている。
「わかんねえけど……何でだろうな」
ポップが頭を掻いた。
「ポップ――」
「ん？」
ついに来た――と思い、ポップは身体の芯と背中がチリチリと焦げるような感覚に襲われた。
必死に平静を装って返事をすると、マァムは真剣な表情で話し始めた。
「あんたがバカでスケベなのは知ってる。でも――教えてほしいの」
ポップが黙って頷いた。
「――私のこと、好きって言ってくれた気持ちは今でも信じていいの

？」
　不意を突かれたポップは慌てて答えた。
「と……！当然だろ」
「――本当に今でも変わらない――？」
「――変わらねえよ。……たまに自信がなくなる時もあるけど……」
「えっ？」
　不意にマァムに聞き返され、しどろもどろになりながら答えた。
「いや……だから……おれみたいなヤツは嫌われてもしょうがないのかな、って思うこともある――」
　しばしふたりの間に気まずい沈黙が流れる――
　頭の中がぐるぐると回り、口の中が乾いていくのがわかった。
　ポップはそれを振り払うように目に力を込めると、意を決したようにきっぱりと言った。
「でも――やっぱりお前のことが好きなんだ。何に誓ってもいい。これからも、ずっとそれだけは変わらねえよ」
「――じゃあ、約束して」
「……何だよ――」
「私のことが好きなら……私の前で他の女の子を追ったり見つめたりしないで――」
　ポップはうっ……という顔をして口を噤んだ。
「私……あれから何も考えてなかったわけじゃないの。本当はずっと、どうすればいいのか、すっごく悩んでたのに――でもポップがそんな感じだと、なんか自分ばっかり悩んでバカみたいだな、って思っちゃって」
「……わりい……気付かなかった」
　ふたりの間に再び沈黙が訪れた。
　その永遠のように長い沈黙は、ポップにはまるで、ふたりをこっち側と向こう側に隔てている大河のように感じられた。
　ポップはその沈黙を打ち破るようにマァムの肩を抱くと、顔をぐっと近づけた。
　相変わらずマァムは下を向いていたが――

息がかかるくらいの距離にポップが近づいているのがマァムにもわかった。
肩を抱くポップの手が震えている。
マァムの耳の近くにポップの息がかかった瞬間、マァムは反射的にポップの頬を平手打ちした。
「……!!」
マァムの目に飛び込んでくる、びっくりしている様子のポップの顔。
彼女は自分が何をしたのかもよくわかっていない、という感じで呆然としていた。
「――ごめん……」
ポップが小さく呟いた。
彼の表情は少し怯えているように見えた。
マァムは我に返ったように目を瞬かせると、しっかりした声で言った。
「ポップ、ちょっと目瞑って」
「えっ……こうか――？」
ポップは全てが終わった、という気持ちで目を閉じた。
もうどうなろうと構わない――
どうせもう終わりなのだ。
不思議とポップの心の中は落ち着いていた。
ポップに目を瞑らせたは良いが、マァムはしばらくそわそわと落ち着かない様子だった。
実はここに来る前、マァムはカール王国でのパーティの時に、ポップとの関係についてレオナに相談していた――
マァムはこのままではいけないとは思っているが、恋愛の経験がないのでどうすればいいか分からない、と改めてレオナに伝えた。
レオナの答えを総合すると――
「あんたがポップに何もさせないのが悪い」
ということらしい。
ポップの想いを受け入れるか、受け入れられないかを決めるのは自

分自身なのだから、マァム自身がそういう場面から逃げていては何も進まなくて当然だ、と。
マァムにとってそれはある程度の納得感があった。
しかし――とてもではないが
「そういう場面」
を自発的に作る事はとても自分には出来ない、と思った。
自分の気持ちを素直に伝えればいい、とレオナは言うのだが、どう伝えて良いのか、何を伝えるべきなのかすら、マァムにはわかりかねる状態なのだ。
それならば、彼の部屋を訪ねてしまえばいい――
それなら相手は自分の気持ちを話しやすいだろうし、その流れでマァムは好きなようにすればいい――
とレオナに言われ、これ以上は自分が決めなくてはいけない事なのだ――とマァムは悟ったのだった。
そして今。
ポップの部屋にいるマァムは背後のドアの様子をちらりと伺うと、意を決してベッドに座っているポップにゆっくり近づいた。
そして――――
ずっと目を瞑らされ少しじりじりし始めていたポップは、不意に柔らかく、温かいものが頬に触れるのを感じた。
（えっ……？）
思わず目を開けてしまったポップがマァムを見た。
彼女は顔を赤くしてそっぽを向いている。
「えっ……今」
ポップがそう言いかけると、マァムがそれを遮るように言った。
「私……もう帰る。またね」
パタンとドアを閉めると、階段をトントンと降りる音が聞こえた。
ベッドに座って頭を垂れるとポップは今起きた事を思い返した。
（えっ……おれ今マァムにキスされたのか……？ビンタされたのに……？よく分かんねえ――）
しかし、あれは確かに唇の感覚だった……

マァムの吐息も少し感じた気がする。
そう思うと、ポップは心の底から叫び出したいような気持ちになった。
部屋の窓を開けて外を見るが、もうマァムの姿は見えない。
（おれ……生きてて良かった……かも――）
言葉にならない嬉しさがポップの全身を駆け巡っていた。
その時、再び階下から足音が近づいてくるのが聞こえてきた。
ドアが開くと、ダイが嬉しそうに話し始めた。
「ポップ！ロンとノヴァ、お土産喜んでくれてたよ！でも、こっちの地酒の方は僕が預かります――とかノヴァが言うもんだからロンが怒っちゃってさぁ――」
ダイは窓から外を眺めながらポーッとしているポップの様子に気付くと、不思議そうに言った。
「ポップ、何かいいことあったの？」
「なんか――顔がつやつやしてない？」

数時間後――ベンガーナ。
大通りに面したカフェのテラスでマァムとレオナがお茶をしている。
「えっ！それじゃ――ポップにビンタした後、目を瞑らせたままキスだけして帰ってきたの!?」
通りを歩く中年男性がチラッとこちらを見た。
（――ちょっと声が大きいわよ！）
マァムがしーっ、と口の前で人差し指を立てる。
「まぁ……マァムにしては上出来か……」
少し声を落とすと、レオナは華奢な手を形の良い顎に添えて呟いた。
「私には……それが限界だった……」
マァムががっくりと頭を垂れる。
「でも……ポップに見えないんじゃ、本当にキスしなくても一緒じゃない？　唇である必要すらないかもしれないわよ？」

「あっ……！」
「マァム真面目よね――ポップだったら目を瞑ってたら足の指とかでも気がつかないかもしれないわよ？キスとかしたことなさそうだし……」
「さすがにそれは気付くんじゃない？」
マァムは足の指でキスをされてうっとりしているポップの姿を想像して吹き出した。
「――でもポップ、多分今ごろ夢見心地よ」
「そうかな」
「間違いないでしょ」
「――次は目を開けないとね」
レオナが目を細めて冷やかすように言うと、マァムは少し恥ずかしそうに頷いた。
――つやつや温泉が縁結びの温泉とも言われている事を４人はまだ知らない――

怪物小僧

「案外大きい島なんですね――」
ノヴァは砂浜に立ち島全体を見廻して言った。
「うん。でもまぁ――歩こうと思えば1日でまわれちゃうんだけどね」
ダイが懐かしそうに辺りを見回しながら歩き始めると、ノヴァはその背中を慌てて追いかけた。
その時、不意にノヴァの背後から影のようなものが飛び出してきた。
「うわっ!」
ふたりは慌てて身を伏せる。
(こんな所に……!)
ノヴァは纏わりつくように飛んでくるドラキーを睨むと剣の柄に手をかけた。
すると、それを制するようにダイは言った。
「――ノヴァ、大丈夫だよ」
ノヴァは笑顔のダイに対して怪訝な表情を向けた。
「いや……いくらダイさんでも危ないですよ!」
「おまえ……迎えにきてくれたんだよな?」
ダイはノヴァを無視してドラキーに話しかけると、鳥でも止まらせるかのように腕をまっすぐ伸ばした。
ドラキーはダイの腕に飛び乗ると、嬉しそうにダイの顔に体を擦り付けた。
するともう一体のドラキーがやってきて、今度はダイの肩に止まった。
何が起きているのかよくわからないノヴァは目を丸くしたままその様子を見ている。
ドラキーがキーッという声を出して合図をすると、
何かの動物の群れだろうか――
遠くから足音がドドドドっと押し寄せてくるのが聞こえてきた。

（……今度はなんなんだ――？）
足音はどんどん近づいてくる。
まるで地鳴りのようだ。
目を凝らすと空を飛ぶ生き物も見える。
どうやらキメラやガルーダといったモンスターのようだ。
ノヴァが戸惑っている間にいよいよ地鳴りのような足音は目前に近づいてきた。
砂煙と共に見えてきたモンスターの大群。
ぱっと見て分かるだけでも――
キャタピラー、マッドオックス、オーク、おおなめくじ、キラーパンサー、ゴーレム、じんめんちょう、ももんじゃ、ベビーサタン、ギガンテス、どろにんぎょう、コング、いたずらもぐら、パピラス、マドハンド、ダースリカント、おおありくい、ごうけつぐま、あばれこまいぬ、ギズモにサーベルウルフ……などなど――
数え切れないほどのモンスターたちがこちらを目指して血走った目で走って来る。
ノヴァはその迫力に気圧され、思わず海岸ギリギリまで後ずさった。
何かぶつかった、と思い後ろを振り返ると、そこにいたのは、スライムつむりにマーマン、だいおういかにヘルコンドル、マリンスライムにしびれくらげ……
ノヴァは思わず声が出そうになる。
そしてモンスターの大群はダイのギリギリまで近づくとぴたっと止まった。
それを見てダイはうれしそうに大声で叫んだ。
「みんな！ただいま！おれ、帰ってきたよ!!」
それに呼応するようにモンスター達は歓喜の雄叫びで返事をした。
知能が高いモンスターの中には涙を流しているものまでいる――
ノヴァが目を白黒させながら固まっていると、
ダイはこちらを向きにっこりと歯を出して笑った。
「ノヴァ。デルムリン島にようこそ――」

「は、はぁ――」
ノヴァは呆気に取られたように言うと、その場に尻餅をついてしまった。
それを見てベビーサタンが舌を出しながら笑った――

ただいま

ノヴァはダイに連れられ島の奥に向かって歩いていた。
ダイを先頭にその後ろを大名行列のように皆でぞろぞろとついて行く形である。
モンスター達に混じって行列の前方を歩いていたノヴァは、悪戯そうな若いマッドオックスに後ろから鼻先で軽く突かれると、ビクッと身体を硬くした。
（――しかし――ダイさんはこれだけのモンスターをどうやって飼い慣らしたと言うんだろう……）
ノヴァが顰めっ面をして歩いているのを見て、ダイは後ろ歩きをしながらあっけらかんと言った。
「ねえ！ノヴァ、びっくした？」
「――そりゃあ、もう――」
ノヴァは汗を拭いながら目を丸くして答えた。
「でも、前に教えただろ？おれの故郷はモンスターだらけだって」
「でも、ここまでとは…」
ダイはニコニコしながらノヴァの言葉の続きを待っている。
「普通――ほら、檻に入っているとか――牧場みたいに柵に入ってるとか、こう――あるでしょう？」
「友だちをなんで檻に入れるのさ？」
ダイが不思議そうに尋ねると、ノヴァは答えられずに黙ってしまった。
（確かに――）
ノヴァは妙に納得してしまい、何度も小さく頷いた。
その時、頭の後ろで手を組んだまま後ろ歩きをしていたダイが躓きそうになり、後ろにそっくり返った。
「危ない！」
ノヴァが慌てて駆け寄ろうとすると、横からピンク色の棒のようなものが伸びてきた。
隣にいたフロッガーが舌を伸ばして倒れそうになったダイの体を

受け止めた。
「ありがとう！頭を打っちゃうところだったよ」
他のモンスター達もその一連の行動を当たり前のように受け入れている様子である。
（――もう、考えるのはよそう――）
ノヴァは溜め息をついて少し肩を落とすと、何か吹っ切れたように黙ってダイの後ろを着いて行った。
島の中央に向かってしばらく歩くと、山を切り拓いた岩肌をくりぬいた洞穴が見えてきた。
近くには焚き火の跡もあり、洞窟の入り口には真新しい薪木が積み上げられている。
ノヴァが後ろを振り返ると、モンスター達が洞窟から少し離れた手前の茂みあたりで待機しているのが見えた。
息を殺して――と言うのだろうか。
その場に駐屯したまま、何かを見守るようにじっとこちらの様子を伺っている。
不思議に思いながらダイの背中を追っていると、洞穴の中から年老いた「きめんどうし」が現れた。
入り口にある薪を取りに来たようで、その老モンスターは腰を曲げて億劫そうに紐で括ってある一塊を持ち上げた。
続けて余ったもう片方の手でやっとのことで薪を持ち上げると、何かブツブツ言いながらそのまま洞穴の中に入って行こうとしている。
その時、不意に前にいたダイが大声を張り上げた。
「――じいちゃん!!」
呼び止められたその老モンスターは一瞬止まると、険しい顔をして振り向いた。
「――じいちゃん!!じいちゃん!!」
ダイがその顔を見てゆっくりと近づいて行った。
近づいてくるダイの姿を見て、彼は呆気に取られたような顔をしたかと思うと、持っていた薪を地面に落としてしまった。
紐が解け、ガラガラと薪が溢れ落ちる音がした。

「――ダイ……」
「じいちゃん!!!じいちゃん!!!おれ……」
ダイが全速力で走って行くと、彼は薪のことなど少しも気にとめずに、ゆっくりとダイに向かって歩を進めた。
「帰ってきたよ!!じいちゃん!!!じいちゃん!!!」
走るダイの目から涙が溢れて、地面にこぼれ落ちる。
「おお……まさかこんな事が――」
呟くと同時に、ダイはブラスに飛びつくように全力で抱きついた。
「じいちゃん!!」
「――おおいかん……わしは……まぼろしを見ているようじゃ……」
「まぼろしじゃないよ――おれ……本当に帰ってきたんだ――」
ダイは顔を涙と鼻水でぐしゃぐしゃにしながら言った。
「――本当に、ほんとうにダイなんだな?」
ブラスが大声で聞き返した。
「そうだよ!おれだよ!ダイだよ!!」
ダイの目から大粒の涙がいくつも溢れた。
「ああ――お前が帰ってきた、という話は聞いていたが実際にこの目で見るまでは信じられなんだ――」
「全く……お前はどこに行っておったんじゃ――」
ブラスの目にも涙が溜まっている。
「じいちゃん……おれ――大魔王を倒したんだよ――」
「おお。知っとるわい。まさかお前がそんな大した事を成し遂げるとはな……」
目の前の光景に思わずもらい泣きするノヴァ。
ふと後ろを振り返ると、離れたところにいるモンスター達も泣きじゃくっている。
一つ眼から涙を流しながら鼻をかんでいるギガンテス、ぱちくりした目から涙が止まらないスライム、抱き合って嬉し泣きするマタンゴたち――
「ノヴァもおいでよ」
ダイが手招きした。

「じいちゃん。ノヴァだよ。おれたちと一緒に戦ってくれた仲間なんだ。北の勇者って呼ばれてて――」
「いや、そ……それはやめてください。ボクは……」
すると、ダイは力を込めて言った。
「なんでそんな事言うんだよ。もしノヴァがいなかったら、きっとおれ――ここにこうして居られなかったはずだよ」
「――ダイさん……」
ノヴァの胸がじん、と熱くなった。
「ノヴァも家に入ってよ――まあ狭くてむさ苦しい所だけど」
「狭くてむさ苦しいは余計じゃ！」
ブラスが口を尖らせると、ノヴァはこの島についてから初めて大声で笑った。

こころ

夜も更けて、デルムリン島が星空に包まれた頃――

ダイ達は皆で粗末なテーブルを囲み、ダイが語る冒険譚に聞き入っていた。

「――それでね、おれたちもう駄目かと思ったんだけど、なんと！突然どこからか死んじゃったはずのアバン先生が現れたんだ。それで、すごい呪文であっという間に火を消しちゃったんだよ――」

熱弁を振るうダイの話をブラスは真剣に聞いている。

うんうんと激しく頷きながら、時には感心したように、時には唖然とした様子であんぐり口を開けて――

身振り手振りを入れて熱っぽく語るダイの様子をノヴァはニコニコしながら見ていた。

中にはもちろんノヴァの知らない話もある訳で、思わず身を乗り出してしまう。

そうしているうちに、ふとノヴァの頭の中である疑問が浮かんだ。

ただ、それを今この場で聞くことは躊躇われるような気がした。

しかし「それ」は非常に重要な事のように思われる。

ノヴァは次のチャンスを待つ事にした。

同じ部屋でダイとノヴァは寝ることになり、ランプの温かい光の中、２人はそれぞれブラスが用意してくれた自分の寝床に潜った。

話し疲れたダイが今にも寝息を立ててしまいそうなのを見て、ノヴァは立ち上がるとふっとランプに息を吹きかけた。

部屋が優しい闇に包まれ、丸くくり抜いてある小さい窓から月明かりが一筋、部屋の壁を照らしている。

それを見ながら、おもむろにノヴァは壁の方を向いているダイに話しかけた。

「ダイさん、ボク――ここに来て良かったなって思います」

ダイは背中を向けたまま答えた。

「そう？気に入ってくれた？」

「なんか今日１日、びっくりする事ばっかりだったですけど、すごく大

事な事を教わった気がして――」
「……ノヴァは大袈裟だなあ」
「あと……」
「ん？」
「――実はさっきダイさんが話してるのを聞いてて思ったことがあるんですけど――」
「えっ？おれなんか変なこと言ったかな」
「あの――すごく意地の悪い質問かもしれません……答えたくなければ答えなくても構わないんですが……」
「なんだよ、遠慮しちゃって」
「――ダイさんはここで子供の頃から色々なモンスターを友だちだと思って暮らしてきた訳ですよね」
「そうだよ」
「――そんなダイさんは魔王軍のモンスターと戦っていた時、どんな気持ちだったんだろう、って思ってしまって」
ダイの返事はなかった。
ノヴァはダイにそれを訊いてしまったことを後悔した。
そして頭の中になぜか、ロン・ベルクの険しい顔が浮かんだ。
あり得ないことだが――
もし彼のいる前でダイにこの質問をしたら、
「お前には人間としての心がないのか！」
などと一喝しているだろうな、などと思った。
しかし、しばらくして
「う～～～ん」
という唸り声が聞こえてきた。
そして、やおらダイは言葉を選ぶように話し始めた。
「おれは、すごくちっちゃい頃から勇者に憧れてたんだ。――だから、勇者っていうのはモンスターと戦うもんだってのは分かってたつもりだったんだよ。でも、そういうモンスターって、おれにとっては何故かデルムリン島のみんなとは結びつかなかったんだ。――変な話だけど」

「でも、ハドラーが復活した時、その影響でデルムリン島のみんなが暴れ出した事があって――おれがアバン先生と会ったばかりの頃にね。あのじいちゃんでさえおれを襲おうとしたんだぜ」
「えっ――ブラスさんが!?」
「うん。でもアバン先生やポップの呪文のおかげでじいちゃんやデルムリン島のみんなはもとの優しいモンスターに戻れたんだ。だから――モンスターを倒す事について心が痛まないかっていえばそんな事はないけど――結局、おれにとっては魔王軍のモンスターはあくまでデルムリン島のみんなとは別物、って感じなのかな。あんまりうまく言えないんだけどさ――」
「なるほど」
　ノヴァが納得すると、ダイはそのまま話を続けた。
「――おれ、島にパプニカ王国の人達が来て、レオナに会うまでは人間の友達なんか誰もいなかったんだ」
「冒険をする中で人間の友達がいっぱいできて、おれ――本当にすっごく嬉しかったんだ。――でも、いざ自分が普通の人間とは違うんだって分かった時は急に悲しくなっちゃってさ。変だろ？あれだけデルムリン島でモンスターと一緒に暮らしてた時は自分だけ違ってても気にならなかったのに」
「いや――そんなこと……」
　ノヴァは少し困惑した様子で答えた。
「だから、バーンと戦って竜魔人になった時、本当に悲しくて――いよいよみんなとお別れしなくちゃいけないって思っちゃって」
　少しだけダイの声が震えている。
「でも、おれ――この島を出て、みんなと仲良くなれた事、少しも後悔してないよ。ポップが言ったように、おれはおれなんだ、って今では思えるから」
　ノヴァには何と答えていいのかわからなかった。
　自分が何気なく訊いた事がこんなにダイの気持ちを掻き乱す事になるとは予想もしていなかったから――
「――ダイさんの事が好きなら、ダイさんが人間だろうと人間じゃな

かろうと気にしないですよ。デルムリン島のみんながダイさんを受け入れたのと同じじゃないですか」
思わず口をついて出てしまった言葉だったが、この言い方が良いのかどうかノヴァは不安になった。
「確かにそうだね！ノヴァもじいちゃんと普通に喋ってたもんね――！」
「――えっと……そういうことでは――」
ダイが明るく言うのでノヴァはいよいよ焦ってしまい、しどろもどろになってしまった。
「――とにかく、ボクはダイさんに出会えて良かったって思ってます」
「――ありがとう。ノヴァ」
窓の外が少し明るくなり始めている。
遠くで鳥の鳴く声がした――

隊員たちの砦

夜が明けて――

ダイとノヴァが居間で朝食を食べていると、玄関の方で人の気配がした。

誰かが訪ねてきたようだ。

「おーーい！珍しい客が来てるって聞いたぞーーー！」

野太い声が家中に響き渡った。

ブラスが作っておいた粥を頬張っていたダイは慌てて立ち上がると、バタバタと足音を響かせて声のする方に走っていった。

ブラスは昨晩夜更かしをしたせいか、食事を用意するとまた寝てしまったようだ。

壁の向こうから小さないびきが聞こえてくる。

ダイが玄関に着くと、入り口から伸びている影のシルエットが目に飛び込んできた。

ひとつはひょろ長く、もうひとつはずんぐりと小さい――

「ヒム……それからチウ！」

ダイが叫ぶと、ふたりは陰からひょっこりと顔を出した。

「ダイ！久しぶりじゃねえか！お前どこ行ってたんだよ!?」

ヒムは少し恥ずかしそうに口の端を上げてニッと笑った。

チウも大きな目を潤ませながら感慨深そうに言った。

「ダイ君……本当に、本当に帰ってきたんだね――」

ダイが笑顔で応えると、チウはダイに抱きつき泣き出してしまった。

ダイは少し困ったように頭を掻いている。

「――元気か？ダイ」

ヒムが鼻の下を擦りながら言った。

「うん――元気だよ」

「本当に久しぶりだぜ――あ、ほら……俺、行くところもねえからさ……この島で世話になってるんだ。人間達と暮らすのも性に合わないしな」

「ヒムやチウがデルムリン島にいるって、なんかおれ嬉しいよ」
ダイが少し照れくさそうに言った。
「嬉しいこと言ってくれるじゃねえか」
ヒムが微笑むと、チウが突然目を輝かせて割り込んできた。
「そうだ！ダイ君。ぼくたちの砦に招待するよ！まだ見ていないだろ？」
「えっ？砦って……？」
不思議そうな顔をしているダイにヒムが説明する。
「俺たちで作ったんだ。みんなで木や石を運んでさ。みんなで過ごせる場所が欲しいと思ってな……うちの隊長が細けぇところまでこだわるから大変だったんだぜ」
「――リーダーは皆の為なら妥協しないのだ」
チウが胸を張った。
「えっ！すごいや！連れてってよ！」
「見たら驚くぜ――」
ヒムが得意そうに言うと、奥から目を擦りながらノヴァがやってきた。
「おっ！北の勇者様もお出ましだな」
「久しぶりだねえ」
「ヒムさん、チウさん。お久しぶりです！」
「お前も見るか？オレたちの砦をよ」
「はい。聞こえてました。ぜひ！」
「――ところでお前、ロン・ベルクのところで鍛冶屋やってるんだって？」
訝しげな表情でヒムがノヴァに訊いた。
「はい……腕前はまだまだですけど」
「じゃあ、ロンに言っておいてくれ――」
「はい？」
「もしオリハルコンが足りなくても――オレの腕とか脚はやらねえぞ、ってな」
ヒムがニヤリとして言うと、ノヴァは口を尖らせた

「――師匠はそんな事言いません!!」
「さぁどうだか……お前も本当はそういう目でオレを見てるんじゃねえか――？オレの脚で剣が何本作れるかな？とかな。おお怖え～!!」
ヒムが震える仕草をした。
「そんな事考える訳ないでしょう!!」
「悪い悪い、冗談だよ――」
ノヴァが真っ赤になって否定すると、ヒムはくっくっ、と笑った。
砦は歩いて１０分程の川沿いの場所にあった。
木々のカーテンに囲まれた切り通しの道を抜けると、川岸の道に出る。
そこから上流に少し進むと、立派なログハウスが見えてきた。
大屋根の片側だけ軒が伸びており、少しくらいの雨風なら余裕で凌ぐことが出来そうだ。
入り口の奥の方に向かってぐるっと板張りのテラスが広がっており、おおありくいとアルミラージが追いかけっこをしているのが見える。
「うわっ、すごいや。思ったよりちゃんとしてるね！」
ダイが目を丸くしている。
「そうだろう？皆で頑張って作った甲斐があったよ――でもぼくの類まれなセンスが最後はものを言ったわけなんだけどね――」
チウは得意そうに目を細める。
「さぁどうぞどうぞ！」
先を歩くチウが入り口で手招きをした。
ダイはテラスと一体になっている玄関ポーチへの階段を登ると、入り口の庇を支える柱の一部を見てあっと声をあげた。
「チウ、これって……」
「おっ、気づいたかい？」
それは丸くプレート状に整えられた木面に浮き彫りされた、笑顔のゴメちゃんを模ったレリーフだった。
いかにも手彫り、という雰囲気の素朴なデザインだが、その表面はピカピカに磨かれている。

よく見ると頭の上に「2」の数字も掘ってある。
ダイはレリーフをそっと撫でながら、過ぎ去りし時に思いを馳せた。
ダイの頭の中に様々な出来事が浮かんでは消えていく。
バーンパレスから見た夕焼け。
掌の中に降り注ぐ黄金色の煌めき。
初めて聞いた優しい声。
そして、初めて出会った時の森の木漏れ日――
鮮明に思い出せるものもあれば、忘れかけてしまっている記憶もある。
あれだけの事があったにも関わらず、不思議と思い出される風景は穏やかな瞬間ばかりだった。
そして否が応でも直面する、ゴメはもう此処にはいないのだ、という事実――
ダイは不意に胸がきゅっと苦しくなった。
物想いに耽っている様子のダイを見て、チウは遠い目をして言った。
「ゴメちゃんが帰ってきた時に目印になるようにね。彼はずっとぼく達の仲間だからさ」
「うん――」
「こうして――ゴメちゃんを忘れずにいてくれて、おれ嬉しいよ」
「ふふっ。忘れるわけないだろう!?自慢の隊員だよ?」
ダイが少ししんみりした調子で言うと、チウが人懐っこい笑顔で答えた。
ログハウスはドアを開けるとすぐメインホールで、天井までの吹き抜けになっている。
そのホールをぐるりと取り囲むように各部屋が配置されているものらしい。
壁に島の地図のようなものが貼ってある。
その中央に大きな樫でできた一枚板のテーブルがあり、隅の席にヒムが座っていた。

こちらを見つけると彼は片手を上げて言った。
「よう！良いとこだろ？」
「ほんとに……これみんなヒムさん達が作ったんですか？」
ノヴァが天井を見上げながら言った。
「まぁな――こいつらもなかなかいい働きをしてくれたんだぜ」
ヒムがそう言うと、屋根裏や柱の向こうから隠れていたモンスター達が顔を出した。
ノヴァはもう慣れたもので、少しも怯む事なくモンスター達に笑顔を返している。
「そういえばクロコダインは？確か一緒だったよね」
ダイがキョロキョロしながら言うと、ヒムがやれやれ、という顔をした。
「あいつはパプニカにいるんだ」
「えっ？なんで？」
「兵士の指導をしてくれ――とか言われて、あいつたまに城に呼ばれるんだよ。半分はバダックや他の兵士達と酒盛りするのが楽しみで行ってるみたいだけどな」
「へえ仲良いんだね！」
「人間は良いもんだぞ、とか言ってよ……全く、元・魔王軍とは思えねえよな」
「でもなんかクロコダインさんらしいですね」
ノヴァの言葉に皆黙って頷いた。
「それでは――ぼくが各部屋を案内しよう！皆ついてきたまえ！」
隊長のあとをゾロゾロとついていくダイと目が合いヒムが笑っていると、チウの声が聞こえてきた。
「ヒムちゃん！君も行くぞ！」
「ハイハイ、隊長さん」
めんどくさそうに立ち上がるヒムの口の端がニッと上がっている――

動き出す歯車

カール王国――

その大会議室で、ギルドメイン大陸の各国代表が一堂に会しての定例会議が開かれていた。

参加国はカール、テラン、ベンガーナ、リンガイアである。

ダイの帰還後初の開催であり、各国ともに勇者帰還のお祭りムードを引きずっているのか、会議は全体的に楽観的なムードで進行していた。

そのため、ほとんどは討論というよりは勇者帰還に絡めた各国の商業施策における経済効果の報告などが多く、景気がいい話が続いていた。

しかし、ひとつだけ気になる報告があった。

カール王国東部：　破邪の洞窟付近

リンガイア王国南東：　ギュータ地方

ベンガーナ王国南端：　アルゴ岬

これらの地域で断続的な地震が観測されている事である。

ロモス王国南の海域のデルムリン島付近で、比較的大きな地震が観測されたというニュースが入ってきている事もあり、この報告は僅かであるが各国にとって緊張が走る内容となった。

しかし、デルムリン島に活火山がある事はよく知られた事実であり、地震についてもそれ自体は特に珍しい事ではない。

その為、今後は監視を強化すると共に、何か異変が起きた場合は積極的に情報共有していこう、という方針でまとまった。

会議も終わりかけていたその時――

ひとりの兵士が血相を変えてやって来た。

「アバン王――！」

「どうしましたか？」

兵士はアバンに近づくと耳打ちした。

「王国郊外で行き倒れになっていた女性が見つかりまして――現在、王国で保護しているのですが、その者が言う事がどうも――」

「ふむふむ……」
「自分は魔界から来た――などと言っている様でして――」
「何と……!?」
アバンの顔色が変わった。
「また、何故かは分かりませんが――畏れ多くもダイ様の名をうわ言のように呟いておりました――」
この情報は瞬く間に事情を知る関係者に伝わった。そしてダイ、ポップ、クロコダイン、レオナが王宮に集められた。
レオナは本来は召集予定のメンバーという訳では無かったが、本人の強い希望により来たとの事だ。
アバンから彼女が発見された経緯や、現在の状況などを簡単に説明された後、ダイたちは王宮のはずれにある――本来は伝染病患者などを隔離する為に作られた――医療施設に向かった。
傷の手当てを受けた後、そちらに移されたということらしい。
「入りますよ」
アバンはドアをノックすると、静かに病室のドアを開けた。ベッドに寝かされていた少女は――少し髪が乱れて顔が隠れてはいるが、紛れもなくヴェルザーの娘のベラであった。
顔や腕に巻いた包帯が痛々しく見える。
「ベラ――!」
ダイが声をかける。
しかし、薬が効いているのか彼女は寝息を立てたまま呼びかけには応じない。
ポップとクロコダインの2人はあからさまに顔を顰めている――
レオナはこの眠っている少女の顔をまじまじと見つめた。
(――この人がダイ君と5年間……)
レオナはベッドに寝ているこの年端もいかない少女の長いまつ毛を見て、何故か自分が小さい頃に王宮を抜け出してよく遊んでいた、ある少女のことを思い出していた。
その頃、同年代の子供や大人でさえも皆、王女である自分に対しては一線を引いたようにうやうやしく接していた。

しかし、相手が王女だろうと構わず、ずけずけとはっきりものを言うその少女は自分にとって、とても新鮮で――

「レオナ！そんなんじゃ男の子にもてないわよ！もっと自分は女の子なんだ、って事をアピールしなきゃ！」

わんぱくだった自分にはその子の言っていることはよく分からなかったのだが、なんだか面白くて、わざと目の前で変な事を言ったりやったりして見せていたような気がする。

あの頃から自分はどのくらい変わったのだろう。

レオナは心配そうに少女を見つめるダイの横顔を見て、なぜか少しだけ心がざわついた。

不滅の魂

ベラに面会してから2時間――
相変わらず彼女は眠り続けている。
「――ところで皆さん、お腹空きませんか？」
アバンは朝から何も食べていない４人を気遣って言った。
「そういえば……腹減ったなぁ」
部屋の隅の椅子に座っていたポップは壁に頭をもたれながら呟いた。
「王宮の食堂に行けばサンドイッチか何か出してくれると思いますから、ちょっと一息つきませんか？彼女が目覚めない事には焦っても仕方ないですし――」
「うむ。賛成だな――」
クロコダインは椅子から立ち上がり、肩をぐるっと回すと深呼吸をした。
「レオナ姫も呼びましょうか。起きていますかね？」
アバンは廊下の長椅子にブランケットを掛け横になっているレオナをちらっと見た。
そのとき――
「あっ！ベラが！」
ダイの声が病室に響いた。
皆がぱっとベッドの方を向くと、ダイの顔の先に薄目を開けて目を瞬かせる彼女の姿があった。
「……ダイ様――」
彼女は少し掠れた声で呟いた。
どこかうつろな表情でダイを見つめている――
「ねえベラ――一体……何があったの？」
ダイが訊くと、ベラは苦しそうな表情をして押し黙ってしまった。
「ベラさん――でしたね。少しずつで良いので何が起きているのかを説明していただけますか？私達はあなたをどうこうしようというつもりはありません――」

アバンが割って入ると、ベラはおもむろに話し始めた。
「――魔界には大魔王バーン、私の父である冥竜王ヴェルザー、そしてビシュヌという者が率いるもうひとつの勢力があります――父が一時的に力を失っているこの時を好機とばかりに、彼らは魔界の実権を強引な形で奪おうと軍隊を送り込んだのです」
ポップは落ち着かない様子で足をしきりにパタパタと動かしている――
「父の配下の竜達は、ほとんどが殺されてしまいました――」
ポップが話を遮った。
「――ちょっと待て」
「今『一時的に』って言ったか？ヴェルザーは確かおれがメドローアで粉々にしたはずだぜ――」
「――冥竜王は不滅の魂を持っています――そのため、完全に肉体や魂が消滅するということはありません。父はすぐに復活ができないだけで、まだ生きているのです」
ポップは驚愕すると、吐き捨てるように呟いた。
「あいつ、まだ生きてるって言うのかよ……しぶといにも程があるぜ――」
ベラは続ける。
「彼らは今、敵のいなくなった魔界を支配しました……そして今――この地上をも支配しようとしています――」
ダイ達に緊張が走った。
「だから助けてくれ――なんて言うんじゃないだろうな――」
ポップと反対側の壁際に座っていたクロコダインが厳しい口調で言った。
「そいつらが地上に侵攻してくるなら、オレは命をかけて阻止するまでだ――しかし、お前やヴェルザーがどうなろうと知った事ではない――」
彼はベラの顔を見ずに続けた。
「そもそもお前らはその勢力と戦おうとしていたのだから、自業自得というやつだろう？その為にお前ら親子はダイを攫って5年間も

……ダイが戦うも戦わないも、もうダイ本人の自由なんだ。お前らから何か指図される謂れなどこれっぽっちもない――！」
「――勿論、私達がした事は当然許されることでは無いと思っています――そして、あなた方に助けを乞う事が不相応であると言うことも理解しています……」
ベラがそう言うと、ポップも皮肉っぽい口調で反論した。
「じゃあ……お前は傷が治ったら魔界に帰って、そのなんとかって奴に見つからないようにひっそりと暮らせよ。それが道理ってもんだろーが」
「――はい……」
「ねえ、ポップ？」
話をじっと聞いていたダイが話を遮った。
「お？」
「クロコダインやポップが言ってる事はさ――おれももっともだと思うけど……」
「うん？」
クロコダインも片目の瞼を少しあげてダイの方を見た。
「こういう大変なことが起きた時って、出来るだけ協力し合った方がいいんじゃないかな、って思うんだ」
「おい……ダイ!?お前……」
「むっ……」
ポップとクロコダインはダイの思わぬ発言に狼狽した。
ポップはダイの胸ぐらを掴んで捲し立てた。
「お前……お人好しすぎんだろ!?ヴェルザーに何をされたか覚えてないのかよ!?この女もクロコダインやラーハルトに何をしたか――お前見てたんだろ？それなのに……せっかく……お前はまた同じことを……」
今にも泣き出しそうな顔をしているポップにダイは真剣な表情で言った。
「そりゃ――クロコダインやラーハルトを傷つけた事は許さないさ……」

ダイの手が震えている。
「それに、まだ相手がどんな奴かもわからない……でも……大魔王を倒した時みたいに、みんなの力と心を合わせないと――今回も多分勝てないと思う」
「それに、おれはもう前みたいに――みんなの太陽になるとか、犠牲になる為にひとりで戦おうとしてるわけじゃないよ――おれが自分のために、大事なものを守る為に、おれの力を使いたいんだ。これは、おれのわがままだと思ってくれていいんだけど……」
「うーん……ダイがそう言うんじゃなぁ……」
ポップが答えあぐねていると、いつの間にかダイの隣に移動していたレオナが訊いた。
「――ねえ、ダイ君は本当に――それで良いの？」
「……うん　――多分、ベラは嘘は言っていないと思う。おれが魔界にいた時、地震が起きるとヴェルザーがその度にそわそわしてたんだ。『またあいつか』って……」
ダイのその言葉を聞いた途端、窓際に立っているアバンの顔が険しくなった。
「もし、ベラが裏切ったりしたら……その時はおれが責任を持ってなんとかするよ――」
ダイは目に力を込めてはっきりと言った。
「……ダイ様……」
ベラは少し涙ぐんでいる。
「敵だの味方だの、そんな事言ってられねえ、ってわけか……」
ポップがため息をついた。
「ところで……」
突然立ち上がったレオナがベラとダイを交互に見て言った。
「その『ダイ様』って何？あんた達どういう関係なの？」
「――私は父上に万一の事があった場合、ダイ様に仕えるように申し付けられていました。ダイ様は夫になるお方だから、と――」
（あちゃー……どうなっても知らねえぞ――おれ……）
ポップはレオナと目が合わないように、こっそりと背を向けて窓の

方を向いた。

揺れる世界

「はっ――？」

ベラの放った想定外の回答に、レオナは呆気に取られた様子で訊き返した。

「――えっ、それどういう事――？」

病室に気まずい沈黙が流れる。

続いてレオナは、取り乱す事なく落ち着いた口調でダイを問いただした。

「ねえ、ダイ君？この子とそんな約束した？」

「えっ……いや……そういうわけじゃ……」

ダイは蚊の鳴くような声量で答えた。

レオナはまだ何か言いたそうに眉を顰めている。

ダイとレオナの視界からそそくさと逃げてきたクロコダインは巨大な手で口元を隠しポップに耳打ちをした。

（おい、ポップ。オレにはよく分からんが――こいつはいわゆる――『修羅場』というやつなのか……？）

ポップは真剣な表情で答えた。

（なんて言うか……おっさん……おれたちは――とにかくこの問題にはノータッチだ――）

アバンはたまに咳払いをしながら、所在なさげにあちこちに視線を彷徨わせている。

しばらくレオナの視線はベラとダイを交互に行き来していたが、ふっと一息つくと彼女はきっぱりとした口調で言った。

「ダイ君。この子の言う事なんか聞く必要ないわよ？」

「う……うん……」

「バーンといいヴェルザーといい……なんで魔界の人ってこんな感じなのかしらね。なんか、自分の事しか考えてないっていうか――」

クロコダインが抗議の意味を込めて咳払いをひとつしたが、レオナは気が付いていないようだ。

会話が途切れたのを見計らってアバンが嗜めるように言う。

「――まあ、その話はまた追々するとして、とりあえずこれからの事を考えましょうか。あまりのんびりしている余裕は無さそうですから」
一堂は黙って頷いた。

一方、デルムリン島――
居間でお茶を啜っていたチウとヒムは小さな異変に気付いた。
微かに部屋が揺れているのだ。
ふたりは振り子のように揺れる天井のランプを見つめて言った。
「最近地震が多いねえ……」
「もし、火山が噴火したらこの家はどうなるんだろうな……」
「その時はその時だよ、ヒムちゃん――自然というやつには逆らえないからねえ……」
ふたりがそんな話をしていると、ドンドンと何かがぶつかる音が聞こえてきた。
「んっ？今何か聞こえなかったか？」
ヒムがキョロキョロと辺りを見回した。
チウはじっと耳を澄ましている。
確かに断続的に何かがぶつかっているような音がしているようだ。
「どうやら外みてえだな。俺、見に行ってくるわ」
「うん。頼んだよ」
そう言うと、チウは懐からノートを取り出し何やらメモをし始めた。
書いているのは島のモンスター達のレポートである。
チウは月に一度、島を周りモンスター達の様子をチェックしていた。
体調を崩していたり、怪我をしているモンスターがいれば、このログハウスまで連れてきてブラスと共に看病をするのだ。
その他、モンスター同士がつがいになった際の出産や子育ての支援、島に危険な場所がないかの調査、そして災害時の避難経路の確認と整備等も重要な仕事である。
これまではブラスがこれらを一手に引き受けていたが、彼が高齢な

事もあり、チウ達が手伝える仕事については分担する事になったのだ。
自分は決して食事をたかりに行っている訳ではない――会議の合間に、たまたまブラスさんが食事を出してくれるだけ――というのがチウの弁である――
「おいチウ！大変だ！」
突然ヒムの怒声が聞こえてきた。
チウは立ち上がると、どすどすと大股で玄関に向かいドアを開けた。
外は少し曇っていて肌寒い。
「お――い!!こっちだ!!」
間髪入れずヒムの声が聞こえてくる。
チウはやれやれ、といった顔で玄関ポーチを歩き、ログハウスの裏庭のテラスに向かった。
ヒムはテラスの端にしゃがみこんでいた。
「どうしたのかなヒムちゃん。血相を変えちゃってさ――」
ヒムが向いている方を見ると、1匹のドラキーがログハウスの外壁にガンガンと頭をぶつけている。
どこかで見た顔だ。
確か「ドラきち」と呼ばれていたような――
しかし、何か違和感がある。
その違和感の正体はすぐにわかった。
――羽が4枚ある。
左右に1枚ずつあるはずのドラキーの羽が裏と表でそれぞれもう一組あるのだ。
「ヒムちゃん、羽が……」
チウが言うと、ヒムは青ざめた顔で答えた。
「――それだけじゃねえ。こっちに来てみな」
不思議に思いながらヒムの方に行き、反対側からドラキーを覗き込んだ。
次の瞬間、チウはあっと声をあげそうになった。

顔の裏側に、もうひとつ顔がある。
「これは……」
チウは目の前の光景が信じられず、何度も目を擦った。
もう1匹は「ラッキー」と呼ばれているドラキーだった。
2匹のドラキーはチウの記憶によれば、ある時期からつがいになっており、いつも仲睦まじく行動していた。
先日、デルムリン島に帰ってきたダイを出迎えたのもこの2匹だったと聞いている――
その2匹が表裏でくっついてしまっているのだ。
そのせいで、どう動いて良いのかわからず真っ直ぐ飛べなくなり、この建物の壁にぶつかったまま移動出来なくなってしまったのだろう。
「おい。こりゃどういう事だ?」
ヒムは表情を失ったままチウに訊いた。
「ぼくに聞かれても……一体これは……」
状況を掴めないふたりは目を泳がせたまま、一向に進まない問答を繰り返した。
不意に誰かが近づいてくる気配がして、チウとヒムはぱっと顔をあげた。
そこにいたのは、若い男だった。
くっきりとした目鼻立ちの――
ハンサム――と言って良いだろう。
筋骨隆々とした体格をしており、首に太い珠数のようなネックレスをしている。
彼はドラキーを見て彼はぼそっと呟いた。
「さっきの……あーあ……やっぱり失敗だったか。悪い事をしちゃったな――」
男はすぐ傍にいるふたりに気付いた。
向こうもこちらを見ている事に気付くと、彼は腰の低い感じで近づいてきた。
「おっと、失礼。僕はブラフマと言います。魔界――と言って分かり

ますかね。そこから来たんですけど――実は、人を探しているんです」
「――ダイ君、って知ってますか――？」
チウとヒムが無言でその顔を見つめていると、男はきまり悪そうに頭を掻いて言った。
「あの――何かお気を悪くしてしまっていたら、申し訳ありません。そんな人、知りませんよね……」
「――そうじゃねえ――」
「はっ――？」
彼の顔に動揺の色が見える。
「そうじゃねえ。その前だ――　おめえ、さっき何て言った？」
立ち上がったヒムの拳がぶるぶると震えている。

生きるもの

「はて……？何か気に障るような事を言いましたかね――」
ブラフマは本当に訳がわからないという様子で聞き返した。
「分からねえのか……？こいつをこんな風にしたのはお前なんだろ――？」
ヒムは怒りを抑えながら、震える手で目の前でもがいている両面ドラキーを指差した。
体力が落ちているのか、最初に見た時と比べてだいぶ羽の動かし方が弱々しくなっている。
ブラフマは今初めて気付いた、という顔をして言った。
「――ああ、そのモンスターですか。ちょうど一緒にいたものですから、合成素材にうってつけだと思いまして。でも上手くいきませんでしたね。同種族でもこういう事があるのだと勉強になりましたよ」
そう言って彼はくっくっと笑った。
絶句するふたり――
「――おい貴様……いったい何者だ!!」
チウが叫ぶと、ブラフマは少し面倒臭そうに答えた。
「何者――。先ほどお話したように魔界から来たというだけではダメでしょうか――」
ヒムはもう無理だ、と言うように頭を左右に振ると、チウを片手で制するジェスチャーをした。
「ああそうか――じゃあ――言いたくなるようにしてやるぜ!!」
激昂したヒムのオリハルコンの身体が一瞬にして闘気に包まれた。
「ほう……」
ブラフマは少し驚いた顔をすると、珠数の太いネックレスに指で触りながらやれやれというように呟いた。
「あーあ。しかし、なんでみんな抵抗しようとするかなあ……ヴェルザー達にせよ何にせよ――僕はダイくんって子を探してるだけなんだけどなあ――」
「なあ。おめえは――生き物の命を、一体何だと思ってんだ――？」

ブラフマは嗜めるような口調で続ける。
「ねえ。怒ってるみたいだけど、君とこのモンスターと一体どういう関係があるっていうの？――ああ、わかった！もしかすると君らもモンスターなのかな？知能が高そうだったから気付かなかったよ。そっちのネズミ君はよく分からないけど――」
「うるせえ！いいから答えろって言ってんだよ!!――このクズ野郎!!」
ヒムが拳を振り上げ飛びかかった。

再びカール王宮・病室――
「ダイ君、さっきヴェルザーが話していたという地震の件について他に知っていることはありませんか？」
アバンは緊迫した表情で訊くと、ダイは悲しそうに首を振った。
「おれ、恥ずかしいけど詳しいことが全然分かってなくて……その第3の勢力っていうのも〝その時がくれば嫌でもわかる〟としか教えてくれなかったんだ」
「ふむ――ベラは何か知っていますか？」
ベラは少し考えてから答えた。
「ビシュヌ達は――その昔ひとつだった地上と魔界を繋げようとしているのだ、と父から聞いた事があります。魔界の中でも、地上との距離が非常に近くなる特別な座標があるそうで、その場所を彼らは独自に研究していた、と聞きます。地震はその実験によるものとも――」
「なるほど。そう考えると、今回地震が多く観測されている地域は、魔界との距離が近い場所である可能性がありますね……カール王国東部の破邪の洞窟付近、リンガイア王国南東のギュータ地方、ベンガーナ王国南端のアルゴ岬、ロモス王国南の海域のデルムリン島……」
アバンが何か思いついたようにポンと手を叩いた。
「ギュータにかつて存在した逢魔窟は確かに魔界へと続いている可能性が高いと言われていましたし、アルゴ岬は言わずもがな竜の騎士と縁が深い場所ですね……」
「そういえば、おれ達がダイを助けに行った時の魔界の入り口は破邪

の洞窟の地下だったな――リリルーラを使ったのはダイの剣があった場所だから洞窟からは少し離れてたけど」
ポップの言葉にクロコダインも頷いた。
「おれ――レオナが賢者になる儀式をしたデルムリン島の大穴の奥は魔界と繋がってるかもしれない、ってじいちゃんから聞いた事があるよ！」
ダイとレオナも顔を見合わせた。
「これらの場所が何かしらの魔力を増幅させる力がある土地であったと考えると――ふむふむ。話がだいぶ繋がってきましたね――」
その時、微かに部屋が揺れた。

進化の秘宝

「――なんだ？また地震か？」
ポップが天井を見上げて呟くと、窓から急に強い光が差し込んできた。
「うわっ！」
窓の向かいにいたダイが悲鳴を上げ、そばにいたベラも慌てた様子でシーツを被った。
太陽の光にしては眩しすぎる。
その場にいる全員が目を瞑った。
全てが光に満たされていく――
恐るおそる目を開けたダイたちが見たのは、ダイたち以外のものの輪郭が消え、白一色で塗りつぶされた世界だった。
どこまでも続く白一色の世界――
何処を見て良いか分からず、ダイたちはお互いの顔を見合った。
はっと気づいたダイがベラに耳打ちした。
「ベラ、眩しくないから大丈夫だよ――」
ベラはシーツを取り、辺りを見回すと、不思議そうな顔で呟いた。
「これは――太陽の光……？」
「どうやら違うみたいよ――」
代わりにレオナが答えた。
クロコダインは目を瞑ったまま何か低い声で唸っている。
アバンが遠くの方を見て言った。
「先程の光は――精霊の祝福の光に似ていました。破邪呪文の契約をした時と同じような。しかし、あのような強い光は――」
すると、不意にダイたちの頭の中に風の音とも波の音ともつかないノイズが聞こえてきた。
そして、男性とも女性ともつかない威厳のある声がダイたちに語りかけてきた。
――皆さん、私は精霊ルビス。今起きている事をお伝えします――
――今あなたたちの前に立ちはだかろうとしている邪悪な者――

ビシュヌは元々は非力な魔族でしたが、天界よりある物を盗みました――

それは「進化の秘宝」と呼ばれるもので、神の意思により、生き物を神に近い存在に進化させる事ができる神々の秘宝です――

今、魔界のバランスはかつてないほどに大きく崩れています。

かつて、大魔王バーン、冥竜王ヴェルザー、そしてビシュヌと三つ巴の勢力がお互いを監視し合う事でバランスが保たれていました。

しかし、バーンが斃れ、ヴェルザーが力を失っている今、ビシュヌとその仲間――ビシュヌ、シヴァ、ブラフマの3人――は進化の秘宝を使い、畏れ多くも新しい神に成り替わろうとしています。

そして、地上と魔界の両方を破壊し、この世界を自分達に都合のいいものに作り変えるつもりです――

勇者ダイとその絆の光に導かれし皆さん――

「進化の秘宝」を取り戻し、この世界に均衡を取り戻して下さい。

マザードラゴンが力を失おうとしているのは、進化の秘宝が邪悪な物の手に渡ってしまったことで、本来の秘宝の力が発揮出来なくなってしまったからです。

なぜなら、マザードラゴンこそが進化の秘宝により神の手によって生み出された存在だからです――

「進化の秘宝」は神に近い存在になれるとはいえ、神の意志が介入しない事には不完全な力しか発揮出来ません。

諦めなければ、必ず皆さんに勝機があります――

神々の光をあなた達に――

そして全てが正しい道に導かれますように――

声の主が言い終わると、部屋はいつの間にか元に戻っていた。

窓から見える景色も同様である。

しばらく沈黙が続いた後、ポップが口火を切った。

「――なあ、今の……みんな、聞こえたよな――？」

黙って全員が頷いた。

「その――ビシュヌって奴、相当やべえ奴なんじゃねえか――？」

「地上を支配する、じゃなくて全部を破壊して作り変える、って言ってたわよね……」
レオナが眉間に皺を寄せた。
「オレには話が大きすぎてよく分からん――何をどうすれば良いのか――」
クロコダインは困った様子で首を捻っている。
「――多分、今ビシュヌ達の関心事はダイ様のことだと思います……地上を制圧するのにいちばん脅威になると考えているはずですし、どんな手を使ってでも探して消したいと思っているでしょう。あいつらのうち、誰なのかは分かりませんが、私もダイ様の居場所を聞かれて――」
ベラはそう言うとまだ傷が痛むのか、包帯を巻いている頭の片側を押さえた。
「うーん……彼らが地上でダイ君を探すとしたら、まずどこから探すか――ですね――」
アバンは顎に手を当てて考えている。

デルムリン島――
「うおおおおおおおおおおおお!!!!!」
ブラフマが身構えるより早く、ヒムの闘気のこもった左ストレートが顔に命中した。
ブラフマは川の向こう岸まで吹き飛び、岩壁に激突した。
壁に叩きつけられ、ブラフマは動く事ができない。
「見たか！舐めやがって……！」
「ヒムちゃん！良いぞ！やっちゃえ!!」
チウが歓声を上げた。
ヒムがすかさず追い討ちをかけようと川を飛び越え、2発目がブラフマのボディに当たる瞬間――
「うっ――!!」
突然何もないところから爆発が起きた。
咄嗟に飛び退いたヒムの左腕にヒビが入っている。

「貴様……今、何をしやがった？」
ブラフマは顔を押さながら起き上がった。
「いててて――いきなり殴りましたね――」
彼の手に岩の破片が握られている。

泥沼

ブラフマはゆっくりと口の端についている血を手で拭うと、不敵な微笑みを浮かべた。

「――そういえば、私が何者か知りたいと言っていましたね――」

彼は岩のかけらを握り何かを呟くと、手の内側が一瞬光った。

そして手を開くと――その岩はなんと小さなばくだんいわに変わっていた。

ブラフマの手の上で釣り上がった小さな目がギロリとヒムを睨んでいる。

「うっ――！」

ヒムが怯んでいると、ブラフマは周りに飛び散っている岩を次々とばくだんいわに変えていった。

「ふふ。地上はやっぱり違いますね。中でもこの島は『宝庫』ですよ。全てに生命の息吹が感じられる――魔界だとこうはいきませんからね――」

彼は満足そうに微笑むと、ごろごろと足下に転がるばくだんいわを眺めて言った。

「こんな事もできるんですよ」

彼は4～5個のばくだんいわを集めると、手をかざした。

するとあっという間に普通サイズのばくだんいわになった。

「そして――こんな事もね」

彼はさらにもうひとつ普通サイズのばくだんいわを生み出すと、それらのばくだんいわのそれぞれに片手をかざした。

すると――

ふたつのばくだんいわは合成され、禍々しい赤い身体のメガザルロックへと姿を変えた。

「あーあ。これじゃ迂闊に手を出せなくなっちゃいましたね――」

目を白黒させながらその様子を見ているヒムとチウに気付くと、ブラフマは楽しそうに言った。

「私が何者か――そうだな。いちばん近いのは神様、ってとこかな―

――？」
「フン！ただのばくだんいわだろ？確か、こちらから攻撃しなければなんて事はないはずだぞ!!」
さっきまで呆気に取られていたチウが言い返すと、ブラフマはやれやれ、と言うようにため息をついた。
「私が生み出せるのがばくだんいわだけだと思いましたか――？」
そう言うと、彼は地面に手をあてて何か呟いた。
すると間も無く彼の周りの地面は水のように緩くなり、泥沼になってしまった。
さらにポコポコと表面にガスのようなものが発生している。
しばらくすると、地面からにょきっと泥にまみれた手が生えてきた。
ひとつ出てきたと思うと、それは次から次へと仲間を呼ぶように増えていった。
気がつくと、あっという間にチウの周りを7～8体のマドハンドが囲んでしまった。
次の瞬間、泥にまみれた不気味な手が、チウの両足を掴んだ。
「うあっ!!」
マドハンドは寄ってたかって地中にチウを引き摺り込もうとしている。
「助けて！ヒムちゃん！」
そう言っている間にチウは腰までぬかるみに浸かってしまっている。
ヒムはチウに群がるマドハンドを一体ずつ突きで倒していった。
「くそ！こいつら――弱いくせに――次から次へと――」
チウはすでに胸まで地中に埋まってしまっていた。
「ほらほら。早くしないとまた仲間を呼んじゃいますよ――」
ブラフマはその様子を愉快そうに眺めている。
ヒムが最後のマドハンドを倒そうと、拳を振り上げた瞬間、横から何かが飛び込んできた。
メガザルロックの人を嘲るような黄色い目がヒムを捉えた――

「おっと！・いけない！・手が滑ってしまいました」
ヒムの拳とマドハンドの間に突然滑り込んできたメガザルロックにヒムの拳がまともに当たってしまった。
そして次の瞬間――大爆発が起きた。
猛烈な風と光がチウとヒムを襲う――
ふたりがやっとのことで目を開けると、飛び込んできたのは悪夢のような蘇ったマドハンドの大軍だった。
再びチウに絡みつくマドハンドたち。
チウを爆発から庇ったヒムの身体にはいくつもヒビが入っている。
「ああ!!・ちくしょう――!!!」
「あーあ。またやり直しですねえ……可哀想に」
ブラフマが首から下げている数珠を弄びながら言った。
「ヒムさんでしたっけ。あなたは一対一なら強いかもしれませんが、お見かけしたところ、スピードはあるものの全体的に攻撃が大振りで隙が多く、さらに呪文など全体攻撃をする術もないようです。ただ強いモンスターをぶつけるより、こういう戦い方が有効な場合もあるんですよ」
そう言い終わると、ブラフマは死に物狂いで拳を振るい続けるヒムに顔を近づけて訊いた。
「――で、そろそろダイ君の居場所を言う気になりましたか？」
彼の手には小さなばくだんいわが握られている。

卑怯者

「あれ？聞こえませんでしたか？ダイ君がどこにいるか……多分知ってますよね――」
ブラフマは手の上で自らが作り出したモンスターをボールのようにポンポンと弄びながら言った。
「――ふざけんなよ。例え知ってたとしたって言う訳ねえだろうが!!」
ヒムがこちらを向かずにぶっきらぼうに答えると、彼は残念そうな顔で僅かに口の端を歪めて言った。
「そういう態度は――命取りになりますよ」
ブラフマは指をぱちんと鳴らすと、ヒムが戦っているマドハンドのうちの1匹が手を握ったり開いたりするように動かした。
――まるで手招きをしているように見える。
直後、ズシンという音が響き、岩山の影から、身の丈4～5メートルはあろうかというヒゲを蓄えた石像が現れた。
腕を振り上げ、足を踏み鳴らすと雄叫びを上げた。
「――おい……マジかよ――」
ヒムは呆気に取られた顔をしている。
マドハンドの数は2体にまで減っており、チウはやっと自力で動けるようになっていたが、ショックもあるのかまだ満足に戦える様子ではない。
「おい、隊長さん！どうやら本気でやらねえとまずいようだぜ……」
「ヒムちゃんごめん――ぼくとした事が、油断していたせいで――」
「来るぞ!!」
石像はチウとヒムを睨みつけると、一目散に駆けてきた。
「うわあああああああ!!」
後退り悲鳴を上げるチウ。
「落ち着くんだ！足を狙うぞ！」
ヒムが言うと、チウは震えを抑えつつ身構えた。
「おい！こっちだ！」

ヒムが叫ぶと、石像は振り上げた拳をヒムに振り下ろした。
それを素早いフットワークで避けると、ヒムは翻弄するように石像の脚の間を走り回った。
痺れを切らした石像がヒムを踏み潰そうと大きく片足を上げた。
「今だ!!チウ!転ばしちまえ!!」
「うおおおお!!窮鼠包包拳!!!（きゅうそくるくるけん）」
攻撃体勢に入ろうとしたその時――
バランスを崩したのはチウの方だった。
マドハンドが再び仲間を呼んでいたのだ。
泥まみれの手がチウの短い両脚を掴んでいる。
それを見た石像はヒムから離れチウのいる方に駆け出して行った。
「う……動けない……!くそっ……離れろ!!」
「やべえ……!」
異変に気付いたヒムは血相を変えて後を追った。
「う、うわあああああ!」
今にも石像に潰されそうになっているチウに向かい、ヒムがヘッドスライディングをした。
――ヒムに弾き飛ばされたチウは間一髪、踏みつぶし攻撃を避けられた。
「――あっ、あ……!」
土煙の中から現れた地面に倒れているヒムを見てチウは悲痛な声をあげた。
ヒムの腕が砕けて折れている。
身体のヒビも深くなっており、再び大きな衝撃を受けたら全身が砕けてしまいそうだ。
「ヒ……ヒムちゃん……」
「こんなの平気だぜ……バーンパレスでの戦いに比べたら屁でもねえ――」
「ふふ。脆いですねえ……仲間を庇ったばっかりに、というやつですか」
千切れたヒムの腕を見ながらブラフマは続けた。

「――あなた、オリハルコンで出来ているんですか――？さっきからなんか変だなと思っていたんですよ。やたらと命、命ってうるさいから――私から言わせると、あなたは貴重な素材なんですから、そっちの命拾いをしたネズミ君よりずっと価値がありますよ――」
「――うるせえ――黙れゲス野郎――」
ヒムの声が少し苦しそうだ。
「おや？けっこうダメージを受けていそうですね。大丈夫ですか？」
「それと――この腕はもらって行きますよ。何かに使えそうですし。どうせ再生するんでしょう？魔界の金属の特徴ですよね」
「お前なんか……お前なんか……」
チウが震えながら言った。
「えっ？何ですか？」
「自分の事だけしか考えていないやつに本当に強い奴はいない――」
「ふっ――」
ブラフマは嘲るように笑った。
「私はね、あなたのような中途半端な生き物が嫌いなんですよ――口だけは達者でムードメイカー？みたいな顔したお荷物君がね。そうだ。あなたもこのオリハルコンを合成すればもっと戦力になるんじゃないですか？良かったらやってあげましょうか？」
「おい――ぼくをあまり怒らせるなよ――」
「おお怖い！何をするつもりですか？」
「チウ――やめろ。逃げるんだ！」
「ヒムちゃん。ぼくはこいつが許せないよ。ぼくが馬鹿にされたからじゃなくて――ぼくが大切にしているもの全てを踏みにじるような考え方がね――」
マドハンドの群れや石像が一斉にチウに襲いかかった。
「君には――勇気というものが欠如してるんだ。自分の手を汚さず、安全な場所から自分に都合の良い事ばかり言って――そういうやつを何て言うか知ってるかい――『卑怯者』って言うのさ！」
「チウ――オレに構うな！逃げろ!!!」
ヒムの言葉を無視してチウは身構えた。

窮鼠猫を噛む

「やめろ！逃げるんだ！」
　ヒムの悲痛な声が響き渡る。
「ヒムちゃん……男には勝ち目が無かったとしてもやらなきゃいけない時があるのさ……」
　チウはそう呟くと、目前に迫っているモンスター達の数と位置を素早くチェックした。
「窮鼠……包包拳!!」
　チウはそう叫ぶとボールのように回転し、マドハンド達の周囲を囲むようにぐるぐると廻り始めた。
「あいつ……何をする気だ？」
　ヒムが不思議そうな顔で様子をみている。
　チウはスピードを上げながら少しずつ円の半径を狭め、まるで牛を追い込んでいくカウボーイのようにマドハンドを1箇所に集めていった。
（――今だ!!）
　マドハンドがほぼ直線上に並んだその一瞬、チウはトップスピードで体当たりし、7体全てを一網打尽にした。
「おおっ!!」
　土くれに戻っていくマドハンド達を見てヒムが歓声をあげると、チウは目を回しながら言った。
「たとえ呪文が使えなくたって、こういう戦い方があるってことだよ……ちょっと回転しすぎちゃったけど――」
　岩の上で戦いの様子を伺っていたブラフマは感心したように呟いている。
「――ほほう。なるほどねえ――意外と考えてるじゃない――」
　チウは服の埃を叩くと石像を見上げて叫んだ。
「さぁ――次はお前だな――粉々にしてやる!!」
　チウは窮鼠文文拳（きゅうそぶんぶんけん）の構えを取るとまっすぐに標的に向かって駆け出した。

すると、それを待っていたかのようにブラフマは岩の上から嬉々としてチウにばくだんいわを投げつけた。
「粉々になるのはどちらでしょうかね――！」
冷酷な声が響きわたる。
しかしチウはそれを見透かしていたかのように急ブレーキをかけると、大地に足を踏ん張った。
口を真一文字に結び、落ちてくるばくだんいわをじっと睨んでいる。
「おい！危ねえぞ！」
ヒムが叫ぶと、チウはばくだんいわの真下に走り込み、ギリギリまで引きつけてレシーブで打ち返した。
それは弧を描くようにして飛んでいき、石像の膝に命中した。
そして、数秒後に大爆発を起こした。
閃光と土煙が消えると、石像は片足が砕け、がくりと地面にくずれ落ちていた。
「とどめだ！」
すかさずチウは窮鼠文文拳で突っ込み、石像の顔を真っ二つに砕いた。
「さすがじゃねえか！隊長さんよ！」
ガッツポーズを取っているチウを見て、ヒムは大声で叫んだ。
「ふふん――僕だってこの5年間、遊撃隊のリーダーとして何もしてなかった訳じゃないよ」
チウは鼻の下を擦りながら得意げに言う。
「おい、どんなもんだ！くるなら来い！」
チウはブラフマの方を見て叫んだが、そこには誰もいない。
「あいつ――逃げたのか？とことん卑怯なやつだな――」
不意にチウの背後から何かが走ってくる音が聞こえた。
振り向くと、それは砦に住みついている一角ウサギのアルミラージであることがわかった。
しかし、何やら気が動転している様子だ――
「おいアルミン！どうしたんだ！」

その姿をまじまじと見たチウは驚愕した。
背中に小型のばくだんいわがいくつもくっついている。
おそらく、ブラフマに合成されてしまったのだろう。
しかも、丸い尻尾には炎が灯され、そこからひっきりなしに黒い煤が上がっている。
当然、このまま自分にぶつかればお互い無事では済まないだろう。
しかし避けてしまえば、自分の背後にある石像の瓦礫の中に突っ込み、爆発は免れない――
「ひでえ……何てことを考えやがるんだ……」
ヒムは身震いした。
（どうする……どうする――？）
この哀れな遊撃隊の隊員は鋭い角を突き立てながらぐんぐんと自分との距離を縮めている。
チウは頭を振り、どうすれば良いか迷った。
「ラリホー!!」
不意に呪文を唱える声が聞こえてきた。
強烈な眠気に襲われたアルミラージはそのままスピードを落とすと地面に転がった。
その摩擦で尻尾に着いていた火も消えている。
「ふう……どうやら間に合ったわい」
そこにいたのはブラスだった。
「ブラスさん!?」
「何やら裏が騒がしいと思ってのう――まさか、こんな事になっていたとは」
するとどこかに隠れていたブラフマが姿を現した。
杖を構えるブラスを見ている。
「まだ仲間がいたとはね……しかし――」
一同の目がブラフマに集まった。
「呪文を使えるなら少し分が悪い――一度引き上げといきましょう……君たち、命拾いしましたね」
「おい！逃げる気か！」

チウが咎めると、ブラフマはにやりとして言った、
「腕だけにしようと思いましたが、やはり丸ごともらって行くことに決めました。取り戻したければ魔界に来なさい――」
「なにっ!?おい！ふざけんな!!」
ブラフマは騒いでいるヒムを無理やり肩に担ぐと、そのままルーラで消えてしまった。
「――くそっ……ヒムちゃんが……！」
チウが座り込み地面を叩いている。
「ワシらだけでは仕方のないことじゃ……チウ。お前ダイ達に知らせに行ってくれんか」
ブラスはまだぐうぐうと寝ているアルミンを見て力なく言った。

チウはすぐさまブラスに貰ったキメラの翼を使い、カール王国に飛んだ。

そしてベラの病室に駆け込むと、ダイ達にデルムリン島で起きたことを伝えた。

「――という事なんだ。不甲斐なくてごめんよ――僕がもっと強かったら……あんな奴……」

チウは悔しそうに両手の拳を強く握った。

怒りで体がぶるぶると震えている。

クロコダインは今にも消えてしまいそうに小さくなっているチウの隣に座った。

そして低く落ち着いた声で言った。

「チウ――お前がいなかったらデルムリン島はもっと取り返しのつかない事態になっていただろう……感謝こそあれ、お前を責められる者などいるものか。武人として俺はお前に敬意を表する――」

ダイもその後に続いた。

「チウは精一杯デルムリン島のみんなを守ろうとしてくれたんだよね。おれ、チウが居てくれて本当に良かったと思ってるよ」

「――目的のためなら何でも利用する、って感じよね……ただダイ君を探してるだけなんでしょ……？それなのにどうして他の生き物の命を弄ぶような真似をするの――？」

レオナが珍しく怒りを露わにしている。

「しかし、ヒムの野郎が攫われるなんて……只者じゃねえぞ……そいつ？」

ポップが険しい顔をしてダイの顔を見た。

「うん――何だか底知れない怖さがある――」

顔を曇らせたダイが応える。

話をじっと聞いていたアバンが眼鏡の位置を直しながら言った。

「――ブラフマが自分から姿を消したのは、明らかにダイ君を誘き寄せるための罠でしょう……しかしわざわざ魔界に戻った理由は何で

すかね――？ただ誘き寄せるだけなら、わざわざこちらから行くのが難しい魔界を選ぶ必要はありませんよ――」
「じゃあ、おれたちが魔界に行く術がある事を、奴らは知ってる、ってことか――？」
ポップが顎に手を当てて言った。
「――とにかく行こう。どちらにしろ戦わなきゃいけない相手なんだ。このままあいつの好きなようにはさせないよ――」
力強く言ったダイの横顔を、レオナが愛おしそうに、そしてどこか寂しそうに見つめている。
ベラはベッドの上で居住まいを正すと、ゆっくり話し始めた。
「誰が魔界に行くかですが……それが可能なのは魔族、竜族、竜の騎士、そして魔界の瘴気に耐性のあるモンスター等、だと思われます」
「いま一度整理してみましょうか――」
アバンが手元にあった手帳に名前を書き出した。
・ベラ
・ダイ
・クロコダイン
・ラーハルト
・チウ（？）
・ポップ（竜化時のみ）
（・ヒム）
「人質のヒムは身体が我々と違いますから、おそらく魔界の瘴気の影響は受けないと思われます。その点では安心と言えますね――」
「まず俺が行くよ」
「私も参ります」
ダイが言うと、ベラも軽く手を挙げて応えた。
「無論、俺も行くぞ。チウはブラスさんと共に島に残って、何か異変が起きた時に対応してくれ」
クロコダインが言うとチウは黙って頷いた。
「ダイが行くのであれば当然ラーハルトも行くと言うだろうな――」
「お前ら――回復役が必要じゃねえのか？」

ポップが突き出した親指を自分の顔に向けて言った。
「――ポップ君は地上に残る事はできませんか？地震がまだ続いていますし、もし魔界から敵が現れた時のために戦力を残しておきたいのです。そもそもポップ君がドラゴンになった際、回復呪文が使えるのか、またどの程度の理性が残っているのかはまだ未知数ですからね――」
ポップは前に魔界からダイを連れ戻そうとした時、気持ちの昂りに任せ村を焼き払おうとして、ラーハルトに止められた事を思い出した。
「――じゃあ誰か回復出来るやつはいるのか？」
ポップが訊くとベラが手を挙げた。
「――ベホイミ程度であれば……」
「ベホイミかぁ……少し心許ないけど、無いよりマシ、ってとこだな」
「こんな時、おれが回復できればな、って思うよ――」
ダイが肩を落とす。
「ごめんね。私がついて行ってあげられれば――」
レオナが申し訳なさそうに言う。
「ダイ様は私が回復しますから大丈夫です――」
「いや――そういうことじゃなくってね……」
胸に手を当て澄んだ目で言うベラにレオナは冷たい視線を送った。
「短期決戦だな――いざという時は俺が盾になれば良い」
クロコダインが腰に両手を当てて言った。
「クロコダイン――くれぐれも無理はしないでちょうだいね」
「ああ、分かっている――」
レオナの脳裏にテランでバランを足止めした時の記憶が蘇える。
「――ダイがリーダーのチームって事は……新生竜騎衆ってとこだな――」
ポップはたったひとりで彼らに立ち向かった時のことを思い出した。
バランに率いられた彼らは皆、人間をひどく憎んでいた。

それがリーダーが変われば一転、人類の希望となるのだから全くわからないものだ。
本人に訊ける筈もないが、ラーハルトはあの頃の自分をどう思っているのだろう――
「ダイが竜騎将、ラーハルトが陸戦騎、ベラが空戦騎、クロコダインが海戦騎……おっ、ぴったりじゃねえか？」
ポップが言うと、ベラは真剣な表情でダイを見つめた。
「ダイ様……私の身も心も全てダイ様の物です――どうぞお好きなようにお使い下さい」
「なんか……あんたが言うと別の意味に聞こえちゃうのよね――」
何故か頬を染めているベラをレオナは物凄い顔で睨みつけている。
（ポップ――これはやはり修羅場というやつなのか……？）
クロコダインがポップに耳打ちする。
ポップは
（おっさん――絶対分かってて言ってるな……）
――と思った――
アバンは視線を彷徨わせると、流れを断ち切るように咳払いをした。
「おっほん……ダイ君。魔界へはどんなルートで行こうと考えていますか？」
「ブラフマの動きをチウから聞いた限り、やっぱり島の中に魔界とつながってる場所がある可能性は高いと思うんだ。まずはそこを確認しようと思ってるよ」
「では、まずデルムリン島に向かいましょう。私も行きます」
アバンが言うと、ダイはチウと顔を見合わせ頷いた。
レオナはベラがダイに何かしないか、厳しい顔で監視している――

地の穴

デルムリン島――

聖地「地の穴」

古くからの言い伝えでは地の神に最も近い場所とされ、また神の力と魔の力が出会う場所とも言われている。

この場所は島の火山帯に直結しており、島のモンスター達も滅多に近付かない。

荒々しい山肌のあちこちからは白煙が立ち上っており、どこか魔界を彷彿とさせる雰囲気もある。

5年前、ここでレオナはパプニカ王国の王位継承の為、賢者となる為の儀式を行った。

しかし、現在は立ち入るものもなく、その禍々しい洞窟の入り口はその後ブラス達によって大岩で閉ざされていた。

ダイ達が異変が無いか辺りを調べていると、突然アバンが皆の注意を促した。

「――これを見て下さい」

彼はじっと岩の一部分を見つめている。

アバンの指差す方を見ると、岩と入り口との間に人がぎりぎり通れるくらいの隙間できている箇所がある。

島に住む動物やモンスター程度では到底、ここまで大きい岩を動かす事などできないだろう。

「うむ……前にワシらがここを封印した時はこんな隙間は無かったような気がするのう――」

「確かに、岩を置く時に俺とヒムで隙間が無いか確認した筈だ――」

ブラスとクロコダインが首を捻った。

ダイは、その隙間から僅かに漂ってくるひんやりとした空気の中に、不穏なものが混じっていることを直感的に感じとった――

クロコダインとラーハルトが岩を持ち上げ、洞窟の入り口が露わになると、中からコウモリが大量に飛び出してきた。

レオナが思わず仰け反っていると、ブラスは神妙な顔で言った。

「悪いが、ワシがついていけるのはここ迄じゃ――この先は何が起きるか分からん。悪いが、お前たちに託すより他にない……」
「じいちゃんありがとう。ヒムや島の皆を助けられるように――おれ、精一杯やってみるよ」
ダイ達は茶褐色の溶岩で囲まれた道を奥へと進んでいった。
洞窟の中は人が横に数人が並んで通れるくらいの広さがあり、全体的にゆったりとした下り坂になっている。
洞窟の奥の方は生き物のいる気配はなく、壁にはヤモリ1匹歩いていない。
「ダイ。何か感じるか？」
クロコダインが辺りをを見回しながら聞いた。
「いや……特にまだ何も――」
曲がりくねった道を進む途中、何度も道が分岐している箇所が現れた。
その度ダイは記憶を辿り、進んで行く。
しばらく行くと大伽藍に突き当たった。
高い天井からは様々な方向から突き出た岩が重なり、天然の芸術とも言うべき複雑な色と模様が描き出されていた。
そして、いちばん奥の壁際、両側からまるで両の掌で庇を作るような形で出っ張っている岩の隙間に、石造りの祭壇はあった。
地の神を模った像が置かれ、その上方の壁には地上と魔界を統べる神々達の図が彫られている。
祭壇の手前には白墨で描かれたとみられる魔法陣の跡があり、その中に儀式用の蝋燭や供物が朽ちたものが転がっていた。
「――昔儀式をした場所ね――懐かしい……」
レオナが感慨深げに言った。
「昔はもっと恐ろしい場所と感じたけど、今見てみるとそこまでじゃないわね。ダイ君はあの時のこと覚えてる？」
「ああ、覚えてるよ。レオナと初めて会った日のことだもん――あの時もおれがレオナ達を案内したんだよね」
「あの時、私の為に一生懸命戦ってくれたっけ……あんなちっちゃ

かったダイ君がこんなに頼り甲斐のある男の子になるなんてね……」
レオナはそう感慨深げに言うと、悔しいでしょと言わんばかりにちらりと後ろにいるベラを見た。
ライバルは黙って辺りを見回している。
ダイも周囲の様子を伺ったが、今の所特に変わった点は見られないようだ。
「ここは魔界のマグマが流れ込んでいるかも、ってじいちゃんが言ってたけど、それも確かめようがないよね――」
ダイはため息をついて、地面に胡座をかいた。
「時にダイ様――差し出がましい口をきいて申し訳無いのですが――」
ラーハルトが取り澄ました顔で言うと、皆の目線がふたりに集まった。
「本当にこの女も連れて行くのですか?」

騎士の掟

「ラーハルト……お前の気持ちは分かるが――」
　クロコダインが言いかけると、この魔族と人間の血を持つ戦士は横目でベラを睨んで言った。
「ダイ様のご意志だからこそ許せるものの……正直、貴様がこの地上にいるというだけで虫唾が走る――そもそもあのヴェルザーの操り人形が実戦でまともな判断が出来るか怪しいものだな。ダイ様の足を引っ張らないとも限らん――」
「――私は父上の操り人形ではありません――」
　ベラが少し顔を顰めて答えた。
「――ほう……では、俺の足に槍を突き立てたのも自分の意思だと言うのか」
「それは……」
「それなら、今ここでお前を粛清しても文句は無いな――」
「ちょっと!あんた達やめなさい!」
　一触即発の雰囲気に慌ててレオナが割って入った。
「――曲がりなりにもバラン様の竜騎衆の名を背負うなら、浮ついた気持ちでダイ様に仕えることはこの俺が許さん――自分の甘さでダイ様を危険に晒すなどもっての外――生命を捨てる覚悟でダイ様の盾になる事こそ、本来の我らの役目なのだ――」
　陸戦騎から厳しい言葉を浴びせられたベラは俯いてしまった。
　その様子を見守っていたダイだったが、やおら立ち上がると優しい調子で話し始めた。
「ラーハルト、気持ちはよく分かったよ。ありがとう――でもおれ、ひとりひとりの戦う理由なんか、何でも良いと思うんだ。自分が命をかけても良いって思える理由があるならそれで構わないと思うし、それぞれが心から協力し合えば、きっとどんな敵にも負けないと思う――だから、ラーハルト。少しだけ我慢してあげてよ――」
「――承知いたしました……ダイ様――」
　ラーハルトは跪いて答えた。

「ねえ……ダイ様はやめてくれよ……」
「ダイ……様……」
「もう――！」
　ふたりのやり取りを見て、皆の顔が綻んでいる。
「――それにしても何も起きんな。やはり魔界と繋がっているというのは噂であったか――」
「うん――そうかもしれないね」
　クロコダインの言葉にはそう答えたが、ダイの頭の中には疑問符が浮かんでいた。
　洞窟の入り口から漂う空気の中に、確かにこの世のものではない、何者かのうすら寒くなるような悪意を感じた。
　魔界にいた5年間がダイの感覚をよく磨かれたナイフのように研ぎ澄ましていたのだ。
　ダイはふと道具袋の中をまさぐると大声をあげた。
「――あっ！」
「どうしました？」
「おれ……忘れ物しちゃった。アバン先生。ちょっとブラスじいちゃんの家に取りに行っても良いかな？」
「はい。まだ私たちはここに居ますから大丈夫ですよ」
「ちょっと行ってきます！」
　ダイが慌てて走って行った。
「ダイ様が忘れ物とは珍しい――」
「何かしらね――薬草でも取りに行ったとか――」
　ラーハルトとレオナが会話するともなく会話をしている。
　皆で小さくなっていくダイの背中を見送ると、クロコダインは落ち着かない様子で言った。
「――こうなれば破邪の洞窟から行くか……それとも他の場所を探すか？どちらにしろあまり時間は掛けられんな――」
　残りの候補はテランのアルゴ岬とリンガイアのギュータ地方。
　直線距離で言うと破邪の洞窟のあるカール王国よりアルゴ岬の方が近いが、魔界への入り口が見つかる保証はない――

その時、突然どすん、という音が響いた。
「――ねえ、なんだか揺れてない!?」
いち早く気付いたレオナが言うと、揺れはすぐにどんどん大きくなっていった。
「大きいぞ!」
「きゃーっ!」
あちこちで天井から岩が剥がれ落ちる音が聞こえてくる。
「これは――まさか……」
ベラが何かに気付いた。
祭壇の奥の壁に亀裂が入っている――
揺れが長引くにつれ、ヒビはどんどん大きくなる。
ついに壁が剥がれ落ちると、壁の向こうから湧き出るように灼熱のマグマが大伽藍の中に流れ込んできた。

魔界のマグマ

壁の隙間から流れ込んできた赤黒い溶岩は部屋の１／３ほどを埋め尽くして止まった。
軟体動物の様にも、焼け爛れた巨大な獣の屍の様にも見えるその物体の所々から、燃え出しそうに明るい橙色の光が漏れている。
「うっ……」
ものすごい熱気と吹き上がるガスにクロコダインが後ずさるのを見て、アバンが叫んだ。
「ここは危険です……また地震が来るかもしれませんし、一旦退き返しましょう！」
その時、動きを止めていた溶岩が再び動き出した。
のろのろと壁伝いに移動し、まるでアバン達を取り囲もうとしているように見える。
何処からともなくくぐもった低い声が聞こえてきた。
「オマエタチ――ユカセヌ……オマエタチ……ココデ……シヌ――！」
「むっ……！」
皆が天井を見回し、声の主を探した。
しかし、それらしい者の姿は見えない。
アバン達はいつの間にか溶岩が来た道を塞ぐように背後に回り込んでいる事に気づいた。
「……ココデナ!!」
溶岩の中から真っ赤に燃える巨大な手が伸びた。
続いて、岩同士が擦れる音がし、灼熱の中からこちらを睨みつけるような恐ろしい顔が現れた。
「……!!!!」
クロコダインとラーハルトは飛び出し、同時に溶岩の魔人に向けて武器を振り下ろした。
しかし、攻撃は弾かれてしまい、ほとんどダメージを与えられない。
魔人は素早く手を伸ばすと攻撃直後のクロコダインを掴んだ。

「ぐあああああああああああ!!」
燃え上がる灼熱の手に掴まれ、悶え苦しむクロコダイン――
焼けた体から白い煙が上がっている。
「大地斬!!」
アバンがすかさず走り込み、魔人の手を斬り落とすと、クロコダインは地面に投げ出された。
ラーハルトが天井ギリギリまでジャンプをし、落下のスピードを加えて技を繰り出した。
「ハーケンディストール!!」
衝撃波が溶岩魔人の中心を捉えた。
「やった!」
倒れているクロコダインにベホマをかけながらレオナが歓声を上げた。
しかし、真っ二つに分かれたはずの魔人の体は徐々に溶岩と共に中心に移動し元に戻ってしまった。
アバンが切り落とした腕もいつの間にか元通りになっている。
「くっ……剣が効かないというのか……?」
クロコダインは苦々しい顔で言った。
不意に魔人の顔の下に割れ目が現れた。
そして何かを吸い込むような動きをすると、広範囲に燃え盛る火炎を吐きだした。
猛烈な熱風と炎がアバン達を襲う。
ラーハルトは咄嗟に皆の前に出て、武器を構えると、鎧の魔槍を回転させ、真空の盾を作り炎を防いだ。
すると、いきなりこれまで様子を見ていたベラが後ろから飛び出した。
「危ないわよ!!」
レオナの言葉を無視してベラは上空に浮き上がった。
魔人は彼女を追うように上方に角度を付けて再び炎を吐き出したが、ベラが翼をはためかせると、炎は左右に散ってしまった。
その隙を狙い、この勇敢な竜族の娘は上空から急角度で魔人の正面

に飛び込んで行った。
　そして、掴もうとしてくる魔人の手の間を擦り抜けると、ベラは空中に留まったまま近距離から呪文を唱えた。
「ヒャダルコ!!!」
　前方に向けられた両の掌から猛烈な吹雪と氷が吹き荒れる。
　溶岩魔人はたちまち凍りつき、ただの灰色の石の塊になってしまった。
　それと同時に周りを取り囲んでいた溶岩もいつの間にか消えている。
　ベラは汗を拭くと皆の前に進み出た。
　皆が感嘆の声をあげる中、ラーハルトだけが不服そうな顔をしてそっぽを向いていた。
「私は、ほとんどの属性の攻撃呪文が使えます――今の敵はヒャド系以外の呪文はあまり効果がなかったでしょう。バギ系あたりなら僅かに効いたかも知れませんが――どちらにしろ打撃中心の戦い方では苦戦を強いられたはずです――」
「ふん――お前も少しは役に立つようだ。認めてやってもいい」
　ラーハルトがこちらを見ずに言うのを聞いて、ベラはふふっと微笑んだ。
「しかし、今のもブラフマが仕掛けた罠だったのかもしれませんね――」
　アバンの言葉にレオナが頷いた。
「――私たちがここに来る事を予測していたのかもしれないわね」

「おーい！みんな！」
　後ろからダイの声が聞こえてきた。
「さっきすごい地震があったけど大丈夫だった？」
「――まあ……結果オーライというやつですね」
　アバンはベラとラーハルトをそれぞれ、ちらりと見てから言った。
「なんかこの部屋、形がずいぶん変わったね……あれ？あそこにあんなのあったっけ？」

ダイが指差した先――

最初に溶岩が流れ込んできた祭壇部分の岩壁が崩れ、奥に隠されていた部屋が顕になっている。

魔界、再び。

ダイ、アバン、レオナ、クロコダイン、ラーハルト、そしてベラの6人は壁の奥に続く道を進んで行った。

「――もう溶岩は流れてこないだろうな……」

「ああ多分な――」

クロコダインとラーハルトの会話を聞いて、レオナは思わず身震いした。

まっすぐに続く道は段々と狭くなっていき、行き止まりとなった。

「……何か怪しいですね」

皆で辺りの様子を調べると、壁の一部を四角く囲むように不自然に亀裂の入った場所が見つかった。

「ここだけまるで後から切り取られたように見えるわね」

何か閃いたアバンが試しに力一杯がこの石壁を押すと、その部分がスイッチのようにぐっと奥に押し込まれた。

するとまもなく、ズズズと岩が擦れるような音が聞こえてきた。

「侵入者を欺く仕掛けですね。破邪の洞窟でも似たようなものを見たことがあります」

――が、何も起こらなかった。

皆がえっ？という顔をしている。

仕方なく諦めて入り口の方に戻ると、途中に先ほどはなかった横穴が出現していた。

穴の奥は下りの階段になっているようだ。

「ふん。くだらん仕掛けだ。いかにもという感じだな――」

ラーハルトが横穴の入り口の壁を拳で叩いた。

慎重に階段を降りると、そこにあったのは巨大な穴――だった。

正確には、ブクブクと音を立てるオレンジ色のマグマの海の中央に、火山岩でできた島のようなものがある。

そして、その島の中央に穴がぽっかりと空いている――という状態である。

所々に浮いている岩場を渡っていけば中央の島に上陸できそうだ。

「噴火口――という訳では無さそうですね――」
「――自然に作られた、という感じでも無さそうだな」
アバンとクロコダインが様子を伺っていると、ベラが翼をはためかせて言った。
「私が様子を見てきます――」
「気をつけてね」
レオナは黙ってダイとベラのやり取りを見ている。
しばらくすると穴の淵からベラが現れた。
「やはり噴火口ではありませんでした。穴はかなり深いようで、どこか別の場所と繋がっている可能性がありそうです」
ダイはクロコダインやラーハルトと顔を見合わせ、互いに頷いた。
「――じゃあ、おれたち行ってくるよ」
「皆さん、ここから先は何が起こるか予想もつきませんが――くれぐれも気をつけてください」
「ダイ君――」
アバンが餞の言葉を送ると、レオナは顔の前で両手を組み、縋るような顔でダイを見た。
「わかってるよ――必ず戻るって約束する」
「――絶対よ……」
ダイとレオナが指切りげんまんをしているのを見て、ベラが不思議そうな顔をしている。
「いざ、魔界へ――！」
ラーハルトが叫ぶと、ダイと新生竜騎衆は大穴に飛び込んだ。
「今度は5年も待たせたら承知しないわよ――」
4人の姿が消えたあと、レオナは小さく呟いた。

永久に続きそうな暗闇を抜けて――
目を開けると、ダイ達は砂漠の真ん中にいた。
「……あれ……？ベラ、ここ魔界だよね？」
「はい……間違い無いかと。この景色から見るに、ヴェルザー城から見て南のエリアだと思われます」

「やっぱり繋がってたんだね――ブラフマがいそうなところを探してみるしかないみたいだね」
　あてもなく砂漠を歩く４人――
　しびれを切らしたラーハルトがベラに訊いた。
「おい。何か思い当たる所はないのか？お前の城もブラフマに襲撃されたんだろ？」
「いや……特には――もし生き残りがいれば何か聞けるかもしれませんが」
「ふん……倒れていく部下を置いて逃げ出すとはな――お前も言ってみれば一国の王女だろう？」
「ラーハルト。もうその話はやめようよ――とりあえずヴェルザーの城に戻ってみよう。このままあてもなく彷徨うよりは目的地があった方がいい」
「うむ……あの場所にまた戻るのか――」
　クロコダインが浮かない顔をしている。
　北に足を進めながらダイはベラに訊いた。
「ベラ――ブラフマに襲撃された時はどんな感じだったの？」
「はい……異変に気付いたのは竜達が突然同志討ちを始めた時でした。そのうち、共食いを始めたり、辺りに炎を吐いたりと暴れ始めたので、私は高い所から状況を把握しようと思い、空に飛び立とうとしました」
「それで？」
「気が動転していたのか――その時暴れていた竜の尾か何かだと思うのですが――硬いものが頭に当たり、私はそのショックでそのまま気を失ってしまいました。なので、その間に何が起きていたかは記憶に無いのです――後で気付いた時には、竜達の屍がそこら中に転がっていて、その周りで首に数珠を巻いた男がビシュヌと口論をしているのが見えました。そして私が見ている事に気づくと、ダイ様は何処にいるんだ――と……」
「――えっ？ちょっと待って！ベラはビシュヌってやつの顔を知ってるの？」

ベラはしまった――という顔をして慌てて発言を取り繕った。
「――ええ、まあ一応……その、よく知っているという訳ではないのですが……」
ラーハルトは訝しげな顔で言った。
「ダイ様――こいつは今、何かを隠そうとしました。ダイ様に助けを求めるどころか、この女もそのなんとかという奴らとグルかもしれません――」
「それは絶対にありません!!」
ベラはムキになり大声で言った。
――彼女がこれ程まで感情を露わにするのはこれが初めてだった。

チームプレイ？

ベラの灰色の瞳がいつになく鋭い光を放っている――

彼女は棒立ちになっているラーハルトに詰問した。

「私がダイ様を裏切ると――？私がビシュヌの顔を知っていることが一体どうして裏切りなのですか？」

じっと黙り込んでいる陸戦騎の顔を、ベラは怒りを押し殺した顔で見つめている。

やむなし、と思ったのか、クロコダインが口を挟んだ。

「ラーハルト。許してやれ――事情は知らんが、こいつはこれまで魔界に長く居たのだから、そのなんとかという奴の顔くらい見た事があっても不思議では無かろう――」

自分にもこの状況を作ってしまった責任があると思い、ダイもクロコダインの言葉をフォローした。

「そうだよ。これから力を合わせて戦うっていうのに、いちいち疑ってたらキリがないしさ。おれだってさっきのはそんな意味で言ったんじゃないから――」

しばし流れる沈黙――

「――すまん――俺が言いすぎたようだ……」

皆に嗜められたラーハルトは思いのほか素直に引き下がった。

その肩をクロコダインがお疲れさん、というようにポンと叩くと、彼は何事も無かったかのようにダイ達と共に足を進めた。

しかし、依然として疑念は残る――

（あの慌てようは一体……）

突然ダイ達のゆく手にサンドマスター2匹とさそりアーマーが現れた。

どうやらモンスター達はおどろき戸惑っているらしい。

攻撃せずにじっとこちらの様子を窺っている。

「行くぞ！」

クロコダインが飛びかかりサンドマスターを真っ二つにすると、ベラが残りのモンスター達に向かってイオラを唱えた。

ダイが呪文のダメージを受けているもう1匹のサンドマスターを追撃して倒すと、辺りを伺いながら立ち尽くしているさそりアーマーにラーハルトが2段突きを繰り出した。
装甲の弱い部分を狙いうちされたさそりアーマーは悶え苦しみながら、先の鋭く尖った尻尾を近くにいたベラに向かって半狂乱で振り下ろした。
ベラに当たる瞬間、眼前に飛び出したダイがモンスターを横に薙ぎ払うと、さそりアーマーの上半身はずるりと横にずれ、砂の上にがくっ、と転がり落ちた。
ダイは剣を仕舞うと振り向いて言った。
「俺たちの初のチームプレイだね！」
汗を拭きながらニコニコしているダイにラーハルトは微笑みを返した。
ベラは溶岩魔人との一戦を知らないダイの無邪気なひとことに思わず吹き出しそうになるのを我慢している――
砂漠をしばらく行くと集落が見えてきた。
中央に広場があり、周りに石造りの家が少しと粗末な商店がいくつか。
店先には植物の蔓で編んだロープや筵、そして穀物の粉のようなものが並べられている。
「今日は一旦ここで休まんか――このまま歩き続けてもすぐにはヴェルザーの城に着かぬだろう」
「うん、そうしようか。だいぶ歩いたからね」
クロコダインの言葉にダイは頷いた。
「私は宿が借りれるか探してきます」
「うん。お願いするよ。ベラだったらみんな断らなそうだし」
彼女は少し照れ臭そうにふふっ、と笑った。
しかしベラがあちこちを見て回ったものの、一向に住人の姿は見えない。
「ダイ様……家の中には誰もいないようです……」
「こっちも誰もいないよ――おーい！すいませーん！誰かいますかー

？」
ダイが大声で叫んだが返事はない。
「なんとなく人の気配はするんだけど……おかしいなぁ……」
家の中庭に干してある洗濯物を見ながらダイは首を傾げた。
その時、背後でがさっという音がした。

動揺

ダイ達が振り返ると、そこには竹槍を構えた少年が立っていた。
草染のカーキ色のズボンに白いシャツ、濃紺色のマントの様なものを羽織り、足元は裸足――
よく見れば体はぶるぶると震え、刈り込まれた髪の下にある幼い顔は緊張で強張っている。
「お前たちもあいつらの仲間なのか――？」
今にも泣き出しそうな顔で振り絞るように叫ぶと、槍をぐっと前に突き出した。
状況が掴めないダイ達――
ハッと気付くと、ダイは微動だにしない少年に優しく訊いた。
「――あいつらって誰のこと？」
しゃくりあげるように少年は話し始めた。
「あいつら……あいつら……みんなを攫って……モンスターに変えちまうんだ――友達のメイ達も……みんなも……うっ……うっ……」
「――おれたちはそんな事出来ないし、そんなやつと仲間でもないから安心してよ――」
ダイの言葉に安心したのか、少年はふっと力が抜けたように槍を持ったまま地面に膝をついた。
その時、遠くから怒声が聞こえてきた。
「こぉーらっ!!このバカ野郎！何やってんだお前はっ!!」
突然老人が走ってきたかと思うと少年の頭にゲンコツを喰らわせた。
呆気に取られるダイ達に老人は頭を下げて言った。
「本当に申し訳ありません――見ず知らずの方に大変失礼な事を……」
無理やり少年の後頭部を押し下げている老人にダイは恐るおそる聞いた。
「あの……おれたちは全然大丈夫だから――それより、人を攫ってモンスターに変えてる、って話を聞かせて欲しいんだ」

ダイに促された老人は渋い顔をして話し始めた。
「実は……おととい――自分は『神』だと名乗る、首に数珠を付けた男がやって来て、村の人々を攫っていってしまったのです――足りなければまた来る、と言い残して……あいつは私たちの目の前で人をモンスターに変えて見せました」
ダイ達に緊張が走った。
「――どうしてそんなことを……」
「さぁ……神の宿敵を倒す為、とかお前らみたいに弱く価値が無い者が神々の役に立てるのだから、光栄に思え、とか何とか言っていましたが……」
「神の宿敵？」
ダイの代わりにクロコダインが聞き返した。
「はい――確か……『ダイ』という怪物を倒す為だとか――」
そこまで言うと突然少年が割り込んできた
「ダイなんてやつ早く死んじゃえば良いんだよ……そんな怪物がいなければメイも他のみんなも……」
「こら！ベド!!大人の話に入ってくるんじゃない!!」
「――メイっていうのは君の友だち――？」
ダイが動揺を悟られないように注意しつつ、優しく聞き返した。
「そうだよ！おれがいつも遊んでた子なんだ――」
「そのメイという女の子と弟、そしてふたりの母親も攫われてしまいました――この子の前でメイ達の母親はサソリの化け物に変えられ、メイと弟は巨大なミミズのようなモンスターに……」
――それを聞いた瞬間、ダイは心の中に空虚な闇が広がっていくのを感じた。
ダイの脳裏に浮かんでくる、上半身がずれたさそりアーマーの姿、そして真っ二つになってのたうち回るサンドマスターの姿。
ダイの頭の中で「怪物」という少年の言葉がリフレインしている。
ダイの頭の中に次々とイメージが浮かんでは消えていった。
デルムリン島で自分を出迎えてくれたモンスター達の笑顔。
「お兄ちゃんこわいよおっ！」とレオナに抱きついて泣いていたベン

ガーナの女の子の声。
竜魔人となった自分が何か叫びながら大魔王バーンの顔を殴りつけている記憶――
悪魔が背中にしがみついているような気がした。

火の粉

その後の老人の話はまるで耳に入らなかった――

ダイは息をするのも忘れ、ぼうっと虚空を見つめている。

自分は取り返しのつかないことをしてしまったのではないか？

この子の最後の希望の芽を摘んでしまったのは自分なのではないか？

そんなぞっとするような疑念が悪魔の姿を借りて、暗闇から逃げようとしている自分の襟首を掴んでいるようだった。

「ねえ！お兄ちゃん!?」

青い顔をして突然ひとことも喋らなくなってしまったダイを心配し、ベドと呼ばれていた少年が声をかけた。

ダイはハッと気付くと、心ここに在らずという様子で返事をした。

「うん――大丈夫だよ……」

「お兄ちゃんも疲れてるだろ？何も無いところだけどせっかくだから休んでいきなよ」

「う、うん……ありがとう」

老人の後をついていくと、彼らはやや小ぶりな茶色いレンガ作りの家に通された。

家の中は薄暗く、思ったよりも入り組んだ構造になっている。

「ここは例のメイ達の家だ――使ってやっておくれ。部屋は十分にある――」

老人がいなくなると、４人は敷物が引いてある来客用の部屋に集まり、車座になった。

しばらく皆黙っていたが、クロコダインが意を決したように咳払いをして話し始めた。

「ダイ……さっきの事だが……」

脱力した様子のダイが怠そうに顔を上げた。

「お前は自分が例の親子を殺してしまったと思い込んでいるようだが、あの程度のモンスターは砂漠には幾らでもいる。まだそうと決まったわけでは無い――」

ラーハルトもクロコダインの話が終わったのを見計らって矢継ぎ早に話し出した。
「そうですダイ様――私の勘ですが……ブラフマがただ村の人々を脅すだけの為にモンスターにしたとは考えにくい――自分達の根城に連れて帰らなくてはならない何らかの理由があったはずです――「足りなければまた来る」と言っているのに、それをわざわざ途中で置いていくような真似はしないでしょう。また――ブラフマが来たのはおとといと言っていました。少なくともこの砂漠にはあいつらの拠点になりそうな場所はありません。一度攫われた魔族の女子供が砂漠より外側の地点から逃げ出して、短期間であんな砂漠の真ん中まで戻ってくる事が出来るでしょうか――？」
確かに2人が言うことはいかにも正しいような気がした。
「うん……確かにそうと決まったわけじゃないね――」
「ダイ。どうだろうと――降りかかった火の粉を払うのは当然の事だ――実際がどうであろうと、お前が気に病む必要はないぞ――」
「うん……ありがとう。少し気が楽になったよ――」
無理をして笑顔を作るダイをベラは心配そうに見つめていた。
やがて夜になり人々が寝静まった頃、寝付けずにいたダイはひとり中庭に座り、遠くで鳴る風のうなり声を聞きながら、空を見上げていた。
昼間のことを少しでも忘れたかった。
少しでも考えると、背中にあの悪魔が現れるような気がしたから。
空に白く浮かぶ、うつろな光を放つ魔界の太陽を見つめていると、不思議と心が落ち着いた。
その時、ダイは隣に人影があるのに気付いた。

月夜

顔を上げると、微笑んでいるベラと目が合った。
「やっぱりダイ様でしたか――」
ダイは彼女から少し斜めに視線を外して答えた。
「なんだ……ベラも眠れないの？今日は色々あったもんね――」
「ええ――なんとなく目が冴えてしまって――」
ベラはそう言うとダイの隣に座った。
ふたりはしばらくひとことも喋らずに、ただ遠くから聞こえる風の音を聴いていた。
――魔界の太陽はその昔、神によって作られたという。
不安定に形を変える魔界の空の中で、妙にくっきりとした輪郭をもつこの白い天体――
どんな役目があるのかは定かではないが、一説には神が魔界の民を憐れんで作ったとも言われている。
実際、それは誰も気付かぬうちに魔界に暮らす人々の心の拠り所となっているのかもしれない。
むしろ、ただそれだけの為に存在するのかもしれない。
風の音が途切れたとき、ダイは不意にベラに訊いた。
「ねえ――ベラはあの子の友達は無事だと思う？」
「――やっぱりその事が気になるんですね……」
「――うん……」
「うーん……私も、あの時倒したモンスターが例の親子であった可能性は低いと思います。ただ――ブラフマに攫われた人達が無事でいられるかは――正直、分かりません」
「――ああ……そうだよね。まずブラフマに攫われた事を心配するべきなんだよね……おれがあの子の友達を殺してしまったかどうか、って事よりも……ずっとはっきりしてることなんだから――」
ダイは落胆した様子でため息混じりに呟いた。
「おれ……勇者失格だよ――」
ベラはあっけらかんと答えた。

「――ダイ様。勇者に相応しいかどうかなんて、どうでもいい事じゃないですか？私はダイ様にそんな事を求めないですよ？」
ダイの身体がぴくりと動いた。
しかし、気にせずベラは続ける。
「生きているんだから――自分の気持ちを優先したい時があるのは当然なんじゃないですか？ダイ様は優しいから、自分より周りの人の気持ちを優先してしまうから――そうしちゃいけないって思ってるだけで」
「――おれって優しいの？」
ダイの声が震えている。
「はい。きっとこの世でいちばん――少なくとも私が今まで会ったことがある人の中ではいちばん優しいと思います」
「そうかなあ――」
「そうだ！――これからはダイ様が戦うのが嫌な時は戦わない、って決めたらどうですか」
「えっ!?そんなの――駄目だよ」
「何でですか？」
「だって……戦わないと弱くなっちゃうし――なんか自分だけ楽してるみたいで気持ち悪いよ……」
「――何なら私、弱いダイ様もいいなって思います。なんだかかわいいし……そもそも、強いとか弱いとかって、ダイ様に戦って欲しい人達が勝手に言ってるだけですよね？ダイ様は強いんです。竜の騎士なんですから」
「ベラはもし、おれがめちゃくちゃ弱くなってもそれでいいの――？」
「はい。私、弱い人好きですよ」
きっぱりと言うベラにダイは呆れたようにため息をついた。

涙

ダイは難しい顔をしていたが、すぐに堪えきれなくなって笑い出した。
「――っあはははは！ベラって面白いね」
「えっ？そうですか？」
「――うん、だってそんな事、誰も言わないよ！弱いおれがいい、なんてさ――」
「――弱いほうがいい、とは言ってないです――ダイ様が別に弱くてもそれはそれでいい、ってだけで」
「えーっ!?どっち？よくわかんないよ？」
「うーん……まあでも、確かに弱いダイ様も見てみたいというか――」
「……??」
混乱しているダイにベラは人差し指を立てて言い聞かせた。
「――とにかく、次に戦う時にはダイ様は私たちに指示を出すだけで戦わないでいてみてください」
「うん――でも……出来るかな？」
「出来ますよ！あっ――もしかして私の事を信用してませんね……」
「えっ？そんな事ないよ！」
「こう見えても私、ヴェルザーの娘なのでけっこう強いんです――ダイ様ほどではないけど……だから簡単に死んだりしないので安心して下さい」
「……そんなこと――」
「ダイ様が戦わなくても負けはしません！――クロコダインさんやラーハルトさんもいるじゃないですか」
「うん。じゃあ――そうするよ。でも、なんか変な感じだなぁ……戦わないでいい、って言われるなんて」
「ふふ――あっ……そういえば私、あのふたりと一緒に戦ったのって、この前の砂漠が初めてじゃ無いんですよ」
「えっ！そうなの？」
「はい――ダイ様が忘れ物を取りに行ったあの時、実は溶岩のモンス

ターが現れて……」
「えーーーっ!?」
「その時にラーハルトさんに褒められました。『認めてやってもいい――』って――」
少し笑っているベラにダイは苦笑いで返した。
「ああ……言いそう――だね……」
「でも、よかったよ――おれ、ずっとふたりのこと心配だったから。大丈夫かなぁって」
「仕方がないです――いくら父の命令とはいえ、あんな事をしたんですから……ダイ様の事もずっと苦しめてしまって――それなのに……私の事をいつも庇ってくれて――私……」
だんだん声が小さくなっていくベラの顔をじっと見てダイが言った。
「おれ――弱いベラも好きだよ――」
ベラは一瞬えっ?という顔をすると、顔を赤くして言った。
「それ、私のマネですか――?さっきそんな顔して私言ってましたか?」
「――ううん、覚えてない――」
真剣な顔をして言うダイを見た瞬間、ベラはしゃくり上げるように笑い出した。
ダイも顔を作るのが限界になったのか、すぐに表情を崩した。
「そういえば――忘れ物って何だったんですか?」
「えっ……!?それは――教えられないよ――!」
ダイが悪戯っぽい顔で言うと、ベラは少し溜めを作りつつ真顔で聞き返した。
「――――島に、別の女が居るんですか?」
「別の女、って何のこと??」
逆に真顔で聞き返されたベラは非常に狼狽した。
「いえ――何でもないです――」
その後、ふたりはダイの寝室に移動して朝方まで色々な話をした。
やがてダイがうとうとし始め、相槌のタイミングが不安定になって

きたのを見計らってベラが言った。
「そろそろ寝ますか――明日もありますし」
そう言い終えるとベラも大きなあくびをした。
「ダイ様――おやすみなさい」
「うん――」
そのままごろりと横になってしまったダイにベラは布団をかけた。
彼女は寝息を立て始めたダイを見て、呟いた。
「ダイ様――あなたを決して――死なせません」
細く黒い紐でできている首輪のようなネックレス――中央に涙型の小さいチャームが揺れている。
彼女はそれを軽く指で弾いてから、寝ているダイの頬にくちづけた。
外で再び風の音がした。

砂塵

翌朝、ダイたちは軽い食事をご馳走になり、砂漠の村の住人達に丁寧に礼を言うと再び北に向かった。

いつもは迷わず先頭を歩くダイだったが、今日はクロコダインに続いて少し後ろに下がった位置を歩いている。

その事に気付いたラーハルトはダイの様子を注意深く観察した。

（やはりダイ様は昨日の話を気にしているのか……無理をさせるような事があってはいけないな――）

「――ねえ。みんなちょっと相談なんだけど――」

皆がダイの方を向いた。

「今日はおれは戦わないで、みんなに指示を出すっていうのは――どうかな――？」

下を向いてダイが言うと、クロコダインは胸を叩いて言った。

「ああ、構わんぞ――大将はいざという時に出ればいいのだからな。オレに任せておけ」

「――もちろんオレも賛成です。竜騎将としてダイ様が指示を出すのは当然の事……何なりとご命令下さい――」

「私も賛成です――」

こちらを向いているベラは（ね？）という顔をしている。

「――みんな、ありがとう。じゃあ――おれ、慣れないけどやってみるね」

砂漠の向こうに黒々とした岩山が見えてきた。

ヴェルザーの城にかなり近づいてきている。

昨日と比べてダイの気分は落ち着いていたが、心の奥底では――

このままモンスターと出会わなければ良いのに――と思っていた。

自分が戦わないとはいえ、間接的にモンスターにとどめを刺す事には変わりはないのだから――

いざ戦闘に入ったら、本当に指揮を出せるのだろうか。

怖気付いて仲間を置いてその場から逃げ出してしまうのではない

か――

しかし、ベラはそんな弱い自分の事も好きだと言うのだろう――

（……だから簡単に死んだりしないので安心して下さい）

ベラの言葉が頭の中に甦ると、ダイは自分が何処までも落ちていくような不安な気持ちになった。

上の空で歩いていたダイは、不意に何かにつまづいてよろけた。

足元をよく見ると、砂に埋もれているモンスターの骨だった。

よく見ると、旅をしていたであろう者の踏み荒らされた屍や衣服の切れ端も周囲に散らばっている。

旅人達がモンスターと戦った結果相打ちとなり、そのまま両方とも動けず力尽きた結果、遺骸が風化してしまった――

そんなところだろうか。

「……哀れなものよ」

ラーハルトが沈痛な表情で言った。

「砂漠の出口付近は旅人も油断しているからな……モンスター達にしてみれば絶好の狩場という訳だ――この辺はエサになる物も殆ど無い……」

それを受けるようにクロコダインが淡々と呟いた。

その時、遠くから笛のような、悲鳴のような鋭い音が聞こえてきた。

「――これは……竜の声です」

ベラが言うと皆は耳を澄ました。

「でも、こんな鳴き方普段はしません――身に危険が迫っていたり、子供に危険が及んでいるなどの緊急時以外には……」

「ヴェルザーの城の方？」

「おそらくは――」

「一体ブラフマ達は何をしようとしてるんだろう……」

その時、ズン――と地鳴りのような音がし、突然地面から砂塵が吹き上がった。

後ろだ――
誰かが叫んだ。
しかし噴き上げられた砂埃のせいで敵の大きさや種類が把握できない。
姿の見えないモンスターが砂の中からいきなりダイたちに襲いかかって来た。
突然の鋭い一撃――
「ぬっ!!」
クロコダインは腕を反射的に引っ込めた。
「クロコダイン!!腕切られてる!」
「大丈夫だ……!回復が必要な程ではない――」
クロコダインは血が滲んでいる腕を荒々しく擦ってみせた。
ようやく目が慣れてくると、砂を吐き出しながら敵はその姿を現した。
じごくのはさみ、そしてサンドマスター2体――
ダイ達がモンスター達の姿を認めた直後、サンドマスターが体を大きく捩らせ体当たりしてきた。
攻撃体勢がまだとれていないラーハルトは咄嗟に槍を構え防御した。
強い衝撃に思わず後ろに仰け反りそうになる。
「くそッ……オレとした事が、あの声に気を取られて気配に全く気付けなかった――!」
体勢を整えようとした矢先、続いてもう一方のサンドマスターが砂を吐きかけてきた。
再び砂煙に包まれるダイ達――
その時ダイは背後に身震いするような気配を感じた。
とても禍々しい……悪魔のような――
ダイが振り返ると、そこに巨大なおおさそりがいた。

悪魔

普通サイズの3倍はあるだろうか――
目の前に立ちはだかったおおさそりが尻尾の先をこちらに向けて威嚇している。
腹部の横から伸びる夥しい数の脚と悪魔の尻尾のように反り返った毒針。
そしてぴかぴかと光る禍々しいハサミ――
その身震いするようなグロテスクな造形は、まるでこの世の悪意を凝縮した存在のように見える。
悪魔は背中やハサミからさらさらと砂を落としながら、ダイを追い詰めるように近づいてきた。
いつの間にかまたダイの頭の中に呪いの言葉の断片が甦ってきた。
(――母親はサソリの化け物――メイと弟は巨大なミミズのようなモンスターに)
(『ダイ』という怪物を倒す為――)
(死んじゃえばいいんだよ――)
(お兄ちゃんこわいよおっ!)
ダイが差し迫っている危険にようやく気づいたのは、その鋭く尖った毒針が振り上げられた瞬間だった。
「ダイ様!」
振り向いたベラの叫び声で我に帰ったダイは素早く後ろに転がると間一髪で毒針を避けた。
しかしダイは戸惑ったまま、戦意を喪失してしまっている。
おおさそりは次は狙いを外すまい、と思っているのか、大きなハサミを振りかざし、ダイににじり寄った。
(ああ――ダメだ――次はやられる――)
指示を出す――なんて言ったけど、結局自分はまともに動けないじゃないか――
後ろではクロコダイン達が別のモンスター達と戦っている。
じごくのはさみがスクルトを唱えているためダメージが通ってお

らず、こちらに気を向ける余裕はなさそうだ。
ハサミがダイの首に振り下ろされる――
弱いって、やっぱりだめだよ――ベラ――。
「ヒャダルコ!!」
ダイが頭を下げてじっとしていると、
突然呪文を唱える声が響き渡った。
ふっと冷気が漂ってきた事に気づき顔を上げると、おおさそりが氷漬けになっていた。
「ダイ様……!よかった――」
「あの――おれ……」
「気にしないで下さい！一旦体勢を立て直しましょう！クロコダインさん達にもベホイミをかけてあげないと」
「そうだね――指示を出すって言ってたのにおれがこんなんじゃ――」
ダイは苦戦しているクロコダインとラーハルトの方を見た。
「……うっ……」
突然ベラの呻き声が聞こえた。
ダイが振り向くと、ベラが地面にうずくまっている。
ダイは地面に何かが転がっている事に気が付いた。
ベラの右手首だった。
おそらくサイズが巨大なため、ダメージは受けつつも、ヒャダルコ一発では体力を完全に削ることができなかったのだろう。
氷の粒で体の大部分をコーティングされたまま、ベラの背後で勝ち誇ったように悪魔はハサミを振り上げている。
「ダイ様――すいません油断しました」
ベラの手首から暗い青緑色の血が滴っている。
何が起きたのか理解できなかったダイは声にならない声をあげた。
「私の血……ダイ様と同じ色じゃないから――びっくりしますよね」
一瞬ダイの意識が遠のく――
「――あああああああああああああああああああああああああああああ!!!!!」

気がつくとダイは絶叫していた。

再生

衝撃が頭のてっぺんから足先まで駆け巡る。
次から次へと声にならない嗚咽が喉から漏れ、気がつくとダイは足をもつれさせながらこの悪魔に飛びかかっていた。
繰り出された青白い竜闘気に包まれた拳は正確に標的を捉え、大岩のようなおおさそりの顔面にめり込んだ。
そのままダイは拳を力任せに振り抜いた。
「おおおおおお!!!!」
一瞬の閃光――!
気がつくと、めちゃくちゃに潰れた悪魔の顔面が取れかけのささくれのようにぶらぶらと揺れていた。
もがき苦しむ悪魔は巨大なハサミをめちゃくちゃに振り回した。
ダイはそれらをひらりとかわし、素手で片方のハサミを掴むと思い切り力を入れ関節の根本から捻り切った。
その様子をベラは呆気に取られたように見ている――
動きの鈍くなってきたさそりの尻尾にしがみつくと、ダイは足を踏ん張り尻尾をむしり取った。
そして、ダイは返り血を浴びるのも気にせず背甲の隙間に両手を入れると、焼き立ての朝食のパンでもむしるように真ん中からバリバリと引き裂いた。
相手はしばらくびくびくと動いていたが、やがてぴくりともしなくなった。
拳に浮かんだ紋章が薄くなってきた頃、息を切らしているダイにベラが話しかけてきた。
「ダイ様――戦わないって言ったのに――!」
ダイは少し苛立った様子で言い返した。
「――今……そんなこと――」
ちらりとベラの方を見たダイは目を丸くした。
ある――
ベラの右手の手首は、なんとそこにしっかりとくっついていた。

ダイは何が起きたのかわからず、頭の中で想像を巡らせた。
幻惑呪文（マヌーサ）か？いつの間にかけられていたのだろうか。
いや、呪文なんかかけられてはいない――
それとも何かの見間違い？いや、そんなはずはない。
確かにベラの口からも「私の血」という言葉を聞いたはずだ。
状況が掴めないダイにベラは手首をぐりぐりと回しながら言った。
「――すいません。私、このくらいならすぐ再生出来るんですよ」
「再生って？どういうこと――？」
「完全では無いですが、私も不死の血を持っているので――ヴェルザーの娘なのでこの位は――」
ダイはそれを聞くとフラフラとよろけて地面に尻もちをついた。
「……」
「私がやられたと思って怒ってくれたんですよね――嬉しかったです」
何か言いたいけれど言葉が見つからず、ただただうなだれるダイの肩をベラはポン、と両手で叩くと、元気な声で言った。
「さぁ。行きましょう！向こうは向こうで大変そうですから――　今度は指示を出してくださいね」
「……うん――」
何事もなかったかのようにベラはダイの手を引いてずんずんと歩いていく。
ダイはベラにされるがままヨロヨロと後ろをついていった――
戦線にたどり着くと、三体のモンスターのうちの一体は既に倒されており、残ったじごくのはさみとサンドマスターに戦士ふたりが苦戦していた。
ふたりに気付いたクロコダインが必死の形相で言った。
「おお！無事だったようだな！お前らどこにいた？」
「遅れてごめんよ」
ダイはモンスター達を一瞥すると叫んだ。
「みんな！先にそのカニみたいなやつを倒そう！」
すぐさまラーハルトが言った。

「――しかし……ダイ様――あいつ攻撃が通らず……」
「大丈夫！ベラ、ラリホーって使えた？」
「はい！」
ベラはすぐに呪文を繰り出し、じごくのはさみを眠らせてしまった。
おおっ、と感嘆の声を出しているクロコダインにダイが訊いた。
「その斧ってバギみたいなの出せたよね？」
「……ああ！効くのか……？」
「多分ね。ああいうカニみたいな甲羅で覆われたモンスターって細かいキズがたくさんつくと案外脆いんだ！」
ダイはデルムリン島で竜巻が発生した時、ガニラス達が慌てて真っ先に避難していた事を思い出していた。
「よし、わかった。喰れ!!真空の斧!!」
鼻ちょうちん？のようにも見える泡を吐きながら眠っているじごくのはさみを真空の刃が襲う。
スクルトで相当守備力が上がっているため、大幅に体力を削れはしなかったが、ダイの読み通り、表面に細かいキズが無数に付いている。
「ラーハルト！狙いをじごくのはさみに絞って！ハーケンディストールでもいいし、それ以外の技でもいいよ！」
「はい！ダイ様！」
すると、砂に潜っていたサンドマスターが砂を吐き出しながら近づいてきた。
こいつも呪文の影響で相当に守備力が上がっているはずだ。
「ベラ！なるべくこっちに引き寄せてからヒャド系呪文をかけて！カニのやつにも一緒に当てたいんだ！」
「はい！わかりました！」
サンドマスターの攻撃をかわしながら誘き寄せると、ベラは手を伸ばした。
「マヒャド!!」
敵全体を氷と吹雪が襲う。
サンドマスターとじごくのはさみが凍ってしまった。

「今だ！ラーハルト！」
ラーハルトは大きくジャンプし、真上から衝撃波を放った。
「ハーケンディストール!!」
ヒビの入った甲羅に会心の一撃を喰らったじごくのはさみは鈍い音を立てて真っ二つになった。
それを確認するとダイはベラ達に叫んだ。
「任せたよ！」
獣王は我が意を得たりと頷くと、サンドマスターに素早く近づき渾身の力で武器を振り下ろした。
魔物の群れが一掃されると、クロコダインはダイの肩を叩いて言った。
「――ダイ……さすがだな。モンスターに対しての見立てでお前の右に出るものはいない――そして指示も的確だ。やはりお前にはリーダーの素質がある」
ラーハルトも不甲斐なさそうに首を垂れた。
「ダイ様――不意を突かれてこのざまです――ダイ様の指示がなかったら戦いはいたずらに長引いていたでしょう――」
「ダイ様。もう戦わなくても大丈夫そうですね？」
ベラの言葉にダイは首を振った。
「ありがとう――おれ、もう大丈夫だよ。これで良いのかよく分からないけど――お陰でなんか吹っ切れたと思う」
「そうですか――じゃあ、良かった……」
そういうと、ベラは何かに気付いたように付け足した。
「ダイ様――自分の中だけでこっそり感情を処理したり、相手に気を遣って自分の気持ちを押し殺したりしないでも良いんですよ――ダイ様が自分らしくいられることがいちばん大事な事なんですから」
「うん――ちょっと難しいけど、おれはおれらしく、っていうのは何となくわかるよ。きっとそれって、みんなもそうだよね――」
皆が黙って頷いた。
「おれ――弱い時もあるけど、よろしくね」
ダイが照れくさそうに言うと、ベラはダイの手をぎゅっと握った。

マー君

ちょうどその時、バサっという音がして、ダイ達の頭上を何かが通り過ぎた――

しかし身構えた時には既に時遅く、それは凄まじいスピードで空の彼方に飛び去っていった。

「なんだ?今のは――?モンスターか?」

目を瞬かせながらクロコダインが呟いたが、もう確かめようがない。

その事に気付くと、彼らは気を取り直し歩き始めた。

しばらく歩き砂漠を抜けると、目の前に黒々とした大地が広がった。

ラーハルトが地面の枯れ草を踏みしだきながら呟いた。

「――しかし、またここにやって来るとはな……」

暗い森を抜け、一行がヴェルザーの城に向かう山道の入り口に差し掛かった時――

がさり、という音と共に木の陰からモンスターが現れた。

赤いゼリーのような透き通った体にブルーの触手。

ベホマスライムらしいが、ところどころにキズを負っている。

こちらに気付いている様子はない――

ダイ達が岩の陰に隠れてその様子を見ていると、フワフワと漂っていたベホマスライムは左右に揺れた後、力尽きベタっと地面に落ちてしまった。

それを見るや否やダイは駆け出した。

「大丈夫!?」

見るとダイはこの倒れているスライムのそばにしゃがみ込み、傷の深さを調べている。

3人が近づくと、ダイは悔しそうに呟いた。

「瀕死だ……もう自分でベホマをかける力もない――」

ダイはいそいそと腰の袋から薬草を1枚取り出した。

良く揉んだそれを何枚かに千切った後、スライムの口に押し込み、

入りきらなかった分は傷に擦り込んだ。
「なんとかもってくれよ――」
ダイが祈るように呟いた。
すると、少しずつベホマスライムは息を吹き返し、やがて空中に浮けるほどにまで回復した。
「やったー！」
「ダイ様――何故こいつを助けたのですか？」
ラーハルトが訊くと、ダイは微笑んで答えた。
「なんか――ほっとけ無くてさ――それにこいつはそんなに悪いモンスターじゃない。あまり殺気みたいのを感じないし、おれたちと会って寧ろちょっと困ってるみたいだ――」
ダイの言う通り、目の前のモンスターは攻撃を仕掛けてくる様子もなく、おろおろとダイ達の周りを飛び回っている。
「そうだ――！回復した所で悪いんだけど……」
ベホマスライムはダイに呼びかけられると、突然ビクッと身体を震わせて止まった。
「もし良かったら――おれたちと一緒に来てくれないかな。ブラフマってやつと戦うのに回復ができる仲間が居ると心強いんだ――おれはダイって言うんだけど、モンスターの友達もいっぱいいて……」
ダイという名前を聞いた途端、ベホマスライムはあからさまにショックを受けた様子で震え始めた。
（あっ……）
砂漠の村での老人の言葉が皆の脳裏に浮かんだ。
ベラが半信半疑のまま、安心させるように猫撫で声で言った。
「大丈夫――ダイ様は悪魔なんかじゃありませんよ。それにブラフマを倒せば元に戻れるかもしれませんよ――」
ベホマスライムはしばらくの間、細い触手で腕組みをしながらぐるぐると辺りを飛び回りつつ逡巡していたが、やがて観念したかのようにダイの元に戻ってきた。
「ありがとう。心強い仲間が増えたよ――よろしくね！」
ダイが満面の笑みで触手を握った。

「あっ、でも――そうだ。きみの事、なんて呼べばいいんだろう？」
そう言うとダイは腕組みをして真剣に何かを考え始めた。
皆が固唾を飲んで見守っている――
突然カッと目を見開くとダイは嬉々として話し始めた。
「――そうだ！魔界で会ったから、『マー君』っていうのはどうかな――？」
ベホマスライムはガーンと衝撃を受けている。
「ま、まあ……良いんじゃないでしょうか――」
ベラが笑いを堪えながら振り返ると、クロコダインとラーハルトはベラと目を合わさないようにそっぽを向いて咳払いをしている。
「じゃあ、『マー君』で決まりだね!!」
ダイがそう言うとマー君は再びショックを受けた。

異形

ダイ達は山道を超え、かつての死闘の地であるヴェルザー城にたどり着いた。
瓦礫の中を歩いていると、再びどこからか竜の鳴き声が聞こえてきた。
悲しげな笛のような音がこだましている。
「さっきより近いな……どこにいる？」
ベラが殺伐とした景色を見まわしていると、
突然背後から笑い声が聞こえてきた。
「はははは！予定通り、君たちの方からやってきてくれて感謝していますよ！」
ダイたちが振り向くと、そこにブラフマが腰に手を当てて立っていた。
「おまえが……ブラフマ――」
ダイは静かに呟いたが、その言葉の奥には激しい怒りがこもっていた。
「そうですよ。本当はもう少し早く会えるはずでしたが――」
ブラフマはこちらを値踏みするような目で見まわした。
「――やっぱりあのネズミ君は来てないですね。まあ妥当か――ダイくんはどの子ですか？その槍を持ってる子かな？」
「ダイは、おれだ」
目の前の少年が言うのを聞いてブラフマはふっ、と口の端で笑った。
（なんだ……こんなガキとは――ビシュヌの奴、こんなのに執着してたのか――）
「ダイ君。やっと会えましたね。ここは私にとっても苦い経験がある場所でしてね。――だから是非ここで決着をつけたいと思ったんです。それにこの場所はきっと馴染みがあるでしょう？」
そう言ってブラフマは髪を掻き上げると、ベラをチラッと見た。
「全く、君がトロいせいで私はビシュヌにどやされたんだ――腹立た

しいが仕方ない。だって君は――」
「言うな！」
ベラが突然顔色を変えて叫んだ。
「――今この場で死んでも良いんだぞ……」
その言葉にダイが「うっ」と反応した。
それに構わずふたりは話し続ける――
「おお怖い――そんな事をされたら僕の命も危ないですからね……でも、知ってますよ。君はお父上と同じように不死の血を持っているんでしょう――？そんな脅しをされてもね……」
ブラフマが肩をすくめた。
「さっき偵察に行かせた魔物から聞きましたよ。先に知ってたらあんなに焦らなかったのに――やれやれです」
ベラが舌打ちをすると、ブラフマはちらりとダイ達を見てから言った。
「まあ……良いでしょう。これ以上ビシュヌからチクチク言われても面倒ですし、ここはフェアに行きましょうか」
「――おい、ヒムはどうした？」
クロコダインが問いただすと、待っていたとばかりにブラフマは口を開いた。
「無事ですよ……」
ダイ達の顔がホッと安堵の表情になった。
「にわかには信じられませんが……ダイ君はあの大魔王バーンを倒した勇者という事ですから、まともにぶつかっては分が悪い――ただオリハルコンの坊やにも代わりに働いてもらうつもりです」
ラーハルトが怪訝な顔で訊いた。
「働いてもらうだと――？」
「はい――私の能力については知っていますか？」
ダイの頭の中に嫌な予感が広がった。
「ああ、表情で分かりますよ。あのネズミ君から聞いたのですね――それなら話は早い」
「地上は素晴らしい場所ですよ――命に満ち溢れていてね……でもこ

こは違う。強い戦士を作るにはその辺の岩とかを使う訳にはいかない――」
「おまえ……まさか――!!」
ダイが拳を握りしめて叫んだ。
「――魔界生まれの者は生まれつき魔力との親和性が高いので、うまいこと操れるんですよ……そしてオリハルコンは魔界の金属……おっと皆まではやめておきましょう。お楽しみは取っておかないと」
「さあー・神の為に役に立つ時が来ましたよ!・皆さん怪物を倒すのです」
合図と同時に、瓦礫の奥から何かが呻き声をあげながらわらわらと溢れ出した。
大人、子供、老人、男に女――
モンスターと合成され、異形の生物となったかつて人であった者たちがダイ達の目の前に立ちはだかる。
マー君はぶるぶると震え、ベラの後ろに隠れた。

稲光

悪魔のような翼を生やし槍を持ったトカゲのような顔の男。
両手が蛇のように長く、体の下半分が燃えている妖艶な美女。
顎ひげを地面まで垂らし、杖を掲げた骸骨のような老人。
目が吊り上がっているのに口元だけ笑っている、鎌を持った少年。
そして、目を瞑った少女の顔が正面にくっついた口から火を吐く毒々しい色の芋虫――
その他含め、十数体程の怪物達がダイに向かってよろよろと近づいてきた。
ブラフマは顎を撫でながら満足気に言った。
「なかなか大変でしたよ。力が強くても知性が低すぎると操れないので、ベースを何にするかは迷いました――逆に賢くても子供だと力がないから3人くらいまとめて合成したりね――まだ動きがぎこちないですが、彼らがこの姿を完全に受け入れれば良い動きになってきますよ」
反射的に後ずさるダイを見て歯軋りをすると、クロコダインが言った。
「見下げ果てたやつだ……これではダイに攻撃など出来るわけがない――」
「――ダイ様……!!」
ベラはダイに素早くスカラをかけた。
ダイの体が青白いオーラに包まれる。
「おっ……賢明ですね。しかしいつまで持つか――」
四方八方から押し寄せる怪物――
どうする事もできないダイは両手を握りしめながら体を丸め、防御の体勢を取っていたが、あっという間に囲まれてダイの姿は見えなくなってしまった。
よってたかっていたぶられているダイの呻き声が怪物たちの間から漏れている――
（うっ……ぐっ……）

ベラは限界までスカラをかけると、唇を噛みつつダイの様子を窺っている。
見かねてラーハルトが叫んだ。
「ダイ様……！もう十分です……こいつらはもう元には戻れません……もはや砂漠に蔓延るモンスター達と同じです――構いません。反撃してください――!!」
ダイの返事はない。
「ええい！貴様を倒せば済む話だろう！覚悟しろ！卑怯者！」
クロコダインは吐き出すように言うと、武器を構えてブラフマの方に走り出した。
ブラフマがふんと鼻を鳴らして言った。
「あなたも気が短いですね……あのネズミくんの仲間かな？念の為に聞きますが、私を倒すつもりならあの哀れな怪物達も道連れにしますが良いのですか――？」
クロコダインの足が止まる。
「ぬうっ……！しかし、ダイの命には代えられん――許してくれ……ダイよ……！」
クロコダインが武器を振りかざし、ブラフマの首に切っ先が触れそうになったその時、重い衝撃が肩に走った。
「なにいっ……!?」
ふたりを分つように飛んできたそれはダイの剣だった。
振り返るとそこには怪物達の間から手を出しているダイがいた。
息が上がっているが、その目の輝きは失われていない。
「おい！ダイ！どういうつもりだ。こんな卑怯な奴に付き合う必要などない……！」
「――大丈夫だよクロコダイン。こいつはおれが倒す――」
「ほう……面白い子ですね――」
空に重く垂れ込めた雲から稲光が光った。

器

「一応確認しておきますが、どうやって私を倒すおつもりですか――」
ブラフマが嘲るような表情で訊くと、ダイは眉ひとつ動かさずに答えた。
「――おまえは神なんだろ……？ならそれくらい分かるんじゃないのか？」
「――ふふっ……ふはははっ!!」
ブラフマは肩をすくめ、呆れたように笑った。
そしてベラ達を一瞥すると憐れむような口調で呟いた。
「さすがの勇者ダイでもこのザマですよ――大人しくしていればまだ苦しまなくて済んだものを……良いでしょう――少し早いですが、お望み通りの地獄に連れて行ってあげましょう――」
ブラフマは指をぱちんと鳴らすと、ダイを取り囲んでいた怪物達がいっせいにブラフマの方を振り向き歩き始めた。
支えを失ったダイはがくりと肩を落とし、膝をついてしまった。
ベホマの効果か、息は上がっているものの傷は殆どない。
怪物達に囲まれているブラフマは何かをごにょごにょと唱えると、首にかけている数珠のひとつを握った。
すると胸元から光が放たれ、その光が一瞬わっと明るくなった。
「うっ……！」
ベラが両腕で顔を隠した。
しかしすぐに光は消え、ダイ達とブラフマの間に見慣れたシルエットの人物が現れた。
美しい銀色の髪が魔界のくすんだ景色の中だと一層輝いて見える。
身体のキズやヒビは完全に復元されているようだ。
「ヒム！無事だったのだな!!」
クロコダインが叫ぶと、ヒムはゆっくりと目を開いた。
周りをぐるりと見渡し、状況を把握しようとしている。
「おっ……お前ら！」
「無事だったんだね。ヒム……！」

ダイが顔を綻ばせると、彼は固い表情で言った。
「ああ、そうか……オレとしたことがヘマ踏んじまった……お前らを巻き込むつもりは無かったんだが……すまねえ――」
ラーハルトが眉間に皺を寄せて訊いた。
「ヒム、お前は体に何もされていないのか――？」
「ああ――だけどよ……このままはい、さようならって訳にはいかねえみたいだな――」
そういうとヒムはブラフマを睨みつけた。
「ふふっ。よく分かってるじゃないですか――あなたにはこれから働いてもらわないと」
そう言うと、ブラフマは首の数珠を掴み、ブツブツと呪文のようなものを唱え始めた。
ダイ達が普段使っている呪文とは違う言語のようだ。
続いて歌のような節が付けられた詠唱を何度も繰り返しているうちに、呪文は一種の波のように広がり、一定のリズムでダイ達の体を揺さぶり始めた。
（――ザラキに似ているがこれは一体――？）
ベラが構えの姿勢を取りながら仲間達の様子を伺っている。
ダイやクロコダイン、ラーハルトも同じ様に辺りを伺っていた。
「うっ……!!」
突然ヒムが頭を押さえて苦しみ出した。
「ヒム!!」
ダイが叫んだ。
ヒムは何かに抗おうと耐えているように見える。
――それと同時に、ブラフマの周りにいる異形の怪物達の体が光り始めた。
「誰にも、どこにいても、何を使っても殺されない体を持つ、強く美しき者――　神の為の尊い犠牲となり、今こそ悪魔の子を討て――――！」
詠唱をやめたブラフマが叫ぶと怪物達はさらに大きな光に包まれた。
そして次の瞬間、その光は3つに分かれ、ヒムの体の中に向かって

飛んでいった。
光がヒムの中に入ると、空に立ち込めた暗雲から、一筋の稲妻が落ちてきた。
「ヒム!!」
轟音が鳴り響き、砂煙の中から現れたヒムの姿が見えた時、ダイは恐れ慄いた。
ヒムの顔の両側にそれぞれ竜と獅子の顔がついており、背中には竜の翼が生えている。
「お待たせして申し訳ありませんね。やっと完成しましたよ。竜、モンスター、魔族を組み合わせた最強の生物――『アシュラ』です。前から構想はあったのですが、この器になれる存在が魔界では見つからなかったのですよ――魔力の器としての強度とそれに耐えられるだけの精神、そして生命力、オリハルコンの坊やは奇跡的にそれらを全て満たしていました」
黄金色に神々しく光るヒム、いや、かつてヒムだったものがダイ達に立ちはだかった――

黄金の悪夢

黄金色の闘気に包まれたアシュラはしばらくダイ達を睨むと、次の瞬間、ほとんど音も立てずにダイの射程距離に接近した。
もはや瞬間移動と言ってもいいスピードである。
繰り出された拳を咄嗟に避けたダイの頬の隣に黄金の軌跡が残っている。
（――速い……！）
唖然とするダイ。
「おい――」
それを見ていたラーハルトがベラの耳元で囁いた。
ベラが振り向くと、そこには眉間に皺を寄せた陸戦騎の顔があった。
「連携するぞ――この状況ではそうしなければダイ様をお守りできない」
「そうですね。比較的スピードが速い私たちがダイ様の死角をお守りしましょう」
「――ふん……わかっているじゃないか――お前と組むなど――」
「不本意だが――でしょう？」
ベラが笑って言うと、ラーハルトは鼻を鳴らしながら不器用に口の端を上げた。
「ダイ様！私たちが盾になります！隙を作りますのでその間に攻撃を！」
ベラが翼を広げてダイの頭上に向けて飛び立つと、ラーハルトも同時に駆け出し、ダイの背後に滑り込んだ。
「ふたりとも……」
ダイが呟くと、それに答える前にラーハルトが頭越しに叫んだ。
「クロコダイン！ダイ様の攻撃の補助とあいつの監視を頼む」
「ああ！わかった――」
そのやり取りを聞いたブラフマは腕を組んだままニヤニヤと笑っている――

「――ダイ様！来ます!!」
ベラがが叫ぶと同時に、アシュラはダイめがけて突きの構えをしたまま突進してきた。
「ただまっすぐ突っ込んでくるとは……オレたちも舐められたものだな！」
ラーハルトが言うと同時に、アシュラは黄金色のオーラを撒き散らしながらマシンガンのような高速の突きを繰り出した。
嵐のような攻撃をダイとラーハルトふたりがかりでガードする。
致命傷を避けるために攻撃を弾くだけで精一杯のようだ。
とても反撃の隙など与えてくれそうにない――
そう思ったベラは素早く滑空し、アシュラの背後から攻撃を試みた。
「マヒャ――」
しかしその瞬間、アシュラの背面の顔が魔族の少女の顔に変化した。
「おねえちゃん！やめて！こわいよ！」
ベラはうっ、と詠唱の言葉を引っ込めると、身体をこわばらせた。
「わたし、何にもわるいことしてないよ！」
少女の目から大粒の涙が溢れている。
ベラが観念したように両腕を降ろした瞬間、少女の顔がぐるりと周り、竜の顔と目が合った。
「愚かなものよ、戦いをやめるがいい。我は不死の存在なり」
そう言うと、竜の口から激しい炎が吐き出された。
瞬間的に翼と腕で防御したものの、熱風の衝撃で吹っ飛ばされ、ベラは地面に強かに打ち付けられた。
「ベラ!!」
ダイは叫ぶと、攻撃を受け流しながら呟いた。
「やっぱり――攻撃する事は出来ない……あいつ、最初からこれを狙ってたんだ――」
「聞こえてますよ――なんの事でしょうね？」
「最初からまともに戦う気など無いというのか！」

クロコダインが叫ぶと、ブラフマは落ち着き払った声で言った。
「言ったでしょう？　誰にも、どこにいても、何を使っても殺されないって――まあ、普通に倒そうとしてもあなた達には無理でしょうけどね」
するとふいにアシュラの攻撃が止んだ。
その隙にダイとラーハルトはすぐさま倒れているベラに駆け寄ると、ベラの傷の具合を確認した。
ベラは炎の直撃を浴びたせいで痛みのためか起き上がれずにいる。
「大丈夫だ――思ったよりダメージは受けてないよ」
ダイが言うと、ラーハルトは少し安心したようにため息をついた。
「そんなにのんびりしていていいんですか？」
ブラフマが顎をしゃくってみせる。
その先には体が妖しく光っているアシュラの姿があった――

命の尊厳を

アシュラの体が怪しく蠢いていた。
ぴんと伸びていた背中が今は獣のように丸まり、小刻みに震えている肩から夥しい光が放たれている。
地鳴りのような声で咆哮をあげると、紫色の液体を飛び散らせながらもう一対腕が生えてきた。
「……！」
ベラが微かに顔を顰めている。
僅かに荒くなっている呼吸を整えると、アシュラは胸の前で４本の腕で印を作り始め、異国の言葉であろうか――経のようなものを唱え始めた。
蛇のように動く指が次々と形を変えてていく。
その間、ダイたちは何故か体が凍りついたように動くことが出来なかった。
《不　空　大　――》
それまで閉じていた目が開き、アシュラの全身が黄金の炎に包まれた。
そして、不思議な形に結ばれた手から凄まじい光線が放たれた。
全方位に散らばる黄金色の光と爆風――
ダイたちはすぐに防御の体制をとったが、ものすごい力で吹き飛ばされてしまった。
「ぐあっ!!」
クロコダインが尖った岩に叩きつけられ、悲鳴を上げた。
ヴェルザー城の地面に木の葉のように散らばっているダイたちを確認すると、ブラフマは満足そうに笑った。
「分かりましたか――？あなた達に最初から勝ち目などないんです。最強の生物の前には小手先の工夫や努力など意味がないんです――」
「――そんなこと、よく言えるよ――自分が戦ってるわけでもないのに」
やっとのことで立ち上がったダイを見ると、ブラフマは忌々しげに

言った。
「あなた達に何が分かるんですか――」
「えっ……」
予想外のブラフマの答えにダイが一瞬戸惑いを見せた。
「ん――？どうしましたか？」
気がつくと、ブラフマがアシュラの方を見ている。
その方向を見ると、アシュラが頭を抱え膝をついて震えているのが分かった。
（――ダイ……オレだ）
「――ヒム!?」
「やれやれ。一時的にオリハルコン坊やの意識が戻りましたか。頑固というか、なんというか――」
ブラフマが眉間に皺を寄せている。
（すまねえ――この体は……オレの意思ではもう自由に出来ねえんだ。合成された他のやつらも同じだろうよ……）
ラーハルトは顔色を変えずに聞き耳を立てている。
（――だから、もう気にするなダイ――オレはもう悔いなんかねえ。オレが死ぬ程憧れた《命》ってやつをこれ以上……こんなゲスな野郎に踏み躙られるくらいなら……お前に消して貰いてえ。――ハドラー様だって、お前だったら納得してくれるだろうよ――）
「……ヒム――！」
ダイが悲痛な面持ちでつぶやいた。
（オレが憧れた命ってやつは――ちっぽけだけど温かくて――心ってやつもオレなりに――お前らや、デルムリン島の仲間と暮らすうちに……わかってきたつもりだ。良いもんだよ――すごく――だから、もうオレは十分なんだ――）
クロコダインの目に涙が溜まっている。
（ダイ――お前の技で《空烈斬》だっけか？それでオレの魂だけを狙って破壊すれば、多分この怪物は体が維持できなくなるはずだ。上手く

いけば他の奴らも助けられるかもしれねえ――それに賭けてみろ――今のお前なら、アバンストラッシュでも大丈夫かもな――何しろ止められるのはお前しかいない――その後、後ろにいるこのクソムカつくウジ虫野郎をぶっ飛ばしてやれ――頼ん）

ブラフマが後ろから頭を数珠で叩くと、がくりとアシュラは地面に倒れた。

「まだ出来栄えが不十分だったみたいですね――」

武人の意地

「弱い者同士でごちゃごちゃとうるさいですよ――」
　ばったりと地面に倒れたアシュラを踏みつけようとブラフマが足をあげると、低く鋭い声が聞こえた。
「――おい」
「はっ？」
「その足、どうするつもりだ――」
　ブラフマが声のした方に顔を向けると、こめかみに血管を浮き立たせたクロコダインがいた。
「事によっては、貴様……ただでは済まぬぞ――」
　顔に涙の筋を残したまま、わなわなと震えている。
　一瞥するとブラフマは神妙な顔で答えた。
「弱いとは――愚かなこと」
「――はぁ？」
　クロコダインは呆れたように声を漏らした。
「違いませんか――？」
　ブラフマは構わずそう続けると、倒れているアシュラの頭上に数珠を掲げた。
「あああああああ!!」
　４本の手で頭を押さえながら苦しそうに絶叫すると、アシュラは再び金色に輝き始めた。
　すると、クロコダインにわざと聞かせるように、ブラフマは冷たくアシュラに言い放った。
「完璧な強さがなければ……あなたも弱者の仲間入りです。神に等しい存在になるには苦しみも必要なのですから――」
「貴様!!」
　クロコダインが武器を振り上げ、ブラフマの首元に一撃を喰らわそうとした時、不意に金色の光がクロコダインの右胸を貫いた。
「ぐあああっ!!」
　クロコダインは胸を押さえると、苦しそうに跪いた。

黄金色に輝くアシュラが人差し指を前に突き出している。
おそらく、レーザーのようなもので攻撃したのだろう。
「――私の支配を強化しておきました。もう前のようなことは起きませんよ」
ブラフマが言うと、それまで岩陰に隠れていたマー君が、血相を変えて飛び出してきた。
クロコダインに駆け寄り、必死でベホマをかけている。
「ふたりとも――ちょっと聞いて欲しいんだ」
その様子を見て、顔を顰めたダイがベラとラーハルトを呼んだ。
「はい――」
同時に返事をするとダイは小声で話し始めた。
「時間がないから手短に言うね――」
顔を寄せ、ふたりはダイの話を聞いた。
しばしの沈黙が流れる。
ラーハルトは難しい顔をして言った。
「――なるほど、それなら隙をつけるかも知れませんが、果たして……」
「ラーハルト、この作戦を試すなら、今が一番効果的だと思うんだ。あとになってからだと成功率が下がる……」
「確かに――先延ばしする意味はありませんね」
「――ベラはどう思う？」
「――あの竜は先程は気が立っていた様子でしたが、今なら――」
「この作戦はベラが決め手なんだ。タイミングは一瞬だし、それでも上手くいくかわからない――それでもやってくれる？」
「――もちろん」
「ラーハルトはアシュラの攻撃を耐えてもらう必要があるけど……」
「無論、引き受けます。ダイ様の盾になるという言葉に偽りはありません――」
「……よし、じゃあ作戦開始だ！」
ダイの言葉に空戦騎と陸戦騎が頷く。
ベラが大きく飛び上がると、上空で祈るように頭を垂れた。

それを見てブラフマは脂汗を流しているクロコダインに言う。
「――お？あれを見てください。遂に諦めたんですかね？あなたの仲間はもう戦う気がないようですよ。今更、命乞いとか――」
クロコダインは息を切らせながらニヤリと笑って言った。
「ふっ……寝言もいい加減にしろ――オレたちは決して諦めない……自分で戦う事を諦めたお前と一緒にするな」
「ふん。今更勝てるとでも――？」
「オレからひとつ忠告しておいてやる。弱いやつ程でかい口を叩くものだ――ブラフマ、お前も少しは慎め……」
「……武人だかなんだか知らないが、口が過ぎるようですね――あの槍を持った坊やを消したら次はあなたに決めましたよ――」
「わはははは！おおそうか！それならオレの番はまわって来ないな――安心したぞ」
ブラフマはちっ、と舌打ちをすると、首元の数珠を片手で掴んだ。
次の瞬間、クロコダインに稲妻が襲いかかった。
「うぐあああああああっ!!」
――肩をガクンと落としたクロコダインの体から煙が上がっている。
（――クロコダイン、ごめん――今はなんとか耐えてくれ）
ダイは膝を折っているクロコダインを見て、歯を食いしばりながら拳を強く握った――

狼煙

ベラは目を瞑り、精神を集中した。
耳に飛び込んでくる仲間の悲鳴や、鈍い打撃音を必死に頭の中から追い出すと、悲しげに喉を鳴らす竜の息遣いが聞こえてきた。
（――これだ……）
ベラは一呼吸おいて慎重にテレパシーで話し始めた。
（我が一族の者か――）
（――その声は…ベラ様なのですか――？ご無事だったのですね――）
（やはり……ああ――……一体どうしたのだ――？）
（ベラ様……あの男が我が子を――）
（そうであったか……すまなかった――私が不甲斐ないばかりに――）
（いえ、ベラ様のせいではありません――しかし息子はあの金色の怪物に取り込まれて……もうこうなってしまってはあの子を取り戻すチャンスは無いのでしょうか――）
（……その事だが、私達に協力してくれればそのチャンスを作れるかもしれない――）
――ベラが竜と交渉をしているその下で、ラーハルトはひとりでアシュラと対峙していた。
「ぐっ……」
４本に増えたアシュラの腕が容赦なくラーハルトの脇腹をえぐってくる。
ラーハルトは、攻撃の矛先がベラやダイに向かわないこと、その為に自らが致命傷を受けないこと、それだけを意識して戦っていた。
いや、ただ受け流して防御する事で精一杯だった――
（――この速さ……一瞬でも気を抜いたら終わるぞ――）
距離を取ることは容易い。
しかし、そうすると相手はビームなどの遠距離攻撃に切り替えて自分を狙ってくるだろう。

攻撃の間隔は開くかもしれないが、視野が広がり、相手の意識を自分に向けておくことが難しくなるかもしれない。
今は、接近戦を続ける事がベストだ――
そう思った瞬間、アシュラの左フックがラーハルトの顔面を捉えた――
「ぐっ……」
咄嗟に首を後ろに引いたせいで、間一髪顎を砕かれることは避けたものの、正確に急所を狙ってくるアシュラの攻撃は少しでも当たればダメージが大きい。
アシュラは顔色ひとつ変えずに、拳を突き出したまま相手の出方を伺っている。
ラーハルトはぺっ、と地面に唾を吐き、口元の血を拭った。
そして、にやりと笑って言った。
「オレは陸戦騎ラーハルト……簡単にくたばると思ってもらっては困るな――」
風が陸戦騎の髪を揺らした。

――上空――

ベラが作戦の内容を話すと、竜は快く承諾した。
(――分かりました。やってみましょう)
(――感謝する――ただ、あまり時間がない……すぐに行けるか?)
(はい――今向かいます)
(接近しすぎるなよ……)
ベラがちらりと背後を見ると、遠くに竜の姿が見えた。
(合図をしたら始めるぞ――)
暗い空にごう、と一陣の風が吹く音が聞こえた。

想いをつなげ！

ばっ、と翼を翻す音がした。
ダイが音のした方を向くと、上空のベラがこちらを見ている――
彼女はダイを見つけると、こくりと頷いた。
ダイが頷き返すと、ベラは上半身を捻って遠くの空を眺めた。
遠くに黒色の竜がいる。
スカイドラゴンの一種だろうか――光沢のある鱗に覆われているようだ。
竜は首を下げたまま徐々にスピードを上げ、こちらに近づいて来た。
ベラは目の前を通る竜の背中に飛び乗ると、風を切るような音をさせてラーハルトたちの方に飛んでいった。
（頼んだよ――）
ダイは心の中で祈ると、瓦礫に身を隠しながら彼女達の後を追いかけた。
立ち込めた暗雲を貫くように稲妻が走った。
その向こうで――
ラーハルトとアシュラの戦いは熾烈を極めていた。
重い拳をギリギリで弾く。この動きを繰り返していると、時折ぐらりと意識が遠のく――
（くっ……これしきのことで……このザマではダイ様の盾になどなれん――）
その時、空の上から笛のような音が聞こえてきた――
（きたか――）
ラーハルトの顔に一瞬、安堵の表情が浮かんだ。
（息子よ――おお……あなたは主であるベラ様に何をしたか覚えていますか――？誇り高きヴェルザー一族の竜として、恥ずかしいとは思わないのですか――？）
ヒュルルルという高い音が辺りに響き渡る。
それと同時に、一瞬アシュラの動きが止まった。

「ん……？」
ブラフマが怪訝な顔をしている。
「何が起きている――？」
それもそのはず――
ベラと竜はテレパシーを使い、竜の言葉で話していた。
竜の言葉を理解する者以外には甲高い笛の音にしか聞こえない。
（お前はこの私――ベラの顔に泥を塗るつもりか――？誇り高き竜であるお前がこんな下賤のものたちに従うなど――こいつらはお前の仲間たちを蹂躙し、同志討ちまでさせたのだぞ……）
アシュラの周りをぐるりと旋回しながら、ベラと竜の母親が呼びかけると、アシュラは困惑した様子で頭を抱えた。
後頭部の竜の顔が悶え苦しんでいる。
「ああっ――っあああああ……ッ」
ついにアシュラはその場に跪いてしまった。
「なにっ――!?おまえたち……一体何を――」
狼狽しているブラフマの前でアシュラはうう、とくぐもった声を出した。
そしてしばらくすると身体を包んでいた黄金色のオーラは消えてしまった。
「くっ……あの竜と女――何をしたのかは分かりませんが、往生際の悪い――」
数珠を掴んで駆け寄ろうとしたブラフマの動きが止まった。
「おい――オレを忘れてないか……？」
身体から煙を上げながら地面に伏せっていたクロコダインがブラフマの足首を掴んでいた。
「この死に損ないが――しかし、私の雷に打たれて動けるはずが――」
クロコダインは額に汗を浮かべながら言った。
「生憎、このくらいは日常茶飯事でな――それにオレが前にある男から受けた雷撃はこれより強力だったぞ……」
「あなたはどういう身体をしているんですか――？」
「お前のような小僧にオレは殺せん――」

その時、物陰に隠れていたダイが飛び出した。
「ダイ様!!」
地面に片膝をついて、やっとのことで身体を持ち上げているラーハルトが叫んだ。
ダイは全速力でアシュラの方に向かって駆け出していく。
「うおおおおお!!」
雄叫びを上げながら走り出したダイを見て、ブラフマは苛立ちながら叫んだ。
「くそっ――!どいつもこいつも!!」
(ダイ様――)
ベラが上空から不安そうな顔でダイを見守っている――

金の筒

ダイは足元の黒い土を蹴り上げながら突進した。
遠くでブラフマがこちらを見て何か叫んでいる――
しかし、そんな事に構っている余裕は無かった。
ラーハルトがいる辺りまで来ると、ダイは前につんのめりそうになりながら、懐に忍ばせた筒のようなものを素早く取り出した。
そして蓋を開けると、それをうずくまっているアシュラに向かってかざした――
「――おい、何をしている!!」
慌てて走ってきたブラフマの怒号に被さるようにダイの声が響き渡った――!!
「イルイル!!!!!」
呪文を叫ぶと同時にアシュラの身体は眩い光に包まれ、ぐにゃりとその姿を歪めながらダイの手の中にある金色の筒に吸い込まれていった。
あまりの事に呆然としているブラフマにダイは息を切らしながら言った。
「もう――誰も傷つけさせない……!」
――そして背中の剣に手をかけた。
しばし睨み合うふたり――
ダイの荒い息と風の音だけが聞こえていた。
ラーハルトやベラ達も固唾を飲んでその様子を見守っていた。
「――わかりましたよ……」
しばらくしてからブラフマはそう言うと、観念したというように頭を振った。
「一瞬のスキを狙ってその筒のようなものにアシュラを閉じ込める……実にふざけた作戦ですが――今わたしは多勢に無勢――私があなた達に勝てる可能性は低いと言わねばなりません――アシュラを生み出すのに既に相当な魔力を使ってしまいましたし――」
そう言うと、ブラフマは近くの岩にどさっと腰を掛けた。

しばらく俯いて何かを考えていたが、ゆっくり顔をあげると落ち着き払った顔で言った。
「――あなた達はどうせ私を殺すつもりでしょう――最後ですから、わたしの身の上話でも聞いてくれませんか――あなた達も聞きたいでしょう？どうしてわたしがこんな事をしているのか――」
ダイたちは急に態度が軟化したブラフマを訝しんだが、ダイが剣の柄から手を離したのをきっかけに皆構えを解いた。
それを見て、ぽつりぽつりとブラフマは話し始めた。
「子供の頃――周りと馴染めなかった私はいつもひとりでした――魔族の男たちはみんな乱暴で、下品で――誰が誰に勝ったとか、誰から何を奪い取ったとか、どの女を手篭めにしてやった、とかそういうくだらない話ばかりしていたので、わたしは彼らに全く興味が持てませんでした――彼らの事を心の中で軽蔑していましたよ――こいつらは何のために生きているんだろう、ってね――そんなある時、小さなネズミが町で売られているのを見かけました。なぜか心惹かれた私はそれを買って帰り、部屋で飼うことにしました」
「――ネズミ？」
ダイが不思議そうな顔で訊いた。
「ええ、そうです。たまに商人がそういったものを売っていることがあるんですよ。白地に茶色い模様のある小さいやつです――私はそのネズミをカゴに入れて飼っていました。毎日よく世話をしましたよ。出してやると不思議そうに辺りを嗅ぎ回るんです。その様子が好きで私は飽きずにずっとそれを眺めていました――」
「ある時、私にも親友と呼べる友だちができました。彼は私よりも体が小さく、力も弱かったけれど魔族なのに正義感が強く、曲がった事が許せない性質でした。そのせいで周囲とトラブルになることもしょっちゅうだったようです――わたしたちはお互いを似たもの同士だと感じ、すぐ仲良くなりました」

世界の果てで

「ある時、彼は街で乱暴な男が騒いでいたので注意をしたそうです。その男はそれがだいぶ気に障ったようで、それ以来自分のガールフレンドに色目を使ったとか、陰で自分達の悪口を言っているとか、有る事無いこと因縁をつけて友達に付き纏うようになりました。そして、私と仲が良いと分かると、そいつは私の家にも乗り込んできました。彼も私も無視を決め込んでいたのですが、ある晩、酒に酔ったその男が私の家までやってくると一緒にいた友達を強引に連れていってしまったのです。自分は何も言い返せませんでした。心の中では日頃から目を付けられるような事をしているのが悪い、とさえ思いました――」

ひとつ咳払いをすると、ブラフマは話を続けた。

「――翌日、友達は川のそばで頭を殴られて死んでいました。私は恐ろしくなりました。それ以来その男は家には来ませんでしたが、私はこれまで馬鹿にしていた奴らと意識して少しずつ付き合うようになっていきました。相変わらず話は合いませんでしたが、できるだけ相手を理解しようと努めましたよ。遊びにも付き合いましたし、時には家に呼んだりもしました――私なりに周囲と馴染もうとしていたんです。ある時、私が何かヘマをしたかなんかで、彼らのひとりに責められました。私は平然としていましたが、昔、川で殺された友達と仲が良かったことを馬鹿にされたんです。あいつはクズ野郎だったと。私はなんでもないフリをしてやり過ごしましたが、内心腑が煮え繰り返る思いでした――」

「私は家に帰ると珍しくイライラして部屋の中で暴れました。机を蹴ったり、ものを投げたり、壁を殴ったり。私は気がつくと机の上の籠が空になっていてネズミがいない事に気づきました。部屋中を探し、隅に投げた椅子をどかすと、その下に体が半分潰れてもがいているネズミを見つけました。私は目の前が真っ暗になりました。私は気づくとネズミを麻袋に入れて、めちゃくちゃに石で叩き潰していました。中でちっちゃな骨が割れる音がしました。――弱い事が、力が

ないことが全て悪かったんです。友達も、ネズミも強ければ何も起きずに済んだ――力が弱いものはいくら正しいことをしていようと、生きていくことはできないんです――私は悟ったんです。それからすぐの事でしたね。私がビシュヌに会ったのは――」

ダイたちは絶句している。

「――だから、私にはアシュラが、完璧な強さを持つ存在が必要なんです――この世界のためにも――」

ブラフマはヨロヨロと立ち上がり、顔を上げた。

そして、ブルっと震えると、大声で叫んだ。

「返せ!!!返せよ!!!」

次の瞬間、数珠を掴んだブラフマはダイに向かって飛びかかった。

ダイは咄嗟にブラフマの打撃を剣で受け止めた。

ものすごい力で地面に押し込まれそうだ。

どこにこんな力が残っていたのだろう――

「お前は……間違ってる――」

ダイは鬼のような形相のブラフマを睨んで呟いた――